

「世尊。それでは私はあなたに見えないように姿をかくしましょう」。しかし梵人は如何につとめても私から姿をかくすことが出来ず、却つて私は梵天に見えないように姿をかくして。

生まれかわり死にかわり、世の生死に恐を見しかば、生を願わず、喜ばず、執着することなし。

と歌うた。諸天はみな私の神力に驚き、衆生は生きることを樂としてゐるのに、沙門喬答摩は、その生きる力を根本より奪い去つたとつぶやいた。

悪魔は更に天衆の一人の心に乗り移つて、私に説法をとどめるように勧めたが、私は悪魔を見破り叱吒して去らしめたのであつた。

四。一日、ピンガラ・ゴツチャ婆羅門は、世尊を祇園精舎に訪ねて申しあぐるよう。

「世尊。今、世には富蘭那迦葉、末伽梨俱賒黎子、阿耆多翅舍欽婆羅、波羅陀迦延、刪闍耶毘羅胝子、尼乾陀若提子とゆう六人の師匠が、人々に尊ばれて弟子を多く持つていますが、この人々が自ら云いふらしていますように、まことの全智を持つてゐるのでありますでしょうか、又は持たないのでありますでしょうか、それとも或者は持ち、或者は持たないのでありますでしょうか」。婆羅門よ。その事は止めよ。彼等が全智者であるかないか、それは不要のことである、たゞ私の

説く法を善く聞いて信ずるがよい。

婆羅門よ。喩えば人あつて樹の芯を求めて、林に入り、芯のある大きな樹の處へ来て、樹の芯を得ず、樹の肉を得ず、内皮を得ず、外皮を得ず、枝葉を切り取つて歸るとする。眼ある人はこれを見て、「枝葉を樹心と誤り、持ち歸つても、何の役にも立たない」と云うであろう。

又、或人は外皮を樹の芯と思つて持ち歸る。或人は内皮は樹心と思つて持ち歸る。或人は樹の肉を樹心と思つて持ち歸る。眼ある人はこれを見て、「外皮や内皮や樹肉を樹心と思つて持ち歸つても、何の役にも立たない」と云うであろう。然るに或一人がその樹心を切り取つて歸るならば、眼ある人は、「あの男のみ、樹心も樹肉も外皮も内皮も枝葉も知つてゐる。樹心を持ち歸つて役に立たせる」と云うであろう。

五。婆羅門よ。丁度このように、人あつて信仰に依つて出家する。「私は生、老、死、愁、悲、苦、惱に沈んで居るが、この總ての苦惱を無くしたい」と思う。

ここのやう考で出家しながら、供養と尊敬と名譽とを得ると心たかぶつて満足し、自らを讀めて他を毀る様になる。「私はこゝして供養と尊敬と名譽とを得て居るが、他人は出来ない」と、それがたゞめ道に進もうとゆう希望もなくなり、懶惰になされる。婆羅門よ。これは樹の枝や葉を樹心と思つて愚

者である。

又、次の沙門は、供養と尊敬と名譽とを得ても、心たかぶらず道に進む、然し戒を具えて満足し、自らを讃めて他を毀る。「私はこうして戒を具え善い行をしているが、他人は出来ない」と。かくて自分の戒に眩惑して、道に進む希望がなく、懶惰に流れる。婆羅門よ。これは樹の外皮を樹芯と見誤る愚者である。

又、次の沙門は、供養と尊敬と名譽とに溺れず、美しい戒行にもたかぶらず、更に道に進んで、定を得る。定を得て、自らを讃め、他を毀る。「私はこうして心を亂さず静寂を得ているが、他の者の心は散り亂れて居る」と。かくて彼は自分の定に眩惑して、更に高きへ登る希望がなくなり、懶惰に流れる。婆羅門よ。これは樹の内皮を樹芯と見誤る愚者である。

又、次の沙門は、供養と尊敬と名譽に溺れず、美しい戒行にも心揚らず、定にも眩惑しない。更に進んで、明かな智見を生ずるに至つて、満足して、自らを讃め他を毀る。「私は總て明かに知り明かに見て居るが、他人にはこの眞似は出来ない」と。自分の智見に眩惑して、更に勝れた法を實現する希望がなくなり、怠惰になる。婆羅門よ。これが樹肉を切り取つて樹芯と思ふ愚者である。

婆羅門よ。一人の沙門は、信仰に依つて出家し、供養と尊敬と名譽とに溺れず、美しい戒行にたか

ぶらず、自分の得たる定にも眩惑せず、明かな智見を起しても、それに満足しない。更に進んで、勝れた法の實現につとめ勵む。婆羅門よ。明かな知見よりも勝れた法とは何であるか。欲を離れ不善を離れた第一禪、第二禪、第三禪、第四禪、空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非々想處を順次に超えて想受滅定に入ることである。婆羅門よ。これが明かな知見よりも勝れた法であつて、これを實現した人は樹芯を求めて林に入り、樹芯を得て歸る賢い人である。婆羅門よ。供養と尊敬と名譽とは清淨の行のめあてではない。美しい戒行も、堅固の定も、明かな知見も清淨の行のめあてではない。この不動の心の解脱が、その目的である。これが要であり、これが終である。

ピンガラ・ゴッチャは、この教を聞いて、大いに喜び、生涯、優婆塞たることを誓うに至つた。

第七節 四 大

一。祇園精舎において、或日、舍利弗は比丘等に語るよう。「友よ。如何なる動物の足跡も、皆象のなかに収まるように、いかなる善い法も、すべて四聖諦に収まる。四聖諦とは、苦諦、集諦、滅諦、道諦である。

このうち苦諦とのうは、生は苦である、老は苦である、死は苦である、愁、悲、惱、悶は苦である、求むるものを得ざるも苦である。つまり、五蘊で出来上つたこの身體は苦である。云うのである。五蘊と云うは、色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊のことであるが、色蘊とは地大、水大、火大、風大の四大と、この四大から出来上つた物質のことである。この地大に内の地大と外の地大とがある。個人の身體のうちの堅密の性質を有するもの、即ち髮、爪、齒、肉、骨、髓、及び内臓の諸器關を内の地大といひ、外界の堅密の性質のもの、即ち大地などを外の地大と呼ぶのである。水大にも、内の水大と外の水大とある。内の水大とは我々の身體のうちの水分濕性（すいぶんしつせい）のものを指し、外の水大とは大海を初めとして外界の水分濕性（すいぶんしつせい）のものを云うのである。火大にも、内の火大と外の火大とがある。内の火大とは我々の身體の中の煖熱性（だんねつせい）のもの、從つて消化する力を生ずるものを云い、外の四大とは火などの煖熱性（だんねつせい）のものを云うのである。風大にも内の風大と外の風大とがある。内の風大とは流動性（りゆうどうせい）のもの風氣性（ふうきせい）のものを云い、外の風大とは風始め流動性（りゆうどうせい）のものを云うのである。この内外の地大、水大、火大、風大、いずれに對しても、比丘は如實に、「これは私（わたくし）のものでない、私（わたくし）ではない、私の自我（ご）ではない」と知つて執着（しやくちやく）することを止めねばならぬ。

時あつて、水大が狂い怒ると、永遠に變らないもの、よに見える外の地大、即ち大地さえも破壊して、無常のすがたを示すものである。水大は怒つて村を流し町を流し、國をも流し亡ぼすことがあるが、又涸れ切つてなくなることもある。底知れぬ大海も、時あつては、人間の脚までも濕らし得ない時が来る。大海さえも涸れて無常のすがたを示すものである。火大が怒れば村を焼き町を焼き、國をも焼き亡ぼすことがあるが、又、鳥の羽根の扇で火を求めねばならぬ時もある。火大も自ら破壊するものであり、無常のすがたを示すものである。風大が怒れば村を飛ばし町を飛ばし、國中を吹き飛ばして滅ぼすこともあるが、車輪の牙草も動かず、棕櫚の扇に微かな風を求めるときもある。風大も破壊するものであり、無常のすがたを示すものである。

天地をつくる偉大な地水火風にして、猶こわれ易く、無常轉變のものであるとすれば、況して、この束の間の存在に過ぎないこの身體に執着すべきものがあるであろうか、「我である、我所である、我が自我である」と云うべきものがあるであろうか。

二。友よ。比丘を非難し譏謗する人がある時、比丘はこのように考へる。私が今、譏謗を聞いて苦しく感ずるのは、耳の感觸に依るのである。感覺も無常であれば、それから生ずる苦樂の感じも無常で

ある。想念も無常であれば、意念も無常、識も無常である。この心身を作るものは皆無常である。こう考へて、四大の無常を思い浮べ、心沈まず、和みて堅固になる。

又、比丘を虐けて拳を以て打ち、土塊を投げつけ、杖や劔をもつて打つ人がある。比丘はこのように考へる。この身體はそのように出來たものである。世尊は鋸の譬を説いて、「たとえ、盜人が双刃の鋸をもつて、汝の身體を引き切つても、暗い心になるものは、我が教を守らぬものである」と教へ給うた。私は屈せず精進し、正念を破らず、身體は暢かに、心を一點に集中していよう。この身體の上には拳の亂打、杖や劔の亂打、何も欲する儘に來らしめよう。この御佛の教を滿さんがためであると。比丘が、若しこの場合、佛と法と僧とを憶念しても、平等の心が顯われて來ないならば、その比丘は、新嫁が舅を見て心動き亂されるように、「私の損失である。大きな私の損失である」と心動き亂される。もし佛と法と僧とを憶念して、平等の心が顯われるならば、彼はこれによつて喜び、得るところが多いのである。

友よ。材木と蔓と草と土とに取り圍まれた空間を家と呼ぶように、骨と筋と肉と皮とに取り圍まれた空間を身體と呼ぶのである。そうして根と境と識との三つが和合して、初めて見る聞くとゆうような働きが起るのであるから、我々のこの身體は五蘊の集であり、すべての色も受も想も行も識も、みなこの五蘊に攝められるのである。

世尊は、緣起を見るものは法を見、法を見るものは緣起を見ると仰せられた。この五蘊は實に因緣によつて生じたものである。この五蘊に對して起す欲望、欲求は苦の因である。この欲望と欲求とを制め、なくすることは苦の滅である。友よ。これだけなし得る比丘は、多くをなし得たものである。

三。舍利弗は、或日世尊に侍して教を聞き、歡び歡び歸る途中に、「補樓低迦とゆう異敎の遊行者に遇うた。補樓低迦は問うよう。「あなたはどこから御出でなされたか」。「今世尊の教を聞いての歸路である」。

「あなたはまだ乳を呑んでいられるのか、私はとうの昔に師匠を離れて、獨で道を修めているのに、あなたは猶師匠の教を聞いていられるのか」。

「私はまだ乳を離れない。師匠の教を聞いて喜んでいたのである。思うにあなたの師匠は實の覺の方ではなく、その教は實の法ではないからして、丁度親牛の乳が悪いが、少ないかすれば、犢は早く乳を離れるように、師匠を離れたのであろう。私の師匠は實の覺の人であり、その教は實の教であるから、丁度親牛の乳が悪い上に豊かであれば、犢はいつまでも乳を離れないように、私は乳を離れず、師匠の教を喜んでいたのである」。

第八節 思惟

一。同じく世尊は舍衛城において、比丘等に教え給うた。「比丘等よ。私が未だ覺を開かぬ前、苦薩であつた時に、『私の思惟を二つに分けて見よう』と考へて、貪欲と瞋恚と害う思とを片方に、出離と瞋らない思と害わない思とを片方に置いて分けてみた。

それで私に若し貪る思が起る時には、直にこのように思う。「私に貪る思が起つた。これは自らを害い、自他を共に害うものである。又、知識を滅ぼし、破滅に導くものである」と、こう考へて來ると、貪る思は消える。瞋の思、害う思が起る場合も同じである。私はこうしてこの三つの悪い思が起ると直に碎き破つて捨てたのである。

比丘等よ。人間の心は屢々思う方へと傾くものである。貪を思えば貪益々繁く、瞋りを思えば瞋益々甚だしく、害う思をなせば。心は害う方へと傾くものである。雨期が終つて、秋のとり入れの時分となれば、牛飼は牛を逐うて牛小屋に閉じこめる。それは牛が縛られたり、殺されたり、その上に穀物を荒したとゆう非難を恐れるからである。比丘等よ。私もそのように善からぬことの禍を見て心

を閉じ込め、悪い思を碎き破り捨てたのである。この私に出離の思、いからぬ思、害わぬ思が起る。私はその時、この思は自らを害わず、他を害わず、自他を共に害わぬものであると知つた。この思を調べて見て、この思をいかに繁く重ねても、そこに恐るべき理由を見出すことが出来なかつたのである。只餘り長く同じ思を續けていると、身體が疲れ、心が病み、従つて定を失うであろうと思つて、心を内に静め、一點に集中していたのである。

比丘等よ。心は屢々思う方へと傾くものであるから、こうして出離と不瞋と不害とを思えば、心はこの思に傾いて、貪と瞋と害う思は廢れて來る。夏の終の月に、穀物が村の端の畑に芽を吹き初めると、牛飼は牛の群の行衛を見守り、樹の下にいるか廣場に居るかに注意して、茲に牛が居ると知つてゐるものである。私もその様に私の心の行衛を見守つて、この思が動いてゐると知つてゐた。比丘等よ。私は勇猛精進であつた。怖を持たなかつた、常に正念であつた、身體は暢かに、心は靜かに一點に集中してゐた。

比丘等よ。かくして私は初禪、二禪、三禪、四禪と進み、靜かな清らかな透明な、欲を離れ汚を無くし、從順にていつにても活くる用意があり、堅固にて他に動かされない心を以て、道にすくみ、遂に無明が破れ光が生じたのである。

二。比丘等よ。森の高地に續いて大きな低い沼地があつて、鹿の群が住んでいるとする。鹿の不利を計る人は、その平安と愉快へ導く高地への道を塞ぎ、沼地へおろすように計るであろう。鹿はじめじめした濕地に留つて災厄と不幸に遇い、その群の數を非常に減するであろう。これに反して、鹿の平安を思う人は、低地への道を閉じて、高地への道を開き、鹿の群をしてその數の増すように仕向けるであらう。

比丘等よ。私は物の道理を知らしめんがために、この喩を説いた。大きな低い沼地とは樂欲のこと、鹿の群とは人々のこと、不利を計るものとは惡魔のこと、低地への道とは八つの邪道のこと、濕地とは樂をあさること、沼澤とは無明のこと、平安を思う人とは如來のこと、平安と愉快への道とは八正道のことである。比丘等よ。このように私に依つて、平安と愉快への道が開かれ、低いじめくした沼澤への道は閉じられたのである。

比丘等よ。私は同情と愛憐とを以て汝等のために、なすべきことをなした。茲に樹下の蔭があり、空屋がある、禪かに思えよ、放逸であるな、後に悔を残してはならぬ。これが私の教である。

三。又或日、世尊は宣うよう。「比丘等よ。定を修める比丘は、常にこの五つのことを心掛けねばならぬ。或相を思うて、心に貪欲と瞋恚と愚癡とが生じた時には、直にその相より心向けかえて、

善い思を伴う他の相に向けねばならぬ。他の相に心を轉ずれば、そのために、貪欲と瞋恚と愚癡とは消える。かくて心が内に收まり静まり、一點に集まる。これは丁度巧な大工が太い釘を抜き出すために、細い釘を打ち出すようなものである。

比丘等よ。心を他に向けかえて猶貪欲、瞋恚、愚癡の伴う悪い思が無くならない時には、「この思は不善である、罪の垢がある、苦の結果を生ずるものである」と。その思の禍を研べねばならぬ。このように研べてゆけば、その悪い思は消え、心は内に收まり静まり、一點に集中するものである。これは丁度、若い美しい男や女が頭に蛇や獸の腐肉を巻きつけられて厭い嫌うようなものである。

比丘等よ。若しこのようにして猶、その思が止まないならば、今度はその思を思わないようにせねばならぬ。それでその思はとまり、心は内に收まり静まり、一點に集中するであろう。丁度これは眼のある人が眼の前のものを見ないように、眼を閉じ又は他の方角を眺めるようなものである。

比丘等よ。それでも、その思が續くならば、今度はその思の原因根本の模様を調べる。それでその思はとまつて、心は内に收まり静まり一點に集中するであろう。これは丁度走つていいる人が「何で俺はこう急いでいるのであらう。靜かに歩いたらどうだらうと思つて、靜かに歩くようになり。「俺は何で歩いてるのであらう。立ち停つたらどうであらう」と思つて立ち停り、「俺は何で立つて居

るのであろう、坐つたらどうであらう」と思つて坐ると同じことである。

比丘等よ。若しこのようにその思の原因根本の模様を研べて見ても、猶悪い思が停まらないならば、齒と齒を合せ、舌を上顎に引きつけ、堅き心を以て、抑えつけ壓しつけて静めねばならぬ。これは丁度力のある人が、力のない人の首を捕えて壓しつけるようなことである。これでその思は停つて、心は内に收まり静まり一點に集中するのである。

比丘等よ。この五つの仕方をして、悪い思を滅ぼす所の比丘は、思の仕方及び方法に通じたものと云われる、何故なれば彼は欲する儘に思つて、悪い思を離れることが出来、渴愛を滅ぼし、煩惱の縛を断ち、苦を全く滅ぼすことが出来るからである。

## 第二章 王舎城の悲劇

### 第一節 提婆の獨立

一。世尊は又も遊行に出でて、王舎城に歸り、城外の竹林精舎に滞在し給うたが、これより先き雨

久しく降らず、稻枯れて食を乞うに困難であつた。勝れた比丘等は隨處に食を得ることが出来たが、提婆は身の不自由をかこち、その事が我身の神通なきに由るよに思い、或日世尊に詣でて神通を得る道を尋ねた。世尊は。「提婆よ。神通を獲ることを求めるよりは、無常、苦、空、無我の理を思ふがよい」と斥け給うた。提婆はこの教を喜ばず、不平を抱いて居た。

その夏、世尊は諸比丘を連れて憍賞彌に赴き安居せられたが、舍利弗、目連、阿那律、阿難等の弟子達は互に睦じく、道を語り合ふを常とした。提婆は何となく我身獨りが疎んぜられているように思ひ、獨り教團を棄て、王舎城へ赴いた。

そこに彼は頻婆娑羅王の愛子にして、當時十六歳なる阿闍世太子の歸依を得んと企てた。一日彼は太子を訪れ、手段を盡して、その心を奪ひ、太子を籠絡してその歸依を得、王舎城に近い處に僧房を建て、日に日に多くの車を持つて衣食の供養を受けることになつた。

二。かように若い外護者を得た提婆は勢力が日を追うて盛んになりゆくにつれ、世尊の教團の比丘の中にも、彼の許へ赴くものもあつた。世尊は、彼が利養のために太子の供養を受けていることを聞き、比丘等に告げ給うよう。

「愚の者は利養の念を本として惡を増してゆく、かくて利き刀が首足處を異にするように、清い功

徳を斷ち切る。清い行を修めることを忘れて、徒に人々を招き寄せ、自ら衆人の上に立つて法の主となろうと望む。もし一方に利養を求め、而も他の一方に涅槃を得ようとするならば、前の思が仇となつて、後の心は貪る心となるであろう。そして自らを傷い、他人をも傷う、汝等提婆を羨んではならぬ」。

實を結ぶ芭蕉は枯れ、北咲く葦も枯れゆく、驪馬は子を孕みて死し、人は貪りて滅ぶ。

三。或日、世尊は王舎城に托鉢せられたが、提婆も亦その巷に行乞していた。世尊は遙かに彼を見て其處を立ち去ろうとせられた。阿難問い奉るよう。「何故に此處を去り給うか」。世尊。「提婆が此巷にあるから避けようと思ふ」。「提婆を恐れ給うか」。「否。彼を恐れるのではない。悪人に逢うてはならぬからである」。「さらば、提婆を去らせたらよいではありませんよう」。「去らするにも當らぬ、彼の思のまゝに振舞せるがよい。阿難よ、愚の人に遇うてはならぬ。愚の人と事を共にしてはならぬ。無用の論議を交えてはならぬ。愚者は自ら悪を行い、正しい律に背き、日に増し邪の見を募らせてゆく、提婆は今利養を得て心が橋つている。ちやうど惡狗を鞭つようなもので、鞭うてば打つ程、兇惡になりゆくばかりである」と宣い、阿難をつれて他の巷に托鉢せられた。

一方、提婆は進んで世尊に代りて教團を統理せんことを企てた。この時、目連は支提の國にあつた

が、先に天上に生れたその弟子迦俱羅により、提婆の惡心を告げられ、驚いて竹林精舎に赴き、この趣を世尊に申上げると、世尊は。「もう既に知つている」と仰せられた。提婆はそれとも知らず、腹心の弟子、俱迦利、乾陀、迦留羅提舍、三閻達多を隨えて、竹林精舎へ急いだ。世尊は彼等の來るを見て、「愚な彼等は、私に向い、自らを讃め、上の企を語るであろう」と仰せられた。目連は再び支提國へ歸つた。提婆の一行は世尊の御許に詣で、禮をなして申上ぐるよう。「世尊はもう年老い、力も衰えさせられた。諸弟子を教養せられることも勞苦であらうと思ひます。今より私は世尊に代り、諸弟子のために法を説くでありますよう。世尊は唯、禪定を御樂しみ下さい」。

世尊告げ給うよう。「提婆よ、私は舍利弗、目連のような、智慧明かに、行圓な大阿羅漢にさえ、まだ此大衆の教養を委ねておらぬ。どうして汝のような利養のために、他人の唾を喰うようなものに、此大衆を委ねることが出來ようぞ」。

提婆は一言も申上ぐる言葉もなく、悄然として御前を退いた。そして心に深く怨を懷き。「世尊は大衆の面前で舍利弗、目連を讃め自分を辱しめた。この怨はいつか報いねばならぬ」。

四。彼はある日、教團の規律の緩んでいることを楯とし、五つの新しい規則を設けんことを世尊に請うた。



- 一、林中に住み、町の邊に住んではならぬ。
- 二、戸毎に食を乞ひ、招待の供養を受けてはならぬ。
- 三、終生、糞掃衣を着ねばならぬ。
- 四、樹下に住み、屋舎に眠つてはならぬ。
- 五、肉を食してはならぬ。

併し徒に厳しい規律を設けて、行爲を束縛するよりも、心の垢を除くことを主とせらるゝ世尊は、提婆のこの申出でを許されなかつた。直に舍利弗を召して仰せらるゝよう。「今より提婆の組の者の處にゆき、彼の五則を受けるならば、眞の教に違ふものであると申し傳えよ」。舍利弗答えて。「世尊よ。私は先に提婆を讃めたことがあります。今また毀るに堪えませぬ」。世尊は重ねて。「讃めるも實であり、毀るも實である。謬れるものは正さねばならぬ」。舍利弗は理ある仰せを畏み、提婆の徒衆に赴き、その由を述べた。彼等はみな提婆の一味のものであるから、互に語るよう。「あゝ、世尊の弟子達も、提婆尊者が手厚い供養を受けるのを見て嫉を起している」。舍利弗は又王舎城に入り、信者の人達にもこの事を告げた。

されど提婆は、其新則を以て進まんと決し、その弟子の中、尤も伶俐い二聞達多と計り、布薩の日に、その新則を唱えて、人々の賛同を求めた。ちようど其會に新に出家した五百人の吠舍離の比丘があつたが、まだ教團の規律を知つておらぬために、此新則に同意した。其時舍利弗、目連等の大弟子は居らなかつたが、阿難は上衣を着けて座より立ち。「此新則は世尊の定められた律ではない。諸の長老達よ。もし私の言を認めるならば、上衣を着けてお立ち下さい」と申した。六十人の長老達は阿難の言葉に隨うた。然し提婆は五百人の新弟子を得たので、諸長老達に、教團を離れることを宣言し、諸弟子を隨えて王舎城の西南十數里なる伽耶山へ赴いた。彼は茲に諸弟子を教養せんと企てた。五百の新比丘が提婆に拉れられたことは、少なからず教團の人々の心を動かした。此時、舍利弗、目連は世尊の許を受けて奪われた弟子達を救い出さんため伽耶山へ赴いた。中には「あゝ、あの二大長老も提婆の弟子となるのであるまいか」と泣き出した比丘もあつた。世尊は氣遣う比丘達に「汝等。憂うるには及ばぬ。兩人は必ず彼處において法の威徳を現わすであらう」と語られた。

五。舍利弗、目連の兩人が伽耶山へ着いた時は、ちようど提婆の説法の眞中であつたが、彼は遙に兩人の來たのを見て、喜び迎え、「卿等は先に私の新則を認めなかつたが、今はよく私の意を了りて來てくれた」とゆう。やがて舍利弗に告げて、「私はいま勞を覺えるから、卿は私に代つて法を説かれるが善い」と、いつも世尊のせられるような態度に出で、自らは大衣を四つに疊んで右の脇を下

にして臥した。その時、目連は先ず神通を現わし、舍利弗は次いで法を説いた。五百の比丘達は夢の醒めたように先の謬を悔い、直ちに二天長老に連れられて此山を後にした。三閻達多是提婆を呼び覺し「舍利弗、目連が五百の比丘を連れ去つた」と叫び、提婆は驚き覺めて「汝、惡比丘よ。我弟子を奪い去つた」と罵り、大地を踏んで怒り狂い、鼻より熱血を吐いた。

舍利弗、目連が五百の弟子を連れ歸つたことは、餘りに大きな驚を教團に與えたので、世尊はために一つの本生譚を説かれた。

「比丘等よ。古、拘和離とゆう弓術の師があつた。その弟子散若は、弓の握り方と、矢の番え方を六年間學んだが、一回も射たことはなかつた。或時試みに大樹を射ると、矢は美事に樹を射通して深く土中に入つた。師は喜んで、「汝は弓術の奥儀を得た。今よりゆきて往來の人々を惱す大賊を夷けよ」と、一挺の弓に五百本の金箭を添え、更に一人の美女と一輛の馬車とを與えた。彼は師の命を畏み美女と車を同うして賊のある處に向つた。

五百人の手下を隨え、賊帥は往來の人々を待つていた。そこへ散若の車が來た。賊帥は手下を制めて手向うことを止めしめた。やがて車より下りた美女は、手に金の鉢を持ちて賊に食を求めたが、彼等は美女と金鉢を見て欲心を止めることが出来なかつた。しかし賊帥は尙逸る手下を制して、多くの

美味を金鉢に盛りしめた。彼女は再び來つて、その所得を分けて呉れとゆう。手下は堪え兼ね、車上の散若に向つて突き進んだ。彼は車を縦横に馳せ、一本の箭は一人を仆し、四百九十九人を仆し、最後に一本を餘した。賊帥の姿は見えぬ。かくて散若は美女を裸にして樹下を逍遙せしめたので、流石の賊帥も心を動かして姿を現わし、散若の射殺す所となつた。

比丘等よ。その時の散若は舍利弗、美女は目連、五百の賊は五百の新比丘、賊帥は提婆であつて、師匠は實に私であつた」。

六。提婆が教團から分離して後間もなく、世尊は比丘等に語り給うよう。「比丘等よ。私は前に樹心の譬を説いたことがあるが、この我等の惱み苦しむ生、老、死、愁、悲、苦、惱を無くするため出家しながら、供養と尊敬と名譽とを得て、心憍ぶり、満足して、自らを讃え他を毀るは、清淨の行の枝葉を取つて樹心と思ふ愚なものであつて、放逸に流れて苦惱に陥るものである。又、美しい戒行に酔うて、心憍ぶり満足して、自らを讃え他を毀るは、清淨の行の外皮を擲んで樹心と思ふものである。放逸に流れて苦惱に陥るものである。又堅固な定を起して、心憍ぶり満足して、自らを讃え他を毀るは、清淨の行の内皮をとつて樹心と思ふものであつて、同じく放逸に流れて苦惱に陥るものである。又、明かな知見を得て、これに眩惑して心憍ぶり、自らを讃え他を毀るは、清淨の行の樹

肉を切り取つて樹心と思ふものであり、同じく放逸に流れ苦惱に陥るものである。供養と尊敬と名譽とに心揚らず、美しい戒行に酔わず、堅固な定に眩惑せず、明かな知見に憍らず、放逸にならず、益々道に進んで、不動の心の解脱を得るのが、樹心を求めて樹心を得たのである。この解脱より退墮するとううことはない。比丘等よ。供養と尊敬と名譽とは清淨の行のめあてではない、美しい戒行が清淨の行のめあてではない。堅固な定も清淨の行のめあてではない、明かな知見も清淨の行のめあてではない。不動の心の解脱が清淨の行のめあてである。これが要であり、これが終である。

七。その頃のことである。頻婆娑羅王の子無畏王子は、或日、尼乾陀那吒弗多を訪ねたが、尼乾陀の云うよう。「王子よ。沙門喬答摩の論議をお破りなさい。あなたの名聲は高く天下に響き渡るでありますよう。」「大徳よ。私のようなものが、どうしてあの偉大な力ある沙門喬答摩の論議を破ることが出来ましょう。」「王子よ。まず沙門喬答摩の處へ行き、「如來は他人に快からぬ語を云われるか」とお聞きなさい。若し答が肯定であるならば、「それならば、如來は凡俗の人と何の區別があるか」と非難するがよろしい。又、答が否定であるならば、「如來は何故に提婆は長い間地獄に沈むべきもの、到底救わ

れないものと、提婆の腹立つ語を語られたか」と詰るがよろしい。王子よ。沙門喬答摩は、この兩又に押えられて身動きすることが出来ないでありましょう。」「王子は承けこうて世尊の許を訪れたが、時を計つて明日にまわすが善いと心附き、世尊とその三人の弟子とを明日の食事に我家に招いた。翌日世尊が王子の家に赴かれ、食事が終つたとき、王子は低い座を取つて世尊に對し、「世尊は他人に快からぬ語を語り給うか」と尋ねた。「王子よ。これは一概に云うことは出来ない。」「世尊。茲で尼乾陀は敗けました。」「王子よ。それはどう云う意味であるか。」「世尊。實はこのことは尼乾陀那吒弗多の入智慧であつて、世尊の論議を破らんためでありませう。王子は茲に昨日以來の企を委しく申しあげた。」「王子よ。その時無畏王子の膝に、王子の幼い子供が抱かれていた。世尊は仰せられるよう。」「王子よ。若しあなたの油斷か乳母の不注意のために、この幼兒が木片か陶器の破片を口に入れたら、如何になされるか。」「勿論取り出します。一度で出来ぬならば、左手で頭を押え、右手の指を曲けて口に入れ血を出しても取り出します。それも子供が可愛いからであります。」「王子よ。その通り、如來は他人に快からぬことで、眞實を缺き、利益にならないことは語らない。假令眞實であつても利益にならないことならば、他人に快からぬことを語らない。如來は眞實

にして利益となることなれば、よき時を見て、他人に快からぬことを云うのである。それは一に衆生を愛憐するためであります」。

「世尊。刹帝利、婆羅門、家主、沙門、各々の階級の賢い人々が豫じめ問を設けてお尋ねいたしますが、世尊はこのように尋ねられたら、このように答えよう。この問に對してはこの答をしよう。前から考へて置かれるのでありますか。それとも、その場で即答せらるゝのでありますか」。「王子よ。あなたは車のことでは委しい知識を以つていられるであろうが、人あつて車のことを尋ねる場合、あなたは豫め常に答を用意して置かれるのであるか」。「世尊。私は車のことは委しく熟知して居りますから、いかなる問にも用意なしに即座に答えることが出来ます」。「王子よ。その通り。如來は法界を熟知することに依つて、何人の問にも即答が出来るのである」。

無畏王子は、世尊の教を歡んで、生涯優婆塞たることを誓うに至つた。

## 第二節 阿闍世の篡奪

一。提婆の教團は五百人の比丘を取り返されて、再び盛り返えし得ぬほどの打撃を受けた。今や顧みとするは阿闍世太子一人である。彼は一日太子を訪れて申すよう。「太子よ。父王はいつまでも位に即いて居られるように見える。父王の生きていられる間、太子は位に即く事は出来ぬ。父王の死後にたとえ、王位に即かれても、其樂は甚だ短い。されば一日も早く父王に代つて王位を繼がれるがよい。私も亦羅曇を害うて法の王となるであろう。かくて新王、新佛相並んで摩竭陀國を治めることは楽しいことでないか」。

太子答えて。「父母の恩の重いことは日や月よりも超えている。その長いお育てには報い難い。師は何故にこのような逆さ事を勧められるのであるか」。けれども提婆は言を巧みに太子の意を誑かし、その勸を悦ばしめるに至つた。

初め頻婆娑羅王の夫人韋提希は、王の中年を過ぎた時妊娠したが、父大王の肩の血が飲みたいとの産前の奇欲にかかり、日毎に瘦せ衰えた。王はその理由を聞き、自ら肩の血を絞りて夫人に飲ませた。相師は「生れる子は父王を敵とするであろう」とゆうたので、夫人は幾度も墮胎しようとしたが、王の止める所となつて、子は成長した。それが阿闍世太子である。生れぬ先きに父の怨となつたゆうので、阿闍世即ち不生怨と名けられた。提婆はこのことを太子に語り、その意を迷わしたのであつた。

一日、太子は密に利劍を帯びて王の門に進んだが、内に懐いた惡逆の心は、太子の五體を戦かしの、思わす地に倒れしめた。守門の人々は太子の取り亂した尋常ならぬ有様を見て故を問えば、「提婆の勸によりて父王を殺そうと思ふ」とゆう。群臣は驚き、大王に申して指揮を仰いだ。王は一人の太子を殺すに忍びず、子の意に任せて、太子に王位を譲るに至つた。けれども、太子は再び提婆の勸に従い、父王を捕えて宮殿に押し籠め、その食を絶つに至つた。

二。母后韋提希夫人は浴して身を淨め、蜜を髪に和せて身に塗り、牢獄に入りて大王を見れば、面やつれ、肉落ちて、悲むすべも知らぬほどに衰え果てゐる。夫人は涙を揮つて「まことに世尊の説き給うように榮華もつねなく、罪の報が襲うてまいりました」と云えば、大王「食を絶たれてからこのかた、飢は久しくつずき、數百の蟲が腹の中を掻き亂すようである。血も肉も失せはて、命も盡きようといたしておる」と云い、絶え入るばかりに咽び泣いた。夫人が身に塗れる變蜜を集めて捧ぐれば、王は食了つて、涙と共に遙に世尊のまします所に向い、稽首きて申しあぐるよう。「世尊の宣うように、世の榮華は久しく保ち難く、夢幻のようであります」。更に夫人に向い、「私は位にあつた時は、國は廣やかに衣食は意のままに足り、何一つ缺くる所がなかつたが、今や獄に捕えられて、飢えに死のうとしている。我子は邪の師に迷い、世尊の御教に違ふ。私は死を懼れることはないが、唯面

り世尊の御教を受けず、また舍利弗、目連、大迦葉等の御弟子達と道の奥旨を語り合ふことの出來ないのは、残り惜しいことである。

まことに世尊の説き給う如く、人間の恩愛は、ちやうど群鳥が一夜を木の梢に宿つて、曉にはそれぞれ別れ飛び、定めぬ禍福をうけるようなものである。尊者目連は心の垢のぞこり、神通自在の證を得ながらも、某婆羅門に嫉まれて撲れたことさえある。況して心の垢ある私においては普通のことである。殃が人を追うは、影が身を尋ね、響が聲に答えるようなものである。御佛に遇い奉ること難く、その御教を聞くことも難く、又、御教によりて仁をしき、民を治めることも難い。私はいま命終りて遙なる所へゆくであろう。苟も心あるものは、世尊の御教を奉ぜぬものはない。汝も慎んで教を守り、來るべき禍を防がれよ。夫人は却つて王の教誡を受けて、身も世もあらず泣きくすれた。

三。王は更に掌を合せ敬しく靈鷲山に向い、遙に世尊を禮し奉り申しあぐるよう。「世尊よ。目連尊者は私の親しい友であります。どうぞ御慈悲をもつて、私に信者としてのなすべき道を教えて下さい」。

その時、目連は準のとぶように王の所に赴き、日々信者の道を説き、世尊は又、富樓那を遣わして王のために法を説かしめ給ひ、かようにして二十一日の間、王は變蜜を食ひ、法を聞いたために顔

色も穩に悦ばし氣であつた。

第三節 韋提希夫人

一。阿闍世王は父王の門を守る者に問う。「父王はまだ生きて居られるか」。答えて云う「國の大夫人は御身に麩蜜を塗り、瓔珞に漿を盛つて大王に捧げ、沙門の目連、富樓那は空から來りて大王のために法を説いて居りますので、どうすることも出来ませぬ」。

阿闍世王は、この言葉を聞くや、母の仕打を怒り、「母とゆうても國法に觸れた賊と一所にいるならば國の賊である。又、悪い沙門達は呪術をもつて、よくもこの惡王を長い間活かしておいたことである」。

劍を抜いて韋提希夫人を殺そうとした。その時大臣の月光は、名醫者婆ととも王を禮し、「私達は吠陀の經典の説くところによりて、天地開けてこのかた、惡王が位を貪るために、その父を殺した者は一萬八千人もあると聞いておりますが、無道にも母を害したものは一人もありません。王がこの逆事なざるならば、王族を汚すものと云わねばならぬ。私は聞くに忍びませぬ。かゝる業をなす

ものは非人でありませぬ。此處にあるべき方ではありません」。

二人は劍に手をかけ後足に退きながら言い切つた。阿闍世王は驚き怖れて者婆に云うよう。「汝は私のために力を盡さないのか」。者婆のう。「母后を害し奉つてはなりません」。

王は流石に悔いて助を求め、劍をすて、殺すことはやめ、内官に命じて、母后を後宮に禁めた。二。その時、韋提希夫人は我が子のために閉じ籠められ、愁に憔悴え、遙に靈鷲山に在ます世尊を禮し、奉りて申しあぐるよう。

「嘗て世尊は、目連尊者、阿難尊者を遣わして私を慰めて下さいました。私は今憂に閉されてあります。世尊は威重くましく、見奉る由もありません。どうぞ、目連、阿難の二尊者に逢わせて下さい」。

雨とはふり落つる涙に咽んで遙に世尊を禮し奉れば、まだ頭をあけない間に、大聖世尊は夫人の心をしろしめし、空を踏んで王宮に降り給う。夫人が頭を擧げて見奉るに、世尊の御身は金色のよう輝き、目連は左に、阿難は右に侍り、多くの天人は空の中にありて天の華を雨らした。夫人は自ら瓔珞を斷ち大地に身を投げ、泣きくずれて世尊に申すよう。

「世尊よ。私はどうした罪の報で、このような悪い子を生み、また世尊はどうした因縁で、あの提

婆と親戚であらせられるのでありましよう。世尊よ。どうぞ私の爲に憂惱のない處を教て下さい。私はこの淺ましい悪い世の中が嫌になりました。この世は地獄、餓鬼、畜生のみちくた善くないものゝ聚であります。この後私は悪い聲を聞いたり、悪い人を見たりいたしとうはありませぬ。私はいま世尊に向い奉り、このように身を大地に投げ出して、哀を求め懺悔に咽んでおります。どうぞ世の光に在ます世尊よ。私に清かな世界を見せて下さい。

三。その時、世尊は眉間より光を放ち給うに、その光は金色に照り映え、普く十方の量ない國々を照し、再び還りて御頂は金の臺と輝き、あらゆる佛の清らかなる國々はその中に現われた。或ものは七つの寶にて造られ、或ものは蓮華と美しく、或ものは玻璃の鏡とあざやかに輝いた。夫人は之を見了りて世尊に申すよう。

「世尊よ。是等の國々は何れも清らかな光に満ちておりますが、私は極樂世界の阿彌陀佛の御許に生まれたいと願います。私に思惟えることを教えて下さい。私に正しく受けることを教えて下さい。」

その時、世尊ほゝ笑み給えば、五色の光ほとばしり出でて頻婆娑羅王の頂を照し、王は閉じこめられてありながらも、心の眼は障なく遙に世尊を見奉り、敬しく禮をなしたが、迷の絆は自ら

解けて證に至る身となつた。

世尊。韋提希夫人に告げ給うよう。「知らずや夫人よ。阿彌陀佛はこゝを去ること遠くましまさぬ。汝は諦に淨い業から出來上つてゐる阿彌陀佛の極樂世界を念いうかべるがよい。彼國に生まれたいと思ふならば三つの福業を修めよ。一つには父母に孝に、師につかえ、慈ぶかく、殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、綺語、貪欲、瞋恚、邪見の十不善をなさぬこと、二つには佛と法と僧とに歸依し、すべての掟を守り、威儀をたゞしくすること、三つには、道を求むる心を起し、深く因果の理を信じ、經典を讀みて人に道を勧めること。夫人よ。この三つは清き御國に生まれる清き業である。過去、現在、未來の佛達もみなこの三つを正しい因として證を獲られた」。

四。世尊は更に、阿難及び夫人に告げたまう。「汝等あきらかに聞き、善く思うがよい、私はこの世後の世のすべての人々、即ち煩惱の賊にそこなされる者のために、清い行を説くであろう。まことに夫人はよくもこの事について問を起したことである。阿難よ。御身は佛の語をたもちて廣く人々のために宣べよ。私はいま夫人をはじめ後の世のすべての人々に、西の方、極樂世界を觀せしめ、佛の御力によりて、あの清らかな國を、ちようと明かな鏡にその面影を見るように見せしめるであろう。そしてその國の妙なる樂を見る時に心は歡に満ち、同時に再び迷の生をうけない忍を得るであろう」。

世尊は更に、韋提希夫人に告げ給うよう。「御身は心弱く劣つてゐる。まだ天眼を得ておらないから遠く観ることが出来ぬ。御佛に不思議な方便をましくして御身をして見せしめ給うたのである」。夫人申すよう。「世尊よ。私はいま御佛の力によりてかの安樂淨土をおがみましたが、後の世、佛の光を失うて惡に濁り、老に惱み、病に苦み、死を怖れ、別を悲む人々は、どうして、彼の御國を見奉ることが出来るでありませんよう」。

世尊、のたもうよう。「汝等。あきらかに聞きよく心に思え。私はいま汝等のために、苦を除く法を説くであろう。汝等之を持ちてすべての人々に説きひろめよ」。

と仰せらるゝと同時に、無量壽佛は空の中に現われ給ひ、觀音、勢至の二菩薩は左右に立ち、御光の熾なることは、閻浮檀金の光も比ぶるに足らぬ。夫人申すよう。「世尊よ。私はいま佛の御力によりて無量壽佛と二菩薩とをおがみ奉りました。後の世の人々はいかにして御佛を觀たてまつるでありませんよう」。

五。世尊告げ給うよう。「まさか無量壽佛の身相を心に浮べよ。千億の金色に輝き給ひ、御身の高さは六十萬億由旬を恒河の沙の數程も集めたもう。御眼は四大海水も比べものとならず、御身に八萬四千の相好あり、一々の相好に、八萬四千の光あり、一々の光徧く十方の世界を照し、念佛の人をみ

そなわし、攝めとりて捨て給うことはない。

此佛の御身を見奉ることによりて、佛の御心を見奉る。佛の御心とは大いなる慈悲である。あらゆる縁との縁によりて人々を攝め給う。故に、阿難及び韋提希よ。佛を想い奉れ。御佛は法界に満つる御身にて在ませば、すべての人々の心の中に入り給う。されば汝等が心に御佛を想いたてまつる時に、その心はまことに圓かな相好を具えたる佛である。その心佛となり、その心はそのまゝ佛である。すべてに行き互る正しい智慧の海の心から生まれる。故に汝等心を一つにして彼の無量壽佛を明かに思い浮べよ。

また、無量壽佛には量なき化身ましくして、つねに觀音、勢至の二菩薩ともにも、念佛する人の許に來り給う。まことに無量壽佛の御身は法界にみちたまいて邊なく、凡夫の心では思い及ぶ所でないが、その本願の御力によりて、憶い奉るものは必ず拜むことが出来る。たゞ假の相好を想うさえも量ない福を得る。まして相ととのえる眞の御佛を觀たてまつるにおいては尙更である。そしてかの御佛の神通は心のまゝにていらせられ、或時は大いなる御身にて虚空に満ち、或時は小さき御身に一丈六尺の御姿と現われ給ひ、十方の國において量知れぬ自然の力を現わし給うのである」。

六。世尊は更に阿難及び韋提希夫人に告げ給うよう。「かの無量壽佛の御國に生まれる者に九種の



品別がある。その上の上の人とは、人ありて彼國に生まれたいと願ひ、三つの心をおこせば、直に生まれることが出来る。三つの心とは、一つには至誠心、二つには深く信する心、三つには思をめぐらして生まれんと願う心である。この三つの心を集めるものは、必ずかの御國に生まれる。又、三種の人がある。一は慈深くしてもの命をとらず、誠を守ること、二には佛の説き給いたる經典を讀むこと、三には佛と法と僧とを念じ、戒と施と勝れたる果報とを念うこと。是等の功德を具えて一日より七日に亘り、かの淨土へ生まれたいと願うならば必ず生まれることが出来る。かゝる人は勇しく勤め勵むので、阿彌阿佛は觀音、勢至の二菩薩をはじめ、多くの伴人を隨え、大いなる光を放ちてこの人の身を照し、御手を授けて迎え給ひ、多くの菩薩は又、ひたすら讚めたゝえてその心を引き立てる。この人歡に勇みて忽ちにかの御國に生まれ、御佛を見奉り、輝く寶の林の説きいする自らなる御法を聞き、法さながらの相を悟り、暫くの間に十方の佛達にめぐりつかえ、その身の證るべきを聞き、還りて數しれぬ敎の主となる。

上の中の人とは、必ずしも經典を讀み誦んずることは出来ぬにしても、善くその意味を解り奥深い第一義に向うても心驚かず、深く因果の理を信じ、佛の敎を謗らない。これらの功德をさしむけたかの極樂淨土に生まれたいと願うならば、此人の命終る時に、阿彌陀佛は觀音、勢至の二菩薩を初めとし、多くの伴人に圍まれて現われ給ひ、紫金の臺に此人を坐らしめ、一念の間にかの御國に生まれしめ給う。生まれたものは光の中に目開け、ものみなを聲を深い第一義の敎と聞く。七日を過ぎれば佛の證を退かぬ身となり、直に佛達にめぐりつかえ、その御許に思を凝らし、ものさながらの相にめぐり、其身の證るべき日を聞く。

上の下の人とは、因果の理を信じ、佛の敎を謗らず、ひたすら證を獲たいと願う。是等の功德をさしむけて彼の御國へ生まれたいとねごうならば、此人命終る時、阿彌陀佛は觀音、勢至の二菩薩をはじめ、多くの伴人を隨えて來り迎え、金の蓮華に坐せしめて彼の御國に生まれしめ給う。七日にして騰げに御佛を見奉り、三七日の後明に御佛を仰ぎ、あらゆる聲とゆう聲の盡く法を説くを聞くであらう。十方の佛達にめぐりつかえ、あらゆる敎を明かにし、盡きせぬ法の悦に在るであらう。

七。次に中の上の人とは、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五つの誠めを守り、五つの逆罪やさまざまの過をなさず、是等の善根をもつてかの淨土へ生まれたいと願うならば、此人の命終る時、阿彌陀佛は多くの伴人を隨え、金色の光を放ち來り迎えたまい、世は苦にして、空であり、常なく無我なることを説き給えば、此人歡に心おどり、輝く蓮華につままれて彼の御國に生まれ、その華開くとき、聲々は皆四諦の法をとく、直に我れ獨りの悟に入り、神通自在の身となる。

中の中の人とは、僅かに一晝夜に互りて様々の誠を守り、威儀を亂さず、これ等の功德をもつて彼の御國に生まれたいと願うならば、戒の香は其の身に匂うであらう。此人命終る時、阿彌陀佛は多くの伴人を隨えて金色の光を放ち、來り迎え給ひ、七寶の蓮華につままれて直に彼の御國に生まれ七日の後華ひらけば、掌を合せて御佛を讃え、法を聞いて歡に心おどり、遂に吾れ獨の悟に入る。

中の下の人とは、父母に孝をつくし、すべての人々に慈を施し、命終る時に善き友によりて阿彌陀佛の御國の樂と、如來の本願のこころを聞き、直に彼の御國に生まれ、七日の後、觀音、勢至二菩薩に遇い奉りて法を聞きて歡び、遂に我れ獨りの悟に入る。

八。下の人とは、佛の敎は謗らないが、愚のために多くの罪を造り、少しも慚愧の思をいだくことはない。命終る時善き友によりて、様々の經典の名の讚歎を聞き、重き罪を除き、更に又その友の敎によりて手を合せて南無阿彌陀佛と稱える。かように佛の御名を稱えることによりて迷に導く罪を滅し、かの御佛のつかわし給う化佛と化菩薩の迎えを受け、室に輝く光を觀て心歡び、命終りてかの淨土に生まれ、七々日を経て、觀音、勢至の二菩薩の敎を聞いて信心を起し、遂に多くの沙門の主となりて歡び多き位に入る。

下の中の人とは、愚のために種々の誠を犯し、敎團の所有物や供物さえも盜み、自分の利益や名譽のために法を説いて少しも慚愧の思がない。この人命終るにあたり、八方から迫り來たる地獄の猛火に戦くとき、善き友の慈によりて、阿彌陀佛の大きいなる力と徳と光とを讃うるを聞いて信するや、長き迷に入るべき重き罪除こり、地獄の猛火は清しい風となり、光の中なる様々の天の華を吹き散らす、各々の華の上に化佛、化菩薩ましくして此人を迎え、一念の間に彼の御國に生まれ、長い時の後に法を聞いて悟に至るべき心を起すようになる。

下の下の人とは、愚のために五逆、十惡等のあらゆる罪をつくり、惡業にひかされて、盡きぬ惡道の苦を受くるに定まり、命終る時善き友來りて懇に、「御身苦せまりて佛を念ひ奉ることが出来ないならば、たゞ南無阿彌陀佛と稱えよ」とゆう。此人、心一つにして御名を稱うれば、一聲の聲の中に、はてしれぬ迷に入る罪を除いて、一念のあいだに極樂世界に生まれ、長い長い時の後、敎を聞いて證に至るべき心を起すようになる。

世尊の説き給うこと終れば、韋提希夫人をはじめとして多くの侍女達は、みな極樂世界と阿彌陀佛及び二菩薩を見奉り、心は歡に溢れ、大いなる悟は廣やかに胸にあらわれ、ものさながらの相を見ることを得た。そして世尊は悉く彼等の證に至るべき日を語られた。

九。世尊は更に告げ給うよう。「若し人ありて、阿彌陀佛の御名を聞くならば、盡きぬ迷に入る罪

を除く、況して憶い奉るに至つては尙更である。若し又念佛する人は、云わば人の中の白蓮華である。觀音、勢至の二菩薩はその友となり、つねに道と離れず、遂に淨土に生まれるであらう。

更に阿難に告げ給うよう。「汝、この語を持ってよ、この語とは阿彌陀佛の御名をたもてとゆうことである」。

法を説き了りて世尊は、靈鷲山に還り給ひ、阿難、廣く人々のために此敎をとけば、聞く人々悉く信じ歡んだ。

第四節 阿闍世の煩悶

一。一方、提婆は阿闍世王に請うて、六十四人の兵を選び、初めに二人を遣わして世尊を殺さしめ、餘の道より歸り來れといひ、更に四人を遣わして、その二人の歸路を要して殺さしめ、次に八人を遣わして、先の四人を殺し、乃至その數を倍にして六十四人とし、先の三十二人を殺し、かようにして、何人が世尊を怨んで殺し奉つたかを世に知らしめないようにせんと企てた。

この時、世尊は靈鷲山の囀を出でて遊歩しておられた。二人の兵は鎧をつけ刀を執つて世尊に近

ずこうとしたが、その威神に打れて進むことは出來ぬ。驚いて尊顔を仰げば、諸根寂かなること、馴れたる大象のよう、御意は澄む水の内外に輝き徹るようになっていらせられる。二人は思はず隨喜の念に打れ、刀を捨て、御前に進み、様々の御敎を受けて法の眼開け、三寶に歸依して信者の中に加わるようになった。やがて別の道から提婆の許へゆき世尊の威神力を告げて、害い奉ることは出來ぬとゆう。提婆の企は全く水の泡となつた。

彼は怒りて、自ら靈鷲山に登り、大きな石を執つて、遙の山の上から囀の邊を歩いていらせられる世尊に向つて擲つたが、凄じい音を立て、落ちた石は的を外れ、その破片が世尊の御足に觸れ、皮肉破れて血は大地に流れた。されど世尊は徐に囀に入り給ひ、大衣を四つに疊み、その上に右を脇にして師子のように臥して、一念に痛を忍ばれた。更に驚き騒ぐ多くの比丘等のために囀の外に出で給ひ、「汝等、漁師のような喚聲を出してはならぬ。各々その所に歸りて意を専らにして道を修めよ。諸佛の常の法として護を受けることはない。そはあらゆる怨に打勝つてゐるからである。かの轉輪聖王はいかなる敵も害うことが出來ないように、どのような敵も如來に向つてその惡を加えることは出來ぬ」と仰せられた。其後、世尊の傷口は容易に治らないので、耆婆は傷口を切開し、惡血を出して治し奉つた。

二。提婆は更に阿闍世王に請うて、大象を放つて世尊を害わんと企てた。象師に語るよう。「明日、喬答摩の來る道に、象を酔わしめて放つがよい。彼は慢心をもつてゐるから、避けることはないであろう。さすれば踏み殺されるに相違ない」。翌朝、世尊は衣を着け、鉢を持ちて城に入り、食を乞ひ給へば、象師は遙に之を見て、醉象を放つた。信者の人達は世尊に餘の道を行かれんことを請うたが、世尊は徐にその道を行き給う。醉象は遙に世尊を見かけて、耳を奮い、鼻を鳴して馳け來つた。されど世尊は慈心三昧に入り給ひ、

汝大龍を害う莫れ、大龍の世に出ずるや難し。若し大龍を害わば、後の世、惡道に墮ちん。

大いなる慈心の力に打れて大象は跪いて世尊の御足を抱いて、退いて立ち去つた。見るもの讚め歎えぬ者はなかつた。

三。頻婆娑羅王は夫人の幽閉以來食を絶たれたので、僅に窓を通じて靈鷲山の翠綠を仰ぎ、それを心の慰としていたが、太子はこれを聞いて、その窓を塞ぎ、足裏を削り、立ち得ぬようにした。その頃阿闍世の子優陀耶が指先の瘡を患え苦しんでいたので、王は懷に抱きかゝえ、その膿を吸い取つた。丁度その時傍にいた韋提希夫人は之を見、追想に堪えずしてゆうよう。「王よ。卿の幼い頃、之と

同じ瘡を病み、父の大王は今の卿のように、その膿を吸われたことがあります」。阿闍世これを聞き、父王に對する嗔は頓に愛慕の念と變り、臣下の人々に語るよう。「もし父王の活きておられることを告げる者があるならば、この國の半を與えるであろう」。人々は競うて父王の許へ奔つたが、王は遙に蹠わしい足音を聞き、「彼等は私に重い刑を加えるのであろう」と驚き懼れ、苦悶えて床に倒れ、そのまゝに息絶えた。

四。世の樂に心眩みて罪のない父王を死に至らしめた阿闍世は、いまや悔に心を嚼まれ、身は熱を病み、全身に瘡を生じ、膿汁流れ、臭くして近ずき得ぬようになつた。自ら思うよう。「私は今地獄の華報を受けてゐる。やがて地獄の果報がくるであろう」。母の韋提希は悲みて様々の藥を塗つたが、少しも癒えない。王は母に語るよう。「この瘡は心から出たもので、身から出たものではない。人間の力では治すわけにはゆきませぬ」。

阿闍世の病氣を聞いて、大臣達は代る代る王の病床を訪ねた。月稱大臣は申すよう。「大王は、何故に顔容衰え、愁に鎖されていられるか。身の痛か、たゞしは心の痛でありますか」。王答えて。「傷々しくも罪なき父王を傷うた私の身も心も、どうして痛まずにおられようぞ。前に智慧ある人から聞いたことがある。世に父母を殺す等の五逆罪を犯したものは、地獄を免れることは出来ない」と。

私はいま限ない罪を負うている。世に私の身と心を治してくれる良醫はない。大臣は云う。

愁え苦めば、愁は更に増しゆかん、眠りの滋き如く、色を食り酒を嗜むも、同じからん。

とゆう歌があります。大王よ。所謂五逆罪を犯せば地獄に落ちると申しますが、誰が地獄を見てその

ように申しました。一體、地獄とゆうは此世のことではありません。王は世に良醫がないと仰せられます

が、富蘭那とゆう大醫が居られます。その人は最上の智慧と自在の定とをもち、清らかな行を修め、

限ない人々に證の道を説いて居られます。即ち、世に悪業もなければ悪業の報もない。善業もなけれ

ば善業の報もない。上業も下業もないと説いておられる。大王よ。此師はいま王舎城に居られます。

どうぞ、この師について身と心の痛をお治し下さい。王は「もし、その様にの罪を治して呉れる

ならば、私はその人に歸依するであらう」と答えた。

五。更に徳藏大臣は王を訪れて云うよう。「大王よ。何故に頬こけ、唇乾き、聲も皺枯れ、ちよ

うと世を恐れる人のような、又は怨敵に襲われた人のような、淺間しい顔色をしておられるのであり

まするか。」「王答えて云うよう。「私はいまどうして身も心も痛まずに居られようぞ。私は愚に眼が眩み、悪人

提婆の語に誑されて正法の王を傷い奉つた。私は嘗つて聞いたことがある。

父と母と、御佛と弟子達に、善からぬ心もて、悪しき行をなせば、阿鼻地獄を免れじ。

私の心は地獄の怖に戦っている。」「

大臣申すよう。「大王よ。怖れ給うに及びませぬ。世に出家の法と王法との二種があります。王法か

ら申せば、父を害うて國の王となつても罪となることはない。迦羅々蟲が母の腹を破つて生まれるよ

うなもので、それは生の法則であつて母の腹を破つても罪とゆうものはない。驟の懷妊も是と同じこ

念う者も、教を持つるものもない。大王よ。彼師はいつもこのように法を説いて人々のあらゆる重罪を除いて下されます。大王もし此師の許にゆかれるならば、凡ての罪は自ら消えるでありますよう。王は、第一の大臣に答えたように答えて、その師を訪ねようとはしなかつた。

六。更に實徳大臣は申すよう。「大王は何故に璽路を脱ぎ、髪を振り亂し、風に吹かれる花樹のように、怖と不安とに慄え戦いておられるのでありますか」。

王答えてゆう。「私は今どうして身も心も痛まずに居られようぞ。先王は溢れる慈をもちつて私を愛し下された。相師が、幼き私を見て、此子は後に父を害うであろうとゆうたにも係らず、父は私を養育せられた。私は嘗て人もし母や比丘尼を汚し、僧の物を盗み、出家や父を殺したものは阿鼻地獄に落ちると聞いたことがある。どうして私は惱まずに居られようぞ」。

大臣ゆう。「大王よ。もし父王が道を修める人であつたならば、害えば罪となるが、治國の法としてならば害うても罪とはならない。大王よ。どうぞ意を留めて御聴き下さい。あらゆる人々は餘業によりて生死を受ける。即ち先王は自らの餘業によりて大王に殺されたので、大王には何の罪もない。今、刪闍耶毘羅胝子とゆう大師が、海のような智慧をもつて、人々の疑いの網を断つて居られます。その師の説く所によれば、あらゆる生類の中、王は意のままに事をなしても差支えはない。いかなる悪を

行うても罪とはならぬ。さながら火が淨いものも穢いものも擇ばず焼き盡くすように、又大地が淨いものにも穢いものにも喜や嘆をたまたないように、王は此火や水の性と同じであります。又秋に斫られた樹の再び春に芽ぐめば、この斫ることに罪が成り立つ筈がない。人の命もこれと同じく、此處に生れて彼處に生れる。再び生れるものに何の罪があろうぞ。人の禍福は、此世の業に依るものではなく、たゞ過去の業を現在に受けるだけである。現在には因なく、又未來には果報はない。大王よ。願わくば此師の許に赴いて、身と心との病を御治し下さい」。

七。更に悉知義大臣は申すよう。「大王よ。なにゆえ王者の威容を失い、ちやうど池水が涸れて蓮の花なく、花なき花樹のような淺間しい御姿とならせ給うぞ。御身の痛か、または御心の痛でありまするか」。

大王答えて。「私はいまだどうして、身も心も痛まずにおられよう。先王は深い慈を濺ぎ給えども、私は不孝の子で、恩に報ゆることを知らず、只自身だけを安樂にしようとして、その恩に背き、その樂を斷ち、横さまに恐しい逆害を加え奉つた。私は智者の云う如く、限ない時に互りて、大地獄の苦を受けねばならぬ。いかなる良醫も此私の罪を救うて呉れることは出来ぬ」。

大臣申すよう。「大王よ。どうぞ愁を捨てられよ。古、羅摩王は父を害うて位を紹ぎ、また拔提大

王、毘樓眞王等の多くの王者も、皆その父を殺して位を継いだが、一人として地獄へ落ちたものはない。又、今の毘瑠璃王、優陀耶王等もその父を害うて位に即位したが、一人として惱み煩うたものはない。一體、地獄、餓鬼、天上等とゆうても、誰が見てゆうのでありましようか。唯あるものは人間と畜生との二道であります。而もこの二つとて、因縁によりて生まれたものではない。因縁がなければどうして善悪とゆうものがあり得ましよう。今、阿耨多羅三藐三菩提の道に於て、最上智をもち、金と土を等しなみに見、刀にて右の臂を刳る人にも、梅檀を左に塗る人にも、同じ親の心をかけ給う。此師こそ世の良醫にていらせられます。立居にも臥すにも禪定にあり、弟子達に語るよう、自ら作すにも、他に作さしむるにも、何の罪もない。恒河の南に大いなる施をなし、恒河の北に人々の命を取るも、福もこななければ、罪報も招くことはない。此大師はいま王舎城にいられます。どうぞ此師の許に赴きて教を受けて下さい。

八。又、吉徳大臣は申すよう。「大王よ。どうして面に光澤なく、晝の燈火のよう、國を失うた君のよう、又は荒れ果てた土地のよういらせられますか。今や國の四境には敵國の憂はない。何故に愁に沈み給うか。多くの王子達は、何時になつたら王位に昇りて自在の力を振うことが出来るであらうかと考えています。然るに大王はいま其願足り、この大いなる摩竭陀の國を領し、その上先王の遺さ

れた寶は藏に滿ち滿ちています。只、縦に樂に浸り給えばよろしい。何を好んで苦を懐かれるのでありまするか。

大王答えて。「私はいまどうして惱まされずにおられようぞ。譬えば愚者が美味を貪りて、その塗られた及を見ないよう、毒を喰うて後の禍を考えないよう、又は草を見る鹿が痒を見ず、食を求め鼠が猫を見ないよう、私は現在の樂に眼眩みて、後の苦を考えなかつた。嘗て智者のゆうごとく、よしや一日に三百の鑽を受けても、父母に對して一念でも惡を懐かぬと聞いている。あゝ、もう地獄の業火は近すいた、どうして苦まずに居られようぞ。

大臣申すよう。「誰が地獄のことを申して大王を誑したのであろう。罪人の頭を貫くとう利刀や様々の鳥の毛色は、誰が造る所でありましよう。水は性として潤し、石は堅く、風は動き、火は熱い。ものは、皆自ら生まれ自ら死す、これは誰の所作でもありません。地獄とは狡しい人の作つた言葉で、地は地、獄は破ること、即ち地獄を破れば罪の報はあり得ない。又地は人、獄は天である。父を害うて人天に到るのである。故に婆藪仙人は羊を殺して人天の樂を得たと唱えた。又地は命、獄は長いこと、生物の命を取れば長い壽を得るとゆう意味である。故に地獄なるものは實際はありません。大王よ。麥の種によつて麥を得、稻の種によりて稻を得、地獄を殺せば地獄、人を殺せば人を得るで

ありましよう。

大王よ。私はいま殺すとうこの成り立たないことを證明するでありましよう。若し人に我があ  
るとすれば、我は常に變るとゆうことがないから、殺すことは出来ぬ。それは壞れず縛られず、嗔ら  
ず喜ばず、虚空のようなものであります。さすればどうして殺害とゆうことがあり得ましよう。又若  
し我がないとすれば、ものはみな無常で、念々に滅びつゝあるから、殺さるゝ人も殺す人も念々に滅  
ぶとすれば、誰が罪を擔い得ましよう。大王よ。燒く火も罪なく、樹を斫る斧も、草刈る鎌も、人を  
殺す刀も、みな罪がないとすれば、どうして人にのみ罪があり得ましよう。大王よ。いま迦羅鳩駄迦  
延とゆう大師が王舎城にいます。一切智をもつて三世を見わし、恒河の水のようにあらゆる人々の罪  
を清められます。この大師の説によれば、人を殺しても慚愧がないならば、虚空が濁り水を受けな  
いように、惡に墮ちることはない。只慚愧あるものは、水が大地に入るように地獄に入るでありましよう。  
あらゆる生類は自在天の造るところで、自在天喜べば生類は安らかに、自在天嗔れば彼等は惱む。そ  
の罪も福も、自在天の造る所であるから、どうして人に罪や福がある。譬えば工匠が、造つた機械  
人形のようなもので、行くも住るも臥すも、たゞ一言も言うことはできぬ。生類も之と異なるこ  
とはない。こうした造化に誰が罪を擔い得ようと。大王よ。どうぞ此大師の教を受けて下さい。

九。更に無所畏大臣は申すよう。「大王よ。世に愚かな者があつて、一日に百度喜び百度愁え、百度眠  
り、百度寤め、百度驚き、百度泣く。賢い人にはどうしたことはない。大王は何故に、侶を失つた旅人  
のように、救のない泥沼へ墮ちたように、導き手のない迷い人のように、治しようのない病人、風波に  
覆えされた船のように、悩み苦んでおられますか。大王よ。どうぞ愁の毒を生み給うな。抑々王者  
として、國のため人民のため、人の命を取つても決して罪となる筈はありません。先王は沙門を敬わ  
れたが、婆羅門に承えることはなかつた。その心は平等でない。心の平等を失つたものは王者とは云  
われぬ。今大王は諸の婆羅門を供養するために先王を殺されても、何の罪がありましよう。

又大王よ。世に殺すとうこのことはありませぬ。元來、殺すとうこのことは命を害うことであるが、命  
は風氣を意味し、風氣の性は害うことはできません。されば命は殺すことは出来ない。どうして罪と  
なり得ましよう。いま尼乾陀若提子とゆう大師が此王舎城にありて、よく人々の機根を知り、あらゆる  
る方便に達し、世の盛衰に煩わされることはありません。清き行を修めて弟子達に説くよう。世に施  
もなく、善もなく、この世も後の世もなく、父母なく、徳者なく、道もなく、修めることもない。た  
だ人は八萬劫を経れば、生死は自から止みて、罪ある者も罪なき者も、自から等しなみに解脱を得る  
であろう。ちやうど四大河が流れ流れて自から大海に入り一つ潮となるように、人々も亦、解脱の境



に入るとき、あらゆる差別は失せるであらうと。大王。願くば此大師の敎えを受けて下さい。

王は又上の大臣に答えたように答えた。  
一〇。その時、耆婆とゆう大醫があつた。この人も亦、王の病床を訪れて申すよう。「大王。安らかに眠ることが出来ますか」。

王は之に答えて。「耆婆よ。私はいま重病に罹つてゐる。王法を護り給うた父王に無道な逆害を加えた。それから起つて来た重病である。この病氣は、どんな名醫でも、呪法でも、巧な看病でも、療治することが出来ぬ。何故かと云えば、先王は法の如くに善く國を治められ、少しも罪の在まさぬのに、私は無道の逆害を加え奉つた。丁度水中の魚を陸へ引き上げたような仕業である。私は嘗て智者から「身口意の三業の清淨でないのは必ず地獄に墮つる」とゆうを聞いたことがある。私は今それである。どうして安らかに眠ることが出来ようぞ。私には今、法の藥を説いて此病苦を治してくれ名醫がない」。

耆婆は之に答えて申上ぐるよう。「善い哉、善い哉。大王は罪を犯し給うたけれども、今重い後悔を起し、大いなる慚愧の心を起していられます、大王よ。諸佛世尊は常に仰せられます、「二つの善い法があつて、衆生を救う。一つは慚、二つは愧である。慚とは自分で再び罪を造らぬようにする心、愧とは

他人をして再び罪を作らしめぬようにする心である。又、慚は自ら内心に省みて恥る心であり、愧はその心が外に露われて他人に對して愧することである。又、慚とは人前を恥じ、愧とは天に恥する心である。これが慚愧である。この慚愧の心なき人は、人ではない畜生である。慚愧の心があるから、父母師匠を敬う心も起り、兄弟姉妹の秩序が結ばれるのである」と。大王が今この慚愧を起させられたことは誠にうれしく思ひまする。

大王よ。今あなたの重病を癒し工呉れる醫者がないと仰せられることはその通りであります。然し大王よ。よくお考え下さい。大聖世尊こそ、世に最も尊むべき方でありませぬ。よく障を破ること金剛のような智慧をもち、人々のすべての罪過を滅して下されます。この佛陀世尊があなたの重病を治して下さらぬとゆう答はありませぬ」。

一一。その時空中に聲あつて云う。「大王よ。一逆罪を作れば、それに相當した罪を受ける。三逆罪を作れば三倍になり、五逆罪を作れば五倍になる。大王の今迄の罪は、到底墮獄を免がれぬ。されば、一時も早く、世尊の御許に行け。世尊を除いては王を救うて下さる方はない。私は王を慰れみ、かように來て勧めるのである」。

阿闍世は。この空中の聲を聞いて非常に怖れ、さながら芭蕉の葉のように身をあけて慄い戦き、空

を仰いでゆう。「おん身は誰方であるか」。空中からは、もとのように、姿を顯わさないうで聲のみ聞こえた。「私は御身の父、頻婆娑羅である。耆婆のすくめに随つて早く世尊の御許に行くがよい。決して邪見な六大臣の語に迷わされてはならぬ」。

これを聞くや、阿闍世は悶絶して大地に倒れた。すると身體中の瘡が一時に増して、その臭いこと、以前に倍するようになり、冷藥を塗つて治療しても、瘡は益々華を開いたように割れては毒熱を吐き、少しも減らなかつた。

一二。世尊は遙にこの様を見わして比丘等に告げ給うよう。「善男子よ。私は阿闍世王の爲に、命を延べて、涅槃に入らぬであらう。迦葉よ。汝には、この秘密の意味がまだ解らぬであらう。何故かと云えば、私が『爲』とゆうのが、一切の凡夫のためとゆうことで、阿闍世は、すべて五逆罪を作つた人達の代りに出したまでである。また『爲』とゆうのは、一切の有爲の衆生、即ち凡夫二乗のためとゆうことである。私は無爲の衆生即ち證り得た衆生のために、この世に生きているのではない。證り得た無爲の衆生は衆生でないからである。阿闍世とゆうは、ひろくあらゆる煩惱を具足している凡夫を指すのである。また『爲』とゆうは、いまだ佛性を見ることの出来ない衆生のためのものである。佛性を見たものために、私はこの世に生きているのではない。何故ならば、佛性を見たものは既に

衆生でないからである。阿闍世とゆうは、いまだ無上の菩提心を起さないすべての衆生をひろく指すのである。また『爲』とゆうは、佛性のことである。阿闍世は不生怨とゆう意味であり、佛性の芽を生ぜないから一日中いろくの煩惱の怨を生むことである。煩惱の怨が起るゆえに佛性は見られぬ。もし煩惱を起さぬようになれば、本有の佛性を見ることが出来、従つて、大般涅槃の證に住み得るようになる。これを不生とゆう。それで阿闍世と名けるのである。善男子よ。又、阿闍とは不生とゆうこと、不生とは、不生不滅の涅槃のことである。また世とは世の八法(利、衰、毀、譽等)のことである。また『爲』とは汚されないとゆうことである。譽めたり毀つたりする世の八法に汚されずに、限もない永劫の間、涅槃に入らぬ。この故に私は阿闍世のために限ない時の間に住むとゆうのである。善男子よ。如來の秘密の語は思い識ることは出来ぬ。佛法僧の三法も亦不可思議である」。

二三。かくて世尊は、阿闍世のために、月愛三昧に入りて大光明を放ち給えば、この光明は清らかに涼しく、遙に阿闍世の身を照すに、全身の瘡は一時に跡形もなく癒えた。

阿闍世王のう。「耆婆よ。彼の世尊は天の中でも最も勝れた天である。どうゆう理由で、この光明を放ち給うたのであろうか」。耆婆答えて。「大王よ。今この光明の瑞相は、王のためにし給うのでありましよう。王が先に自分の病を治す醫師はないと仰せられたから、世尊はまずこの光明を放つて王

の身の病を療し、次に心の病に及ばせらるゝのでありましよう。王。「耆婆よ。世尊も亦私を見たいと思ひ給うであらうか」。耆婆答う。「譬えば七人の子供は皆變りなく可愛いが、その中の一人が病めば、親の心はとりわけ病む子に引かれるように、如來も亦一切の衆生を一子の如く平等に愛しみ給うけれども、特に罪の重いものに眼をかける。如來は放逸のものに對して慈悲の念深く、却つて道に勤め勵むことの出来るものには御心を緩めたもう。勤め勵む人とは上の位の菩薩の事である。大王よ。諸佛如來は衆生の氏や素性や、老若貧富の區別や、その生まれた時節、日月、星宿、又は彼等の巧なる藝等を觀給わず、たゞ善心あるものがあれば、愛憐の念を垂れ給う。大王よ。かような瑞相は、世尊が、月愛三昧に入つて、その定の中より放ち給うた光明であります」。王問うてゆう。「月愛三昧とは何のことであるか」。耆婆答えて。「譬えば月の光には、すべての青蓮華を鮮明に花咲せるはたらしきがあるように、月愛三昧には、衆生の善心を起さしむるはたらしきがある。それで月愛三昧と名けるのであります。又譬えて申せば、月の光は、すべての路行く人に喜びを興えるように、月愛三昧も涅槃の道を辿る修行者に、喜を興え給う。それで月愛三昧と名けます。又、この三昧は、あらゆる善の中ので、甘露の味がある。すべての衆生のよろこび願うものであります。それで月愛三昧と名けます」。

一四。その時世尊は、會座の大衆に告げ給うよう。「すべての衆生が、覺を得るに尤も近い因縁となるものは、善き友である。何故かと云えば、阿闍世王が耆婆のすゝめに隨わなかつたならば、王は永久に救わるゝとゆうことはなかつたのである。それであるから、證を得る近い因縁は、善き友である」。阿闍世は又世尊の御許へ參らうとする途中、耆婆から瞿伽離比丘が生きながら、大地が裂けて無間地獄に墮ちたことと、須那利多はいろいろの惡事を積んだが、世尊の御許へ走つて、すべての罪の消えたことを聞き、耆婆に語つて云うよう。「私はいま、この二つの事柄を聞いたけれども、私は猶迷うている。耆婆よ。汝と一緒に、同じ象に乗らうと思ふ。そうすれば、たとえ私が無間地獄へ落ちようとしても、汝が押えて墮さしめぬであらう。何故ならば、私は曾て、道を得た聖者は決して地獄に墮ちないと聞いて居るからである」。

時は十五日満月の夜、數百の象車は、炬火を先頭とし、肅々として林に向つた。やがて林に入るころ、阿闍世王は急に恐怖を覺え、戰きながら耆婆に云うよう。「耆婆よ。汝は恐らく、私を裏切つて敵に渡そうと云うのではあるまいが、何とゆう氣味の悪い靜けさであらう。千數百人の比丘達が居るとゆうのに、噫の音もなければ、咳一つ聞えぬではないか。何か企があるように思われてならない。耆婆の云うよう。」「大王よ。恐れず御進みなさい。あの林の中の阿屋に光が點されて居りますが、

あそこに世尊が在すのであります。大王は耆婆の語に勵まされ、象を下りて林に入り、世尊に近ずき禮をなして教を乞うた。

第五節 世尊の説法

一。世尊は阿闍世に教え給うた。「大王よ。譬えば幻術者が町の四つ角で、男女、象、馬、瓔珞、衣服のいろ／＼のものを作り出すを見て、愚かな人は眞實のものだと思ひ、智慧ある人は眞實のものでないと知つて居る。殺害も丁度その如く。凡夫は事實と思ふけれども、諸佛世尊は、殺すの殺されるのとのうことはみな幻であるを知り給うのである。又大王よ。譬えば山彦のようなもので、愚かな人は眞實の聲と思ふけれども、智慧ある人は、眞實の聲でない、たゞ反響に過ぎぬと知つて居る。殺害もその通りで、凡夫は眞實の殺害と思ふけれども、諸佛如來はそれは眞實のものでなく、幻に過ぎないと知り給うのである。大王よ。譬えば怨を懷いて居る人が、詐り親めば、愚の人はまことと思ひ、智者はよく見抜いて、その詐を看破するように、殺生罪についても、凡夫はまことのことと思ひ、諸佛世尊はその幻を知り給うのである。

大王よ。又譬えば鏡に向つて寫つたすがたを見て、愚のものはまことの顔と思ひ、智慧あるものは鏡中の影であると知るように、殺生についても、凡夫はまことと思ひ、諸佛世尊はその幻なることを知り給うのである。大王よ。又譬えば陽炎を見て、愚のものは水と思ひ誤り、智者は水でないこと知るように、殺生についても、凡夫はまことと思ひ、諸佛世尊は幻であるを知り給うのである。大王よ。又譬えば蜃氣樓を見て、愚なものは眞實の城と思ひ、智慧あるものは化城と知るように、殺生に就ても凡夫はまことと思ひ、諸佛世尊はその幻なることを知り給うのである。大王よ。又譬えば人が夢の中で五欲の樂を得るを、愚の人は現實のことと思ひ、智者は夢の中のことと悟るように、殺生についても、凡夫はまことのことと思ひ、諸佛世尊はその幻なるを知り給う。大王よ。私は殺す仕方も、殺す行爲も、殺す人も、殺した報も、そしてそれから解れる道も、すべてみな知つて居る。併し殺生の罪はない。王も殺すことを知つても、どうして罪があると言われよう。譬えば人あつて、酒のことを主り、酒のことはよく知つて居るけれども、もし飲まなければ酔うとゆうことがないように、又、たとえ火を知つていても火は物を焼かぬように、王も亦、殺生のことを知つて居つても、それでどうして罪があると云われよう。大王よ。人あつて、日の出て居る時に種々の罪を作り、月の出ている時に強盜をはたらき、日も月も共にない時に、罪を造らなかつたとすれば、日と月とに依つて

作つたとしても、日月に罪があると云われぬように、殺生についても亦その通りである。

二。大王。又譬えば涅槃の實性は有ともいわれず、又無ともいわれず、而もその業用のある邊からいえば有といわねばならぬように、殺生もその實體から云えば、有ともいわれず、無ともいわれないが、業用から云えば有と云わねばならぬ。慚愧の心ある人に對しては非有であり、慚愧の心のない人に對しては非無であり、その果報を受けた人から云えば有である。又諸法はもと空とする人は非有とする。ありとする人は非無とする。この有見を執している人は亦有とする。何故ならば、この有見の人は、罪の果報を受けるからである。この有見をもたない人は、罪の果報はないとゆう。それゆゑ、殺生の實體は、非有であり、非無であるが、而もその業用から云えば有といわねばならぬ。

大王よ。人とは、出入の息に名ずけたものである。この出入の息を断ち切つて仕舞うのを殺害とゆうのである。五蘊とも無常なれば、殺害とゆうことはないのであるが、諸佛世尊は世俗の人々に從つて假に説いて殺害とゆうことをいわれるのである。

三。その時、阿闍世王は世尊に左の如く申しあげた。「世尊よ。私は世間を見渡しまするに、伊蘭とゆう毒樹の實から伊蘭の樹が生え、伊蘭の實から栴檀の樹の生えたことを見た事はありません。然るに今私は初めて、伊蘭の實から栴檀の樹の生じたのを見ました。伊蘭の實とゆうは、私の事であ

ります。栴檀の樹とゆうは、私の心に生えた根のない信仰の事であり、根のない信仰とゆうは、私は今まで、恭しく、如來に事え奉つたこともなく、法寶、僧寶を信じた事もなかつたのでありますが、今突然信仰が生じたから無根の信と申したのであります。世尊よ。もし私にして如來世尊に御遇い申すことが出来ないならば、私は量ない劫の間、地獄へ墮ちて限なき苦を受けねばならぬのであります。私は現に今佛を拜み奉つていますが、願くば、この見佛のあらゆる功德をもつて、未來の衆生の煩惱を破りたいと思ひます」。

世尊宣うよう。「大王よ。善い哉、善い哉。汝のその功德をもつて衆生の煩惱を破り、悪心を除き得ることは、今私の見透している所である」。阿闍世は申しあげた。「世尊。もし私が、衆生の悪心を破ることが出来るならば、私は無間地獄にあつて、量ない劫の間、衆生のために大いなる苦を受けても苦しいとは思ひませぬ」。

この阿闍世の語をきいて、摩竭陀國の數多い人々は、一時に大菩提心を起した。これらの數多い人が大菩提心を起したために、阿闍世の重い罪は大いに薄らぐことが出来た。

四。其時、阿闍世、耆婆に語るよう。「私は近い中に死ぬべき身でありながら、死を免がれて王の身を得、短い命を捨て、長い命を得た。その上私の事が縁となつて、多くの衆生をして無上菩提心

を發さしめた。即ちこれが天の身、長い命、永えの身である。そして一切諸佛の弟子である。

かくて、いろいろの寶幢を以て世尊を供養し奉り、更に次の偈を以て、世尊を讚歎し奉つた。

(一)實の御言ぞ妙なれ、深き秘密の藏を、諸人に顯わし給う。かく具える御言もて、人々の病を除き給う。信なき人さえも、そを御佛の語と知らん。

その御語は一味にて、さながら大海の如く、是を第一義諦と名く、されば義なき語なし。

さまざまに説かれし法を、さまざまの人は聞けども、みな第一義の智慧を獲ん。

因もなく果もなく、生まれず滅びざるを、大いなる涅槃と名く。之を聞く人はすべての煩惱を破らん。

(二)あらゆる人々のために、佛は常に慈ふかき父母となり給う。さればものみは佛の子、世尊は大いなる慈悲により、魑魅に着かるゝ人の如く、なべて世の人々のために狂うが如く苦行をなし給う。

いま我、御佛を見奉りて、得る所の善と功德を、うえなき道に捧げん。

いま我、三寶に供養しまつりて、得る所の善と功德により、つねに三寶の世にあらんことを、願いたてまつる。

更にこの得たる功德により、人々のあらゆる魔を破らん。

(三)我は悪しき友に遇い、三つの世の罪を造りぬ。いま御佛の御前に懺悔し奉る。願くば悪を再びせざらんことを。

願くばあらゆる人々の、道を求むる心を發し、つねに心を注いで、あらゆる御佛を念いまつらんことを。

願くばあらゆる人々の、なべての煩惱を破り、明かに佛性を見奉らんことを。

五。爾の時に、世尊は阿闍世を讚めて宣うよう。「もし一人でも、大菩提心を發すものがあるならば、この人は諸佛の會座に集う大衆を飾るものである。大王よ。今より以後、常にこの菩提心を失わないようにつとめねばならぬ。何故ならば、この大菩提心に依つて量られぬ程の多い罪惡を滅ほすことが出来るからである。この説法を聞いて、阿闍世王及び摩竭陀國の人民は、各々その座より立ち、三度世尊を繞り、この會座を去り、阿闍世はその宮殿に歸つた。

六。かくて、阿闍世は臣下に告げるよう。「私はいまより以後、大聖世尊とその弟子達に歸依することとなつた。汝等今より世尊とその弟子達とを宮殿に迎え、提婆とその徒衆とを門内に入れてはならぬ」。

かくとは知らず、提婆達多は或日宮門に至れば、門を守る人は王の仰せを述べて彼を遮つた。彼が怒の情を懐いて門外に立つてみると、門内から蓮華色比丘尼は行乞を終えて出で來つた。提婆は彼女を見るや、怒は一時に發り、「汝は私に何の怨あつて、私をして此門内に入らしめないようにしたのであるか」と罵りながら、拳を固めて彼女の頭を打つた。尼は苦を忍び、その謂れなきことを述べたが、提婆は遂にその頭腦を打ち破つた。彼女は痛を忍んで、その精舎に歸り、驚き悲しむ比丘尼等に告ぐるよう。「姉妹よ、人の命ははかり知られぬ。諸法はみな無我である。寂かなる所が涅槃である。汝等勤め勵みて善き道を修められよ」。語り終つて涅槃に入つた。

七。提婆は遂に十指の爪に毒を塗つて、祇園精舎にいませる世尊の御許へ近ずかんと企てた。比丘等は提婆の姿を見て、世尊の御身を慮り、大いなる怖を懐いた。されど世尊は「汝等怖れることは要らぬ。提婆達多は、今日我を見ることは出來ぬであろう」と仰せられた。されど提婆は精舎に近ずき、比丘等の足を洗う池の邊に來り、暫時木蔭に憩うた。世尊は尙、前の言葉を繰り返して怖れる比丘等を制せられた。この時提婆の居る大地は自然に沈んで炎と燃え上り、忽ち膝を埋め、臍に及び、肩に及んだ。彼は火に燒かれて、我が逆罪を悔い、南無佛と叫びながら沈んだ。この時二つの金挺は彼を前後より挟み、そのまゝ火炎の大地に捲き込み、阿鼻地獄に引き込んだ。

### 第三章 殉道

#### 第一節 道に殉ずるもの

一。世尊は又も諸方をめぐりて舍衛城に歸り、祇園精舎に入り給うた。舍衛城の給孤獨長者は、世に名高い富豪である。金銀財寶は數え得ぬほどに倉々に満ち、召使う男女の數も多くあつた。其頃、滿富城に滿財と云う長者があつて、その富も山の如く、給孤獨長者とは幼い時からの友達で、常に親しく、忘れ得ない間柄であつた。給孤獨長者は、その商品を滿富城で賣拂い、滿財長者は、舍衛城において商する習慣であつたので、常に往來していたのである。

或時滿財長者は、用事あつて舍衛城に赴き給孤獨長者の家に宿つたが、給孤獨長者の娘、須摩提は、天成の麗質、桃の華の如く、世にも稀な美しきを具えていたが、客來と聞き、靜に室に來つて、父母を拜み客の滿財長者に挨拶して、又、自分の室に歸つた。滿財長者は、主人の娘と知つて云うには、「私に男の子があるが、まだ定まる妻もないのであるから、迎えて悻の嫁に致したい」。それは御断

り致しましよ。」「何故でありますか、氏素性が違ふからと仰せられるか、または財産が比べものにならぬと仰せられるか。」「氏や素性や財産のことは申しようもありませぬが、最も大切な宗敎が違います。私の娘は、釋迦牟尼世尊の御弟子であるが、貴方は異敎を信じていられますから、御断りするのであります。」「それは何でもないこと、宗敎が違つても、何も強いることはいたしませぬ。銘々が別々に信仰して居れば善いことであるから、どうか枉けて、御娘を賜わりたい。」「給孤獨長者は、こういわれて断る辭に窮して、金錢のことで断ろうと思ひ、仕度の金として莫大な額を要求したが、滿財長者が直に承諾したので、今はどうすることも出来ず、このことは一應釋迦牟尼世尊に御伺いしてからと、一時、返答の猶豫を願ひ、直に世尊の御許に詣でて、この事を御計りした。世尊の仰せられるよう。」「長者よ。もし、汝の娘、須摩提が、滿富城に嫁いだならば、人民を救ふこと數えきれないほどであらう。」「

この御話を聞いて、給孤獨長者も心をきめ家に還り、更に宴を新にして滿財長者を饗應し、その要求に應ずる旨を答えて、茲に婚約を結ぶこととなつた。

二。善は急げと早速婚禮の仕度をして、定められた日に、滿財長者は寶羽の車に息子を乗せ、嫁を迎えに出させた。給孤獨長者も亦今日を晴と須摩提を飾らせ、七寶をちりばめた美しい車に乗せ、

中途で迎へる者に遇わせるようにした。それで芽出度く道中に遇つて、滿富城に歸り、盛んな婚禮を挙げた。

その頃滿富城には一つの掟があつて、他國の者と結婚することを禁じ、もしこの禁を犯さば、數千の婆羅門の行者を迎へ、盛んな宴を張つて披露せねばならぬとゆう罰則が設けてあつた。然し、巨萬の富をかゝえた滿財長者には、もとより、これほどのことは何の苦でもないから、直に多くの行者を招いて宴を開くこととなつた。

その日が來ると、行者達は相續いで長者の家に集つた。彼等はみな裸體であつた。長者は彼等を迎へて座に請じ、飲食を饗應し、須摩提を呼ばしめて云うよう。」「汝、身の粧装を濟ませて、この室に來り、我等の師匠を禮拜するが善い。」「須摩提は之を却けて云うよう。」「私は裸體の人を禮拜するに堪えません。慚を知らぬ人々を師匠として禮拜することは出来ませぬ。長者云うよう。」「何も此人達は慚を知らないで裸體で居るのではない。法服を身につけて居るだけである。」「既に裸體であるから法服とゆうことは出来ませぬ。私の世尊は、二つの事が最も世の中の尊いことだと教えられて居ります。それは慚と愧とであつて、この二つがなければ、父母、兄弟、姉妹、親族の區別もなく、鶏や犬と擇ぶ處がないと云うのであります。今これらの人達は、この慚と愧の二つがなく裸體であ



るから、鶏や犬と擇ぶところのない人達であります。私は到底、その場に行つて撈撈することは出来ません。夫も頼に挨拶に出るようと勤めもし願ひもしたけれども、肯んじない。寧ろ八裂にされても、この邪見の中に墮ちることをしないと云い張つた。

この様子を薄々知つた數知れぬ梵士達は非常に立腹し、聲高らかに云うよう。「長者よ、止めよ止めよ。この卑しい女に、徒に、罵の語を放たしむるのは何の故であるか。我々は既に招待せられて來たのであるから、先ず供養の膳を出す方が善いではないか」。茲において、長者も止むを得ず、須摩提のことは止め、善美を盡した膳部を出し梵志達を供養した。彼等は充分にその供養を受けて、長者の家を立ち去つた。

三。長者は心樂します。獨り高樓に昇つて、「噫。とんでもない嫁を迎えたものだ。これでは家を齊えるのでなく、家を破ると云うものだ。今度ほど我が一門を辱めたことはない」と悲んでいた。この時、須跋とゆう梵士がいた。五つの神通を具え諸の禪定に通じた人であつたが、久々に長者に遇おうと訪ねたが、長者は獨りで高樓に昇り、何事か深く心配している様子であると聞き、急いで長者の所へ来て、其心配の譯を問いたゞした。

「何をそんなに心配していられるか。何か官憲の方から無理でも云いかけられたのか、又は盜賊か水火の害でも受けたのか、或は家庭の内に面白くないことでも出來たのか、その譯を云つて見たら宜からう」。

「御親切は誠に有り難いが、官憲や盜賊の害を受けたのでもありません。水火の災のあつた譯でもありません。只一寸家庭内に面白くないことが起つたのであります。と云うのは、實は近頃、息手に嫁を迎えました。そのために國の掟を犯したとゆうので、婆羅門の師匠方を招いて御饗應申すと、嫁が、私の言いつけを守らず、どうしても師匠方に禮拜しないのであります。」「それは誰の女でありますか。」「舍衛城の給孤獨長者の女であります。これを聞くと、須跋は飛び上るほどに驚いて、兩手で耳を覆うようにして云うには、「嫁さんは、その云い付けを聞いて、樓上より身を投げて自殺をしなければなりません。嫁さんの師匠は、實に立派な清淨の行を守る人、偉大な威神力のあられる御方であります」。

「あなたが又、教を異にしている沙門喬答摩を、そのように賞めるとゆうのは、可笑いことではありませんか。」「どうして、沙門喬答摩の威神力は、到底我々の想像も及ばない處である。私の見ただけを御話し申そう。夫分前のことであるが、私が雪山の北に入つて、托鉢した後、阿耨達池の畔に到ると、其處の天龍鬼神が顯われて、私に刀劍をつきつけて云うには、「須跋よ、この池の畔に

留つて池水を汚してはいけない。若し命令に順がわなければ氣の毒ではあるが、生命を取らねばならぬ。私は此の語におびえて、池の傍を離れ食事をし、見ていると、釋迦牟尼の一番小さな弟子の均頭が、手に汚い塵溜から拾うて来た衣を持つて顯われた。すると先に私を威した天龍鬼神が、恭しく出迎えて、下にも置かぬ待遇をする。池の中に黄金の臺があるが、均頭は先ずその汚い衣を水に着けて置き、食事をなし鉢を洗うて後に、その臺の上で禪定に入つた。初禪二禪三禪四禪、空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非々想處を通つて滅盡定に入り、又、逆に滅盡定から非想非非想處へ、次第に三禪二禪と過ぎて初禪より立ち出で、衣を洗いに掛つた。すると天龍鬼神のあるものは一緒に衣を洗い、或者は水を漑ぎ、かくして洗い終つてその衣を以て空中を飛んで住所に歸つたのである。私はこれを見ていながら、どうしても近づくことが出来ないのである。長者よ。嫁さんの師匠の最小の弟子でさえこのような不思議の力があるので、覺をお開きになつた釋迦牟尼佛の威神力は想像も及ばないのである。その嫁さんに今日、教を異にする梵士達を拜めと強いたのであるから、嫁さんが身を投げて死ななかつただけでも、大いに喜ばねばならないことである。「私どもはその私の嫁の師匠とゆう方を拜むことが出来ましょうか」。「それは私に尋ねるよりも、嫁さんに聞かれたら宜しいであろう」。

四。茲において、長者は須摩提を呼ばしめて、汝の師匠を拜みたいと思つたが、茲に請ふことが出来ようかと尋ねた。須摩提は大いに喜び、長者の請う儘に、香爐を手にし、高樓の上から、合掌して申すよう。「世尊よ。世尊は何事も知らしめします。今私は茲に困厄の間にありますから、どうぞ哀憐を垂れて垂迹を賜わりたい。

世を觀わし給うことあまねく、鬼神を降し、鬼子母を教え、指鬘の母を斬らんとするを救い、王舎の城に醉象を化し給う。

わらわ、今、苦にあれば、願くば駕を枉けて救い給え。

この歌を歌うと、不思議や、香は雲の如く走つて、祇園精舎の林を籠め、天神は喜んで花を雨降らして須摩提の願を讚歎し、如來は此有様をみて微笑を洩し給うた。阿難も亦、林を籠めた妙香の雲を見て希有なる思をなして、世尊の處へ行き、この謂を尋ね、須摩提女の明日の請待と云うことを知ることができた。世尊は仰せらるゝよう。「そうゆう譯であるから、煩惱を盡して覺を開いた阿羅漢のうち、明日は闍を引いて、滿富城に行くことにいたそう」。阿難は仰せを受けて、比丘等を集めて、そのことを傳えた。

この比丘の集の中に、鳩吒陀那とゆうものがいたが、自ら思ふよう。「私は出家して既に久し

いにかゝわらず、まだ煩惱を盡して覺を開くことが出来ない。均頭はこの僧伽の最年少者であるに拘らず、煩惱を盡して覺を開き、明日は世尊と共に滿富城に行くことが出来る。今日こそ勤め勵みて涅槃の地に入ろう」と果してその望の如く覺を得、其日圓を取つて第一に當つたので、世尊は我が弟子中圓を得る第一は鳩吒陀那であると仰せられた。

五、翌日、世尊の命を受けて、目連、大迦葉、阿那律、離波多、須菩提、優留毘羅迦葉、羅睺羅、朱利槃特、均頭などの神足ある人々は神通によつて滿富城に向つた、寺男の乾茶とゆうものも、自ら大釜を負うて最先に城に赴いた。長者はじめ多くの人々は高樓にあつて遙に世尊の近すかせ給うを拜んでいたが、乾茶を見て須菩提に尋ねるよう。「あの白衣を着て髪をのばし、大釜を負うて疾風のようにやつて來られるのが汝の師匠か。」「さようではありません。彼の人は乾茶とゆう寺男であります。三明に達し、五通を得ていられます。」「

均頭沙彌は又、色さまざま、五百本の華の木を作り、それに取り圍まれてやつて來た。「何とゆう夥たゞしい華であろう。空一杯に滿ち滿ちている。あれが汝の師匠であるか。」「さようではありません。須跋仙人が御話なされた均頭と云う人で、舍利弗尊者の弟子であります。」「朱利槃特は毛色の青い五百頭の牛を化作し、自ら牛の上に坐禪を組みながら來た「あの青い毛並の

數多の牛を連れて坐禪のままでやつて來られるのが汝の師匠であるか。」「そうではありません。あれは、自分の姿を巧につくられる朱利槃特と申す方であります。」「

羅睺羅は五百の孔雀を牽い、摩訶劫賓那は五百の金翅鳥を牽い、優留毘羅迦葉は五百の大龍を、大迦旃延は五百の白鳥、離波多是五百の虎、阿那律は五百の獅子、大迦葉は五百の馬、目連は五百の白象を牽いてやつて來た。白象には各々六牙あつて、金銀を以て飾りちりばめ、光り眩ゆく、天には伎樂、地には花叢、美しさゆうばかりない。長者の間に對して、須菩提は一々諸尊の名と功德とを説き教えた。

六、暫くすると、世尊は右に憍陳如、左に舍利弗、後に拂子を取つた阿難を從え、諸天龍神に護られて飛行し給うた。五髻童子は璠璃琴を掻き鳴して如來の功德を讚え、天華雨降つて、如來の上に散り、舍衛城の波斯匿王、給孤獨長者、其他の人々はよろこび極なく、各々名香を焼いて供養し奉つた。給孤獨長者は歌うて云うよう。

御佛の力はかりなし、民をいつくしみ給うこと子の如し。たのしきかな、我が子須菩提。御佛の教をうけよ。

五髻童子は空中にあつて、一段と璠璃琴の糸音を立て、歌うた。

迷の惱、永く盡き、心みだれず、穢の障離れて、御佛はいま行きたもう。心きよく、邪の思離れ、功德は海のごとし。

顔妙にすぐれ、惱ながく起らず、愛によりて自らとゞまらず、御佛はいま行きたもう。

御佛は今ゆきたもう。四流の淵を渡りて、生死をはなれ、迷の根をたち給いつ、御佛は

いまゆきたもう。

滿財長者は恰も須彌山が光り輝いて動いて來るような偉大な光景にうたれ、たゞうつとりとして仕舞つた。「あれは日の光か、生まれて見たこともない有様、數千萬の光が輝いて、見とむることさえできない」。日の光りではありません。と云うて太陽を除いて何と喻えましょう。あの數千萬の光は皆一切衆生のため、あれこそ、我が師、御佛に在します。聞ゆるは御佛の功德を讃える聲、さあどうぞ、懇に供養をなされて、大きな果報を得て下さい。

七。滿財長者は右の膝を大地につけ、合掌して、世尊に歸依申しあげた。

十方の御佛に歸依し奉る、まどかの光、こがねの色、人天ともに讃うるところ、我いま

歸依し奉る。

御佛は、日の光、星のなかの月の光、すくいたまわぬものはなし、われいま歸依し奉る。

御姿は天帝釋の如く、慈悲は梵天の如く、自らさととりて、人を覺らしめたもう。我いま歸依し奉る。

天の中の天、神のなかの神、外道異敎を降し給う。我いま歸依し奉る。

須摩提も跪いて、手を合わせ歌うよう。

自らを調べて、他を調べ、自らを正しうして他を正し、自らさととりて人を覺らしめ、心の垢を去りて他をして去らしめ、自ら照して他を照し、すべてを救い給わぬところなし。

争をとがめ、鬭をなくし、思すましてきよく、心動くことなし、十力の尊、世をあわれみ給う。我いま重ねて歸依し奉る。

慈悲喜捨の四無量心を具え、空無相無願の三昧に住み、世の最尊に在ます御佛に長者も須摩提も、心身を擧げて歸依したので、今は外道の梵士達も、なす術なく、國中の人民を失うて城を離れ去つた。丁度獸王の師子が谷間を出で、四方を見廻して三度吼ゆれば、すべての鳥獸、力すぐれた、象王までが、逃げ走つて姿をかくすがごとくであつた。世尊は茲において、空より下つて常の法の如く滿富城に入り、城門の闕を踏み給うと、天地は六種に震動を起し、美しい華が雨の如くはらくと散り布いた。人々は世尊の澄み切つて氣高い御相を見て、同音に歌うた。

御佛は尊し、異敎の師は當らじ、われら眼昏く、仕うる處をあやまてり。

一八。世尊が長者の家に入り給うと、人々は我勝ちに世尊を見奉らんといひしめき會ひ、堅牢の家も壞れて仕舞う有様であつた。世尊は人々の心の思を押し量り、急に長者の家を化して玻璃殿となし、澄明に、限なく見透すことの出来るようになし給うた。須摩提は今や喜と悲に堪えられず、世尊の御前に歌うよう。

なべての智慧をそなえ給ひ、迷を離れ、惱を捨てたまえる御佛に、我いま歸依し奉る。

悲しや我、正法の家を離れて、異敎の家に嫁ぎ、五逆邪見の人々に交わる。願うは御佛のめぐみ、何の縁にや、敎異なる土地に嫁ぎ、霞にかゝれる鳥のごと、願うはたゞ御佛のおんなさけ。

世尊も亦歌をもつて慰め給うた。

思をはらし、心をかろうせよ、罪の報にて、この家に歸きしにあらじ。

すべてはもとの、願を満さんためぞ。御身昔この人々と縁を結びて、今そのこのみを擧げんためぞ。

須摩提はこの御歌を聞き、躍り上るほどの喜を得た。やがて、長者は家族や婢僕を従えて、世尊

初め比丘等に御供養をいたし、食事が終つて後、世尊の御前に低く坐つた。世尊は茲に感謝の法話をなし、布施の功德を説き、世微の穢を説き、次第に聽く人々の心を調えて、最後に苦集滅道の四諦の妙理を説き給うた。満財長者、須摩提女を初め、數千の聽衆は、皆塵垢を離れて法の眼を得、疑を絶つて三寶歸依の者となつた。

御佛の御耳は清くほがらかに、我が願をきこしめし、駕を枉けて、御教を垂れたまい、

諸人、法のまなこを得たり。

須摩提女は、この歡喜の歌を歌うた。

九。この時比丘等、世尊に申しあぐるよう。「この須摩提女は何の因縁によつて、給孤獨長者の如き富貴の家に生まれ、敎を異にする邪見の家に嫁ぎ、いま又この覺を自らも得、又多くの人々にも得させることが出来たのでありますか」。世尊教えたもうよう。「比丘等よ。昔、迦葉佛の御世にペナレスに哀愍とゆる王があり、その王女を須摩那と名けた。王女は、迦葉佛に歸依し、常に清淨の行を守り、布施、愛語、利行、同事の四攝法を修め、高樓にあつて經典を讀誦し、常に此の願を立て居た、「この四攝法を修め、敎典を讀誦する事に徴かでも功德がありましたならば、この功德によつて、常に貧しく生まれることなく、未來には御佛に遇い奉り、女人の身を轉ずることなしに、淨い法の眼を得

たいものであります」。

城内の人々はこの王女の願を聞いて、高樓の下に集り、若し王女にその願の契う日があつたならば、自分等も同じく王女と共にその功德を得たいものであると願つた。王女は承知をして、その功德を平等に他にも施し、同じく覺を得ることを誓つたのである。比丘等よ。その時の哀愍王とは今の給孤獨長者であり、須摩那は即ち須摩提である。須摩提は昔の誓によつて私に遇い、その時の城内の人々と共に、今日淨き法の眼を得たのである。比丘等よ。四攝法は、最も勝れた福田である。比丘にしてこの四攝法に親しめば、四諦の理をさとることが出来る。それ故に比丘等よ。この四攝法を成就することを忘れてはならぬ。世尊は、比丘等をつれて、座を立ち、再び祇園精舎に歸り給うた。

第二節 菩提王子

一。それより、世尊は比丘等を伴い、跋伽の國に入り給うたが、ちやうど、その國の菩提王子の宮殿なる紅蓮殿が出来上つて間もない時で、まだその落成式を擧げるに至らなんだ。菩提王子は世尊が跋伽へ到着せられたことを聞いて大いに喜び、サンチカ・ブッタを使として世尊に云わしめた。「世

尊。菩提王子は世尊の御足を頂禮して、世尊の御健かに在ますか否かを御伺い申します。世尊。明朝、比丘衆と共に私の施食を受け給うよう御願い申します。世尊は默然として之を受け給うた。

菩提王子はその夜を過ぎて食事を用意し、世尊に時を御知らせ申しあげると、世尊は鉢を手にして比丘衆と共に紅蓮殿に赴き給うた。新しい木の香のする宮殿の階には白布が敷いてある。世尊は暫し立ち降り給うた。菩提王子は申上けるよう。「世尊。どうぞ白布を踏んで下さい。私の永久の利益と幸福のために」。世尊は阿難を顧み給うた。阿難は菩提王子に向い。「王子よ。白布を取り除いて下さい。世尊は末の世の衆生を憐み、範を垂れ給うがために、布靴を踏むことはなされませぬ」と云つた。王子は白布を取り除かしめた。世尊は階を昇つて宮殿の座につき給うた。王子はいろ／＼の珍味を調べて御饗應もつた後、世尊の食を終り給うたのを見て、自らも低い座を運んで世尊の傍に坐し、世尊に申しあげた。「世尊。私は樂に依つて樂を得ることは出来ない。苦に依つて樂を得るものと思ひます」。世尊は長々と自分の出家以前から、出家以後の求道生活の物語をなされ、自分も太子であつた時は、樂は樂によつて購われず、苦に依つて得られるものと思つていたが、まことは正しい樂は樂しい道によつて得られるものであることを話し聞かされた。

二。菩提王子。「世尊。如來を師として、幾年かゝりましたら、家を出でて沙門となつた目的を果す

ことが出来ましようか。「王子よ。それでは私の間に對して、思ひの儘に答えるがよろしい。王子は巧みに象を使われるか。「かなり巧みに象を使いこなせます」。王子よ。たとえば或人が王子から御象の術を學ぼうとする。而もその人は信もなく多病であり、虚偽多く怠惰である。王子よ。かゝる人は王子の傍で御象の術を學び得るであらうか。「その一つの性質があつても術を會得することは出来ません。況んや五つの性質を具えては勿論駄目であります」。王子よ。もしまた或人が王子から御象の術を學ぼうとする。彼には信があり、無病で、虚偽なく、勤勉で、智慧がある。王子よ。この人は王子の傍で御象の術を得るであらうか。「世尊。その一つの性質があつても術を會得することが出来ません。況んや五つの性質を具えて居れば勿論出来るに相違ありません」。

「王子よ。丁度その通りである。若し比丘にして五勤支、即ち信、無病、無虚偽、勤勉、智慧あつて、如來を師とすれば、七年乃至一年、否、一月、又は一日にして、さとりを聞くであらう、否、一日ではない、朝に聞いて夕に、夕に聞いて朝にさとりを聞くであらう」。

この御話が終つた時に、王子は。「お、佛陀よ。お、御法よ。お、朝に聞いて夕に、夕に聞いて朝にさとりを聞くとゆういみじくも説かれた御法よ」と讚歎の聲を放つた。

三。サンチカブッタが喙をさしはさんだ。「王子よ。あなたは「お、お」と讚歎せられたが、

佛陀と法と僧伽に歸依せられるが善いではありませんか。「サンチカブッタよ。云うなく、私は私の母上から聞いていた。世尊がすつと以前に橋賞彌に御出でなされ、聖師多園に御逗留の時、私を腹に宿した母上は世尊の御許に詣でて申しあげた。「世尊。私のお腹の子が男でも女でも、三寶に歸依いたします。世尊。どうぞ一生涯歸依いたしまする信者として受け入れて下さい」と。

サンチカブッタよ。又これも以前、世尊がこの跋伽にお出でなされた時、乳母が私をつれて世尊のお傍にて同じように歸依の言葉を申上げた。サンチカブッタよ、これは私の三度目の歸依である。世尊。私は三寶に歸依いたします。どうぞ生涯優婆塞として受け入れて下さい」。

第三節 質多長者

一。マツチカサンダの質多長者は、アンバータカの子に住む比丘等を屢々その家に招待した。或日も比丘等を招待して、上座の比丘に尋ねるよう。「尊者よ。世の中にはいろ／＼の異見が行われています。例えば世間は常住であるとか、無常であるとか、有限であるとか、無限であるとか、如來は死後存在するとかせないとか、又は存在して而も存在しないと、存在するでもなく、存在しないで

もないとか、或は靈魂と肉體は一つであるとか別であるとか、いろいろの異見があり、世尊は總て六十二種の見解を梵網經に示して居られます。一體これらの異見はどうして起るのでありましょうか、何に基いてあるのでありましょうか」。

この質問に對して上座の比丘は沈黙していた。二度三度同じ問をせられても沈黙していた。するとその比丘の中一番年若なイシダッタ比丘が進み出でて、上座の比丘の許しを受けて答えた。「長者よ、それは身見があるから。これらの異見が起るので、身見さえなければ起らないのである」。

「大德よ。その身見とは如何なるものでありますか」。「長者よ。それはこの身體をこしらえている五蘊に對して、『我』と見ることである。聖敎に昏い凡常のもの、起す考えである。佛の敎に慣れ、佛の敎に心を磨くものは五蘊を『我』と見ないのである」。

「大德よ。あなたは何處から來られましたか」。「私は阿盤底の國から來たのである」。

「大德よ。阿盤底には、私の未見の友でありますか、イシダッタとゆうものが出家いたしました。大德は彼に御遇いなされたことがありますか」。「長者よ。私は遇いました」。「彼の尊者は今何處に住もうていられますか」。こう問われて、イシダッタは沈黙して答えなかつた。

「大德よ。あなたはイシダッタと云われますか」。「そうです」。「大德よ。どうぞ長くマツチカサ

ンダの楽しいこの林にお住い下さい。私は及ばずながら、大德の衣食坐臥湯藥の心配を申しあげます」。「長者よ。お言葉はうれしく頂きます」。

質多はイシダッタの語を非常に喜び、比丘等に食事を供養した。林に歸つて後、比丘等はイシダッタの勞をねぎらうたが、彼は坐具を收め、鉢を持つて、何處ともなく去つて、再びマツチカサンダに戻つて來なかつた。

二。裸形外道の迦葉は質多優婆塞の在俗の朋友であつた。迦葉がマツチカサンダに來たとゆうことを聞いて質多は迦葉を訪問し挨拶し終り、出家して以後何年になるかと尋ねた。「家主よ。出家してから三十年になります」。

「大德よ。この三十年に依つて、何か超人間の法を得、勝れた神聖の智見を開き、平安な心境を得られましたか」。「家主よ。三十年は過ぎたが、裸體と禿頭と論議に巧みになつただけで何も變つたことはありません」。

「大德よ。三十年も出家して、裸體と禿頭と論議に巧みになつただけとは、大德の敎法は誠に珍しいものであります」。「家主よ。あなたは優婆塞になられてから何年になりますか」。「三十年になります」。「その三十年に、何か超人間の法を得、勝れた神聖な智見を開き、平安な心境を得られた



か。「大徳よ。得なくて何としましょう。私は初禪、二禪、三禪、四禪に自由に入ることが出来ます。又、私が私の世尊よりも早く死ぬならば、世尊は私のことをこの世に再び歸つて来る煩惱がなくなつたものと説明せられるではありませんか。家主よ。在家にありて、その様な勝れた結果を得るといふは、何とゆう立派な法であろう。私もその教の下に出家することが出来るではありませんか。賈多優婆塞は、迦葉を連れて、比丘の處へ行き教を聞いて、因縁を結ばしめた。

三。この時、世尊は、ウヂェンニヤ一の國、カンナカッタラの鹿野苑においてなされた。裸形外道の迦葉は世尊を御訪ねして申しあぐるよう。「尊者よ。あなたはあらゆる苦行を嫌い、苦行者を誹られると私は聞いて居ります。それは眞實でありますか。」

「迦葉よ。これは私の意見ではない。又、私を正しく傳えて居るものでもない。迦葉よ。私は天眼をもつて、苦行者が死後地獄に落つるをも見、天界に生まれるをも見る。又、少く苦行する者の死後地獄に墮つるをも天界に入るをも見る。斯うに苦行者に墮獄するものもあり生天する者もあることを知つていて、どうしてひたすら苦行を嫌い苦行者を誘ふことが出来ようか。」

迦葉申すよう。「尊者よ。裸體でいるとか、供養の食を受けないとか、半月ずつ斷食するとか、牛の糞を食とするとか、樹皮獸皮を衣とするとか、常に立つている行を守るとか、夜三度水浴するとか云う苦行は、沙門に相應しいもの、婆羅門に相應しいものと云われて居ります。」

「迦葉よ。たとえこれらの苦行をしていても、その人に戒と定と智慧との得達がなければ、眞の沙門、婆羅門たることは遙に隔たつて居るのである。曠なく害意なく、慈心を修め、煩惱を盡し、現在さとつて居るならば、この比丘こそ沙門、婆羅門と云わるゝのである。」

尊者よ。沙門となり、婆羅門となるとゆう事は何とゆう困難なことでありましょうか。「迦葉よ。その困難とゆうことは、苦行を修するとうことではない。苦行ならば水缸を腰で運ぶ下女でも出来ないことはないものである。曠なく、害意なく、慈心を修め、煩惱を盡し、現在さとるとゆうことが實に困難なことである。」

尊者よ。それでは沙門であり、婆羅門であることを知ることが困難なことではありませんか。「迦葉よ。その知るとゆう困難も、苦行に依つて、沙門であり婆羅門であることを知るは困難ではない。苦行ならば水缸を腰で運ぶ下女も出来ないことはないものである。曠なく害意なく、慈心を修め、煩惱を盡し、現在さとるとゆうことについて、沙門、婆羅門を知ることが困難なのである。」

四。「尊者よ。然らばその戒と定と慧との得達とは如何なるものでありますか。「迦葉よ。戒の得達とは、如來がこの世に顯われて自らさとつて他を教える。茲に入あつてその教を聞いて信を起し

て出家をする。戒に従つて身を守り、正しく行つて樂となし、小さな罪にも恐を見、官能を守つて正しい智慧を具え、殺生を止め仁を持ち、偷盜を止め心を清め、姪を離れ妄語をなさず、粗暴な語を吐かず、正しい生活を営むことである。定の得達とは、比丘が眼を以て物を見る場合にも、その官能をよく守つて相を取らず、往くにも還るにも留まるにも臥するにも、心眼を明かに開いて正心正念であり、鳥が身に付けた翼の外何も持たないで飛ぶように、身を包むだけの衣と、腹を満すだけの食で満足し、樹の根、洞穴、林、廣野、墓地の閑居を擇んで靜坐し、貪欲と嗔恚と惛眠と悼悔と疑とを離れ、健の人、自由の人、安全の人となりて、喜と樂とを得て初禪、二禪、三禪、四禪に入ることである。慧の得達とは、この定によつて靜かに清らかに透明にされ、何物にも煩わさるゝことのない心で、この身の無常を知り無我を知り、五つの神通を得、四諦の道理を知り、煩惱を滅ぼして覺を開き、解脱したとゆう明かな自覺を生ずることである。

迦葉よ。これよりも勝れた戒定慧の得達はない。戒と苦行と厭離と智慧と解脱とを讚美する沙門、婆羅門がある。然し私ほど清くして高い戒と苦行と厭離と智慧と解脱とを具えたものはない。それらの最上に達したものが私である。

迦葉よ。私のこの師子吼について、或者は云うかも知れない。沙門喬答摩は人の居ない所で師子吼

するが、その師子吼は信念を以てするのでない。人はその師子吼を聞いて問をかけない。問をかけられて答えることが出来ない。よし答えることが出来ても、人をして満足させ、信ぜしめることが出来ない。迦葉よ。かように考へてはならない。私は群衆の前で師子吼する。信念を以て師子吼する。人々の間に對して答へ、満足せしめ、信ぜしめる。迦葉よ。嘗て王舎城の靈鷲山において、汝と同じ苦行者の尼拘盧陀は、厭離の最高形式について私に尋ね、私の説明を聞いて、無上に喜んだことがある。

五。「世尊よ。世尊の御説明を聞いて無上に喜ばないものがありましたでしょうか。私も今無上の喜を得ました。世尊よ。私は今三寶に歸依して世尊の御許に出家したいと思ひます。どうぞそれを許して頂きたい」。

「迦葉よ。前に他の敎派に屬していたものが、この我が敎において出家し、敎團に入りたいと願へば、四箇月の間別住し、四箇月を過ぎて敎團に加えることになつてゐる。勿論、特別の場合も考へてはあるがそれが規則である」。

「世尊よ。四箇月の別住が規則とすれば、私は四箇月の間別住いたしましたしよ。どうぞ四箇月の後私を敎團に御加え下さることを願ひます」。迦葉は、かくて出家を許され、敎團に加えられて問も

なく、熱心と精勵とによつて覺を開くに至つた。

六。また或日、カーマプー比丘は質多長者に招待せられ、その家に行いて云うよう。  
「長者よ。」

汚なき白の天蓋ありて、輻一つにて行く車、流を斷ち縛られず、愼なく行けるを見よ。

とゆう偈文の意味を知つて居られるか。「大徳よ。それは世尊の偈でありますか。」「その通りである。」「それでは少し御待ち下さい。考えて見ましよう。」「

長者は暫らく考えて口を開いた。「大徳よ。汚なきとは戒の名、白き天蓋ありとは解脱の名、輻一つとは正念の名、車とは四大より成り、父母より生まれ、やがてこわれゆく身體の名、流を斷つとは渴愛を離れ煩惱なきこと、縛られずとは貪欲、瞋恚、愚癡の縛を離れること、愼なきとは煩惱の煩なきこと、行けるとは目的に達した覺のことであります。」「善い哉、長者よ。長者の智慧の眼は深く佛の御語をさとつていられる。」「

長者が死の病に寢ていた時に、林の樹神が顯われて。「長者よ。未來には轉輪王となるよう願われよ。」と勸めた。「それも無常である、こわれるものである。捨てて行かねばならぬ」と長者は答えた。枕邊に控えていた親類朋友は、これを聞いて、「主人よ。氣を確に持つて下さい」と云つた。「人々よ。

私を氣狂あつかいにして呉れるな、今、林の樹の神が顯われて、未來には轉輪王となるように勸めたから、「それも無常である、こわれるものである。捨ててゆかねばならぬ」と答えたのである。人々よ。汝等、佛と法と僧とに不壞の信を抱き、いかなる家の供養も、戒を持ち、正しき心、平等の心にてなさねばならぬ。長者は人々に三寶の信と布施の心とを與えて死んだのである。

### 第四節 喩えのいろく

一。世尊は王舍城に滞在なされる中、時々比丘等に語り給うた。

「比丘等よ。遠い古、老人を棄てる國があつた。國中の人々は、老人と見れば遠い處へ驅り立て、棄てねばならないのであつた。時に一人の大臣があり、國法に依れば、その老いたる父を棄てねばならぬのであるが、親を思う心が深いので、どうしても棄てるに忍びない。そこで、深く大地を掘つて家を作り、そこに忍ばせて孝養を盡した。

その時天の神が現われ、一疋の蛇を取つて殿上に置き、王に命じて云うには。「若しこの蛇の雌雄を別つことが出来ないならば、七日の後、王を初め此國をあけて滅ぼして仕舞うであろう。王は憂え

惱み、群臣を集めて其事を議つたが、誰も答えることは出来ぬ。國中に令して、能くそれを見分けるものには厚く賞を與ふるであらうと告げ知らせた。

件の大臣は家に歸りて此事を父に尋ねれば、父のゆうよう。「それは易いことである。軟いものゝ上にその蛇を置くがよい。躁しいのは雄、動かないのは雌である」と。この通りにすれば、果して區別がついた。

天の神又問う。「睡れるものに對しては覺めたといわれ、覺めたものに對しては睡るといわれるは誰を指すか」。群臣は又解くことは出来ぬ。大臣の父、子に語る。「それは道を修めている人を指す。一般の凡人と比べては覺めているが、證を得た聖者と比べては睡つてゐるからである」。

天の神又問う。「大白象の重さは何斤あるか」。大臣の父ゆう。「その象を舟に乗せ、水際を畫いて次に石をのせ、その水線に及んで、石を量れ」。

天の神又問う。「一掬の水が、大海よりも多いとゆうは、何をゆうか」。大臣の父ゆう。「それは清らかな信をもつて、一掬の水を三寶や父母や病人に施せば、その功德は永久に消えない。福を受ける。海水は多いとゆうても、一劫を超えることは出来ぬ」。

その時天神は、骨もあらわな餓えた人を作りていわしめるよう。「世に私よりも餓に苦しんでいる

ものがあるか」。大臣の父は語る。「人もし慳み妬みて、三寶を信せず、父母や師長に供養せないならば、後の世餓鬼道に墮ち、百千萬歳に亙りて水や穀物の名さえ聞かず、身は山のように、腹は谷のよう、咽は針よりも細く、髪は針のように脚に及び身に纏わる。身體を動せば支節爛ともえる。此人の苦は今の餓えたる人よりも百千萬倍である」。

天の神また手械足枷に縛められ、頭も腹も鎖に繋がれ、身の中より火を出して焦け爛れたる人を作りていわしめるよう。「世に私よりも苦にある人があろうか」。大臣の父語る。「人もし父母に孝ならず師長を害い、主に叛き、三寶を誘ふならば、後の世、地獄に墮ち、及の山、劍の樹、火の車、又は焔の爐、沸きたつ尿の河等の限りない苦を受けること、今の人よりも百千萬倍であらう」。

天の神また世に比びない美しい女を作りていわしめるよう。「世に私よりも美しい人があろうか」。大臣の父は語る。「人もし父母に孝に、三寶を信じ敬い、施を好み、戒を持ち、よく忍び、勤め勵むならば、後の世天上に生まれ、今の人よりも百千萬倍の美しさであるであらう」。

天の神は又、眞四角な栴檀の木を取り出で。「どこが先きで、どこが根の方であるか」。大臣の父語る。「それを水中に入れよ、根の方は沈むであらう」。

天の神は最後に、同じ形した二頭の白馬を作り、どれが母であるか子であるかと問う。大臣の父又

その子に語る。「その馬に食を與えよ。母は必ず草を推して子に與えるであらう」。

かように大臣の父の答えは、盡くそれ等の問を満したので、天の神は大いに喜んで、國王に多くの寶を與え、「私は今より此國を護り、あらゆる外敵を侵入らしめぬであらう」と約した。王は悦に躍りて大臣の才智を讃えた。大臣申すよう、「王よ。これは私の智慧ではありません。もし大王の御評を得るならば、具に申しあげるでありませう」と。王曰く。「萬死の罪があつても問う所はない」。大臣のう。「國の制によれば、老父を養うことが出来ないのでありますが、私は父を棄つるに忍びないので、密に國法を犯して地中に養うて置きました。これまでの應答はみな老父の智慧から出たのであります。どうぞ大王よ。國中に令して老人を養うことを許して下さい」。

王は心から悦び、大臣の父を尊みて國師となし、普く天下に令して老人を棄てることを禁め、孝養を盡さしめ、もし父母を輕んじ、師長を教わぬものあるときは、重い罰を加えるであらうと告げ知らせた。

二。又、遠い古のことであるが、波羅奈の國に慈童とゆう長者の子があつた。その父は早く世を去り、財物も盡き果つたので、慈童は毎日薪を賣りて二錢を得て母を養ひ、追々所得を増し、日に四錢を得、八錢、十六錢に及び手厚く母を養うた。人々は彼の性質聰く、福分を備えているのを見て、

「卿の父はいつも海に入つて寶を探つた。卿は何故父の業を受け繼がないのであるか」と勸めた。慈童は之を聞いて家に歸り、母に海へ入る許を請うた。母はその子が孝順に生まれついでいるので、海へ入ることは出来まいと思ひ、「戯れに入つてもよい」と許した。

彼は母の許を得たので、伴侶を集め、様々の準備をととのえ、改めて母に訣を述べた。母は今更のよりに驚き悲しむ、「どうして一人子の御身を手放すことが出来ようぞ、どうぞ私の死ぬまで待つてくれ」。「母上は先に私の願を許されました。今となつて信を破ることは出来ませぬ」。母は子の意の動かし難いを見るや、その脚をかい抱き、「思い止つて」と泣きくだいたが、慈童は意をきわめ、母を突き除けて海に入つた。その時母の髪の毛數十本を切つた。やがて寶の岸につき、多くの寶をとり、陸路によつて歸りを急いだ。その國の法として、賊に襲われても若し商主さえ捕えられなければ、得た財は商主に返さねばならぬ。もし商主が捕えられる時は、財は残らず賊の所有となることに定められていた。それゆゑ慈童は毎夜伴侶を離れて別に宿り、曉に早く伴侶の迎を受けて旅をつづけたのであつた。一夜大風が吹いたので、伴侶は卒に起きいでて商主を迎えることを忘れた。彼は伴侶と離れ行手の道も知らず、宛もなく辿りゆき、一つの山に登りつめると、そこに紺瑠璃の城が見えた。餓と渴に悩み果て、その中に入ると、四人の美しい女が各々如意珠を持ちて喜び迎え、伎樂の中

に四萬歳を過した。そうした快樂にもいつか厭わしくなつたので、一度は彼等に訣を告げたが、又理なく引き止められ、更に四萬歳を送り、遂に其處を立ち出でて頗梨の城に入り、八人の美女と共に八萬歳を共にし、更にそこを去りて銀の城に赴き、十六人の美女とともに十六萬歳の樂を共にし、更に黄金の城にゆきて、三十二人の美女と三十二萬歳の樂を共にし、やがては其處をも厭い捨て去らうとすれば、女達は、「卿は是迄は善い處を経ることが出来たが、これから先は好い處はない、いつまでも此處に居られるがよい」と止めた。けれども「此女達は私を戀慕うてかように語るのであらう」と思い、更に行手を急いだ。遙か向うに嚴しい鐵の城が聳えている。その中へ入ると、城門の傍に一人の男が頭に火の輪を頂いて居つたが、慈童を見ると、その火の輪をその頭へ移して立ち去つた。慈童は驚き怖れ、獄卒に「いつになつたら、この恐ろしい輪がとれるであらう」と尋ねた。「ちようど汝のような行をした者が、汝のような徑路を経て此處へ来るまである」という。更にその理由を尋ねると、「汝は世にあつた時、日に二錢をもつて母に供養したので、瑠璃の城において四如意珠と四人の美女と四萬歳の樂を受けた。毎日の四錢は頗梨の城に八萬歳、八錢は銀の城の十六萬歳、十六錢は黄金の城の三十二萬歳の樂を得たのであるが、今やその果報つき、母の髮を絶ち切つたために、此鐵火の輪を頭に載せなければならぬ」との答を得た。更に自分の外に之と

等しい苦を受けているものがあるかと問えば、「限ないほど多い」と告げられた。此に至つて慈童は深く心に思うよう。「もう自分は免れることは出来ぬ。よし、それならばみなの人達の苦を私一人で引き受けよう」と意を決めると、不思議や火の輪はばつたりと地に落ちた。獄卒に向い、「落ちないといつた火の輪は、何故落ちたのであるか」と云えば、獄卒は嘆り、鐵叉を持つて一打ちに慈童を殺したが、慈童は直ちに三十三天に生まれた。

比丘等よ。その時の慈童は私である。父母に仕うるの罪と福とは、かようなものである。

三。舍衛國の或長者の家に生まれた一人の女兒は、生まれると直に、「よからぬ所作、恥知らぬ所作、思に背くわざ」と語つた。こうした福徳があつたので賢と名けられた。此子は成長して袈裟を敬うこと篤く、之が動機となり、出家して尼となり、勤め勵み證を開き、長く世尊の御許へゆかなかつたことを思い出し、直ちに行いて「どうぞ私の懺悔をお受け下さい」と申し上げると、世尊は、「も

う前に汝の懺悔を受けた」と仰せられた。

世尊のたもうよう。昔、六牙の白象があつて、賢と善賢とゆう二人の妻をもち、多くの群象を連れて林中を歩いている中、偶々一本の蓮華を得、之を賢に與えようと思つて、善賢が之を奪い取つた。賢は華を奪われて妬の心を起し、夫が善賢を愛して自分を愛しておらぬと思ひ込み、いつも

花を捧げて、山の中の佛塔に詣り、願を起して言う。「私は人と生まれて、昔のことを知り、あの白象の牙を抜き取るであろう」と誓い、自ら山の巔から落ちて死し、毗提訶王の女と生まれ、成長して梵摩達王の妃となり、或時、前生のことを思い出で、王に申すよう。「大王よ、どうぞ私のために象牙の牀を造つて下さい。もしそうでなければ、生きている甲斐もありませぬ」。

王は妃の切なる願を納れ、獵師を募り多くの象牙を持ち來る者には百金を與えるであろうと命じた。かねて六牙の白象を知る獵師は詐つて袈裟を着け、毒箭をもつて彼の白象の住める林に向うた。妻の善賢から獵師の近ずいたことを告げられながら、彼の白象は「袈裟を着けている」と聞き、「それならば決して悪いことはする筈がない」と安心していると、獵師は安々と近ずいて、深く毒箭を射込んだ。「袈裟を着けているならば、悪いことは起らぬとのことであつたが、これはどうしたことであろう」と善賢の泣くを慰めて、「それは袈裟の過ではない。心の煩惱の過である」と白象は答えて、善賢が獵師を殺そうとするのを禁め、更に五百の群象が、怒つて獵師を殺すを畏れ、獵師を肢の間に藏し、象群を去らしめて後、「何故に自分を射たのであるか」と問うて、「大王が牙を求めため」と云う理由を聞き、「疾く此牙を抜き取るがよい」とこれを許した。然しながら、さすがの獵師も此象の慈愛に打れて、手を下すことが出來ないのを見て、白象は大樹によりて自ら牙を抜き獵師に與え、「私は後の

世、あらゆる人々の三毒の牙を抜くであろう」と誓を立てた。

一方、妃は牙を得て、後悔の念を起し、「私は今どうして此勝れた戒を持つたものゝ牙を取ることが出來よう」と、大いに功德を修め、「後の世、彼の人の法の下に道を學んで證を得るであろう」と誓を立てた。

比丘等よ。其時の白象は私であり、獵師は提婆達多、賢は今の比丘尼、そして善賢は耶輸陀羅比丘尼である。

四。比丘等よ。過ぎし世、雪山の麓にある一面の竹林に、多くの鳥や獸が群れ遊んで居つた。その中に一羽の鸚鵡がいたが、或時、大風遽に吹き起つて、竹と竹と相摩れ、それがために火が起つて、竹林を焼いた、鳥や獸は驚き怖れて逃げ場を失い、猛火の中をかけ廻つた。かの鸚鵡は深い慈愛の心に動かされて彼等の苦を感み、水中に諸羽を浸して空に翔け上り、その水滴を猛火の上に灑ぎ、限りなく慈愛の念は、限ない勤め勵みとなつた。その力は天の帝釋の宮殿を震い動かしたので、帝釋は驚いて天より下り、鸚鵡に語るよう。「この竹林の大火は數千里に互り燃え猛つている。どうして汝の翅の滴りで之を消し止めることが出來ようぞ」。鸚鵡答えて云うよう。「私は弘い心をもつている。勤め勵みて懈らないならば、必ず此大火を消し止めることが出來るに違いない。若し此生で出來ぬな

らば、後の生でこのことを仕送けるであろう。帝釋はその志に感じ、大雨を降らして其火を消し止めた。

比丘等よ。その時の鸚鵡は我が身である。今私があらゆる人々の三毒の火を消そうとするように、過ぎし世にも同じ志に人々を慰んだことである。

五。古、二人の兄弟があつて、ともに佛の教を樂み、家を出でて道を學んだ。兄は勤め勵んで善を行ひ、森の中に思を凝らして證を得たが、弟は生まれつき聰く、廣く三藏の經典を誦し、大臣の委託を受けて精舎を造つた。やがて、僧房、講堂、塔は殿しく立ち並び、その意匠の巧さは、大臣をして益々深く弟の比丘を尊敬せしめた。

弟の比丘は、大臣に兄のことを語り、新に建てられた精舎に兄の比丘を請じたいと申し立てた。大臣は快く諾い、人を遣わして懇に兄の比丘を迎え、厚く供養した。或時、大臣は千金に價する甌を兄の比丘に捧げたが、兄は止むなく之を受けて、弟が様々のことを營むので、財物を要することと思ひ、直に彼に贈つた。大臣は亦弟に龜末な甌を與えたので、彼は心に深く嘆を含んだ。後亦大臣は再び高價の甌を兄の比丘に贈ると、兄は亦之を弟に與えた。弟は如まじさに堪えず、その甌をもちて豫ねて言いかわした大臣の娘を訪れ、「御身の父は、先には私に厚かつたが、あの比丘が來てか

らは、全く心を誑かされて、あの比丘にのみ厚く私には極めて薄い。御身は此甌で衣を造り、あの比丘が妾に贈つてくれたと父に申すがよい」。

娘はその父の信敬する比丘を惡しざまに申すことは出來ぬとゆうたが、弟の比丘は「もし私のゆう通りに致さぬならば、永く御身と誼を斷つてであろう」と脅かすので、娘は弟の比丘のゆうがまゝに行つた。父の大臣は娘のゆう所を聞き、「貴い贈物で婦女子を誑わすとは、何んとゆう悪い比丘であらう」と嘆り、他日兄の比丘を訪れても、いつものように起つて迎えず、色をなしているので、彼は逸くも、何者か自分を訪つたのであらうと思ひ、直に空に昇り様々の神通を現わした。こゝに大臣は深く懺悔し、直に弟の比丘と娘とを國外に放逐した。

比丘等よ。その時の比丘は私であり、他を誇つた報により、劫長く限なき苦を受け、今また孫陀利女のために誘られたのである。

六。諸の比丘等、世尊に申すよう。「世尊よ。提婆達多是世尊の從弟である。何故に怨を呑んで世尊を害い奉らうとするのでありましよう」。

世尊 告げ給うよう。「昔、雪山に共命と名ける鳥が棲んでいた。身は一つで頭は二つであつたが、一つの頭はいつも美しい果を食べ、身を安らかにしようとしたが、他の一つは妬を起し、「私は一度も



あのような甘い果を食べたことはない』といつて、毒の果を食べたので二つの頭は共に命を失うた。比丘等よ。その時甘い果を食べたのは私であり、毒の果を食べたのは提婆達多である。彼は昔も私と身を一つにして、今亦私と血を同じゆうして、このように私を害わんとしたのである。

七。王舎城に一人の長者があつて、毎日のように世尊の御許に詣でて御教を聞いた。妻は他に隠し女をもつていたのであろうと怪しみ、夫にその譯を問えば、「日々世尊の御許へまいる」とゆう。「さうらば世尊はどのように勝れておられるか」と問う。夫は様々に世尊の徳を説き聞かせたので、妻は心喜び、早速車を同じゆうして世尊の御許へまいつたが、國王大臣等の多くの人々が御前に集つて所狭く、近く進むことは出来ないで、只、世尊を禮して家に還つた。その後妻は此世を去り、三十三天に生まれた。ありし世の恩を思い出で、天より下つて世尊の御前に詣で、法を聞いて初果を得た。

八。古。ガンダラ國に罽那とゆう畫師がいた。三年の間、他處に客となり、三十金を得て、家に歸らうとする時、他の人が僧のために法會を設けているのを見て、思ふよう。「自分はまだ福業を種えたことはない今幸に此福田に逢うた。どうして見過すことが出来よう」と、法會を司る人にその費用を問ひ、「どうぞ私のために椎を鳴らして衆僧を集めて下さい。私は供養の會を設けたいと思ひます」と請うて、その三十金を投げ出した。

やがて法會が終り、畫師は歡に溢れて家に歸つた。妻の問うよう。「三年の間で、いかほどの財物を得られましたか」。「私の得た財物は、堅固な藏に貯えて置いた」。「その藏はどこにありますか」。

「それは尊い僧達の中にある」。妻は呆れて親族の人々を集め、夫を縛り官に訴へ出た。「私共母子は貧さに苦み、衣もなく食もない。然るに夫は濫に得た財を費して仕舞いました」。訴を聞く人、その理由を問えば夫答えて。「私の命は電光のようで久しく照らすことは出来ぬ。又は朝の露のよう須くの間に消えてゆかねばならぬ。前生に福業を植えなかつたために、今こゝうした貧い身となり、衣食に苦しむのであると深く考へて、弗迦羅城中の清らかな法會を見て、心歡び、信の念内に眼覺め、三年に働きて得た三十金を捧げて多くの比丘達の一日の食としました」。

訴を聞く人は之を聞いて深く喜び、自ら纏うている多くの飾の寶を與え、更に一村を與えた。彼の華報はかように豊かであつた。

九。昔、罽羅夷とゆう男が、その妻と二人、他人に備われて貧しい生活をしていた。或日、彼は長者の人達が寺へ往きて大きな施の法會を營むのを見て家に歸りて熟考するよう。「あの長者達は前生に福を植えたのであつた身の上になれたのであるが、自分は福分が薄いので今日のような黷しい貧の苦にもがいている」と思はず落涙した。妻は怪しんでその譯を尋ねると、彼は今の思を

告げた。妻のう。「泣いていても所詮はありません。私の身を婢に賣つて財物を得、それで福を植えてください」。夫は。「汝の身を賣るならば、どうして生きてゆくことが出来よう」。若し七日目まで身を賣りましよう」と、打ち連れて富める家に赴き、「どうぞ十金を貸して下さい。若し七日目までに返すことが出来ないならば、私達夫婦を奴婢にして下さい」と頼み、其約束に従つて十金を借り受け、直に寺へ行つて七日の後に施の法會を營むことを約し、二人は力を協せ、夜を日についで米を搗いた。若しその日までに返すべき金を得ないならば、一生涯他の家に使われねばならぬと勵みつづけた。

ちようど第六日目に、國王が寺へ詣で、その翌日に法會を營みたいとゆう。僧は、貧しい人との約束を述べて王の申し出でを斷つた。王は早速罽羅夷を呼び、その他の日に法會を營むようにと云えば、彼は、「その日を過ぎせば、一生涯、奴婢になるの外はない」と、事の由を申し上げた。王は之を聞いて、深く怒み、「良に珍らしい話である。汝こそ、眞に貧乏の苦を解つたとゆうものだ。堅からぬ身を堅い身に、堅からぬ財を堅い財に、堅からぬ命を堅い命にかえた」と讚め、自身をはじめ夫人の衣服や瓔珞を脱いで罽羅夷夫婦に與え、更に十村を分ち與えた。

一〇。月氏國の王梅檀尼吒は、三人の智慧者に親しんだ。その第一人は馬鳴菩薩で、王にゆう。

「大王よ。若し私の語を用い給うならば、心常に安らかに、後の世も善と俱に永えに惡道を離れるでありますよう」。第二の人は摩訶羅大臣で、王にゆう。「大王よ。もし私の秘密の言葉を用いて漏し給うことがないならば、四海の國々を領することが出来ましよう」。第三の人は名醫遮羅迦で、王にゆう。「もし大王が私の云う所を用いるならば、一生の間、病に侵されることなく、百味の飲食は心のまゝに味われるでありますよう」。そして王はその言葉を守つたので、かりそめの病さえもなかつた。

王は更に大臣の言を納れ軍威を四海に輝かしたが、唯東方の國が歸伏しないので、軍備を嚴にして討伐した。先ず歸伏せる胡と白象とを先導として、王は其後につき、葱嶺に到り峻しい關を越えようとすると、乗る所の馬が俄に止まつた。王は驚いて馬に口走つた。「汝は是迄私を乗せて幾度も征伐に従い、今三方既に定つて東方だけを餘している。何故に進まないのか」。その時大臣ゆう。「臣は先に、大王に申しあげたことを必ず漏し給わぬようにと約束して置きました。然るに王は今夫れを漏されました。大王の命も遠くはないことと思われまます」。王も亦大臣の言のようにその身の死期に近ずいたことを知り、長い間の征伐で數千萬の人命を屠つたことを考え、深く罪の重いことを悔い、國に歸つて寺塔を建て、僧に供養し、自ら懺悔の念にひたり、戒を持つた。

群臣は互に語るよう。「大王はあれだけ多くの人を殺された。今遅ればせに福を修め給うとも、どうして往時の罪を消すことが出来ようぞ」。大王これを聞いて、彼等の疑を解かんとために、臣下に勅して大きな鑊に水を満し、七日七夜に互りて沸らしめ、王は自ら指環をその鑊の中に投げ入れ、群臣を顧みて、その指環を取り出せと命じた。

彼等は誰一人命に應ずるものはない。王は更に語る。「然らば何かの方便を設けて取り出すがよい」。臣下の一人が申すよう。「火をとめ、更に冷水を鑊に入れるならば、手を傷めないで取り出すことが出来まます」。王は容を改めて群臣に語るよう。「私が先に悪を行つたのは、言わば熱した鑊のようなものであり、今慚愧の念を發して善を行は、火を止めて冷水を澆ぐようなものである。かくて三惡道の苦はやみ、善き國は得られるであらう」。

群臣は之を聞いて歡び、第一の智者の言葉を用いる王の徳を讃えた。

一一。拘尸彌國に宰相の役を勤める婆羅門があつたが、生まれつき暴く、やくもすれば無道の行をなした。その妻も亦心まがれる女で夫と行を同じゆうした。或時、夫は妻に「いま沙門瞿曇が此國へ來た。もし此家へ來たならば門を閉じよ。入れてはならぬ」と命じた。然るに或日、世尊は忽然とその家に入らせられた。婆羅門の妻は挨拶もせず、黙つておる。世尊は、「汝等は愚で、邪の見

をもち、三寶を信することはない」と仰せられた。彼女は之を聞いて怒り、自ら璣珞を斷ち切り、垢すいた衣をつけて地に坐つた。夫は外から歸り、この様を見、故を問えば、瞿曇沙門に罵られたと語る。翌日になり門を開いていると、世尊はその家に入られた。之を見た婆羅門が、兼ねて用意の劍を捉つて切らんとすれば、世尊は忽ち虚空にいたもう。彼はこの神通をみて慚愧し、身を地に投げて叫ぶよう。「世尊よ。どうぞ地に下つて、私の慚愧を御受け下さい」。世尊はその請を容れ、夫婦に法を説き道に入らしめられた。

比丘等が、世尊はどうして、あのような惡人を降し給うたのであらうと怪しみ思つたので、世尊は昔の因縁をとかれた。

昔、迦尸國に惡受とゆう王があつた。あらゆる非道を行つて百姓を惱まし、四方から集まる商人に對しては、彼等の持つてゐる珍らしい品々を税として押收した。それがため、國中の寶物はみな王の手に收められた。王の惡名はあらゆる人々の口から口へ傳えられた。

その時、一羽の鸚鵡があつて、林の中から道ゆく人達の王の惡事を語り合つて聞き、王を諫めようと思ひ、空高く飛んで王の園の中に下り、とある樹の枝に止りて、王の夫人が園に入り來るを見るや、翼をたいて語るよう。「王はいま非常の行をなして、民を虐げ、その毒は禽獸にも及んでゐる。

憤と嘆の聲が國中に満ちている。夫人も亦王と同じように苛酷である、これが民の父母と云われようか。

夫人は之を聞いて大いに怒り、人を遣わして捕えしめたが、鸚鵡は恐氣もなく捕えられ、直に王の前に引き出された。王は、何故に我を罵るかと問えば、鸚鵡は、王の七罪を数えた。

「女色に耽り、酒を嗜み、賭博を事とし、殺生を好み、悪言を擅にし、苛い税を取りたて、横しまに民の財物を奪う。この七罪が王の身を危うする。更に國を傾ける三つのものがある。依り詔う悪人を近ずけ賢者の忠言を受けず、好んで他國を攻めて民を養うことを忘れてゐる。此三つの悪事を除かないならば、遠からず國が減びるであらう。

抑も王者は、國をあけて仰ぐところで、萬民を渡す橋のようであり、親しいものにも疎い者にも、秤のように平等であらねばならぬ。先聖の道を踐んで違はず、日のように普く世を照し、月のように涼さを與え、父母のように恵み、天のすべてを覆うよう、地の萬物を載せるよう、又は火の惡を燒きつくし、水の物を潤すようであらねばならぬ。過ぎし世の聖王は、みなこのように十善の道をもつて人々を教え導かれたのであつた。

王は之を聞いて、深く自らの行を愧じ、鸚鵡の教を受けて正しき政を行つたので、教は國內に

弘められ、忠良の人々は左右に集まり、人民は歡び勇んだ。

比丘等よ。その時の鸚鵡は我身で、王は今今の宰相の婆羅門、王夫人は今今の夫人である」と説かれた。

一二。ものは求むべきところに方便を用いば得られるが、求むべからざるものを強いて得ようとしても、得られるものではない。譬えば、砂を厭して油を求め、氷を鑽つて酥を求めようなものである。

昔、波羅奈國に梵譽とゆう王がいたが、或時、夜中になると遠い墓場から、「王様々々」とゆう聲を聞いた。それは一夜に三度に及んだ。王は少なからず怖れ、諸の婆羅門や占師を集めて、「いかなる處置を取つたらよいか」と尋ねた。彼等は答えて、「それは墓場にいる妖怪の仕業に相違ない。膽力ある者を選び、聲をしるべに其場所に遣すが宜しい」とゆう。王は國內に令して、「墓場の聲を見届ける者には、五百金を與えるであらう」と告げしめた。その時貧しい獨身者で膽力ある男が、その召に應じ、甲冑を着け、劍を執つて墓場の聲を尋ね、「汝は何者であるか」と問う。聲の主答えて「私は大地に藏されている寶である。夜毎に王を喚んだが、王は怖れて應じてくれない。若し王が此處へ來るならば、私は寶庫に導くであらう。然し汝には實に勇氣がある、實は汝に贈るであらう。私に七人の伴人がある、いすれ明る朝彼等と共に道人となつて汝の家へ行くであらう」。その男問う。

「どうして待遇すればよからうか」。曰く「唯、室間を清め、美しく飾り、葡萄の汁や乳糜を八つの器に盛つて飲食せしめるがよい。食事が了つたら、枕をもつて主席の道人の頭をうち、角の室へ入れとゆうがよい。されば寶は得られるであらう」。

男はそのまゝ家に歸り、翌る日、王宮へ赴き。「王よ。聲の主は妖怪であつた」と語り、五百金を貰い受け、家に還るや、理髪師を頼んで、自ら身を整え、室を清め、馳走を設け、やがて八人の道人を迎え、食事終るや、上座の道人を驅りて角の室へ入れると、そのまゝ黄金の瓶と變じた。同じ仕方で次の七道人も亦同じ七つの黄金を盛つた瓶と變じた。理髪師は之を見て、自分も同じ仕方で寶を得ようと思ひ立ち、凡て前の男のように準備をととのえ、やがて八道人を請じて、食事をすゝめ、門を閉じて上座の一人を打つたが、その頭は破れて血流れ、やがて角の室へ追い込めば、彼はあわてゝ糞を失した。次第に七人の道人も代るゝ打たれて床の上のたくり廻つたが、中に力のある一人は、戸を破りて外に出で、人殺し人殺しと叫んだ。やがて理髪師は役人に取り押えられ、事の由を具に王に申した。王は直に人を遣わして、先の男の得た黄金の瓶を官に没收しようとしたが、夫等の瓶は毒蛇となつて役人に向つた。

王は之を聞いて先の男に語るよう。「その寶は凡て汝に與えられたものである。與えられね寶は何人も取ることは出来ない。ちようと戒を守り、勤め勵みて道を修むれば、善い報は得られるが、愚者がその果報だけを見て、外に戒を持つても内に誠の信なく、徒に利樂を求めても得られないようなものである」。

二三。狹い者は外面は正直そうであるが、内心には邪を懐いている。昔、年老いた婆羅門があつて、少い後妻を貰うたが、彼女は夫を嫌うて他し男を樂しもうと思ひ、夫に勸めて若い婆羅門達の會合を催そうとしたが、夫は妻を疑い事に託けてその會合を延ばした。或時、先妻の男の子が誤つて火の中へ落ちたが、妻は之を救うともせない。故を問えば、「妾は他し男の子は取りませぬ」とゆう。老婆羅門は之に感じて、延ばしておいた若い婆羅門達の會合を開いた。若い妻はこの機會に思ふ存分の樂に耽ることが出来た。夫は之を知りて苦しみ惱み、遂に寶をもち身獨り家を逃れた。道に一人の婆羅門と逢い、打ち連れて宿を共にし、明る日その家を立ちいで可成り遠く歩いた頃、伴の婆羅門は思ひ出したように語るよう。「私はこれまで、外の物は塵一つも取つたことはない。然るに昨夜の宿に、一枚の草葉が私の衣服に着いていた。私は之を宿の主に返さねばならぬ。暫らくお待ち下さい、急いで還るから」と云い捨て、元來し道へ取つて返した。老婆羅門は之を聞いて心から敬の思を起し、この人こそ敬い侍るべき方であると思つた。然るに前の婆羅門は道の傍にある溝の中へ入つ

て腹這いになつて憩い、や、暫くして老婆羅門の許へ還つた。その時、彼は汚物を洗うために、何の疑も挟まずもつている寶を伴の婆羅門に託したが、寶は此の機會に彼の手から失われて仕舞うた。老婆羅門は悲しみ傷みて、魂を失うた人のように行くとはなしに歩みゆきて、とある樹の下へ憩うと、一疋の鵲が、口に草を銜みて、多くの鳥達に語るよう。「みな互に助け合つて一處に住もうではないか」。鳥達は彼のゆうことを信じて、みなそこへ集つた。やがて鳥達が飛び去つたのを見て、彼の鵲は巢とゆう巢を覘い、卵を啄みその汁を吸い、多くの雛を喰うた。そして多くの親鳥が還つて來ると、彼は何喰わぬ顔をして前のように草を銜んでいた。

稍々暫く其處にいと、一人の修道者が破れた衣を着け「蟲共や、危いぞ危いぞ」と云いながら、靜に歩いて來た。老婆羅門は不審に思い、その譯を問えば、「私は何物にも氣の毒でならぬ、蟲共を踏み殺そうかと思つて、こゝして歩いてゐるのだ」とゆう。老婆羅門は深くそのゆかしい人格を慕い、その後を逐うて日暮にその修道者の家に宿つた。離れ屋に臥しながら、眞の道を行う人に逢つた喜に浸つてゐると、眞夜中頃、不圖絃歌の聲に旅寢の夢を破られた。驚き怪しんで聲をたよりに行いて見れば、晝の殿しい修道者は、若い女と遊び戯れている。女が舞えば男は琴を弾じ、男が舞えば女は樂を奏でた。老婆羅門の心は氷のように冷え渡つた。「あゝ、世をあけて信すべきものは一つもない」と心に叫んだ。

國に一人の長者がいたが、或夜多くの寶がなくなつたので、王に訴え出でた。「なにも怪しい者は居りませぬ。只一人の婆羅門が出入してゐるが、この人は草の葉を衣として清い生活を送つてゐる」とゆう。王は之を聞くや直にその婆羅門を捕え、深く問い訊して、遂に彼の仕業であることを自白せしめた。

一四。世尊、祇園精舎に在せし時、舍衛城中に、如願とゆう男があつて、他人の物を盗み、人を殺し、邪姪に耽つた。遂に官に捕えられ、巷を歩かせられた後、刑場へ運ばれた。この男のくりなくも死に臨みて世尊に逢い奉り、具に我身の罪を申しのべてゆう。「世尊よ。私の命は迫つてゐます。どうぞ大いなる慈悲を垂れ給ひ大王に請うて、私を出家させて下さい。さすれば直様死についても恨む所はありません」。世尊はその願を容れ給ひ、阿難を遣わして波斯匿王に事の由を申し、此の罪人を弟子の數に入れることを請わしめた。

やがて、王の許を得て、彼は世尊の弟子となり、勤め勵みて證を開いた。

一五。王舎城の浮海とゆう商人が、多くの人々を伴つて海へ入り寶を求めた。その婦は少く美しくあつたが、日夜、海にある夫の身の上を思い、果ては那羅延天の祠に詣でて願言をかけた。「天よ、

もし妾の願を容れて、夫を恙なく還して下さるならば、金銀の瓔珞を捧げます。もし此願を叶えて下さらないならば、汚いもので此祠を穢します。」

程經で夫が安らかに家へ還つたので、妻は歡び、金銀の瓔珞を持ち婢を伴いて家を出たが、まだ天祠へ到らぬ前に、ちようと世尊が多くの弟子を連れて、王城へ入られるのに出逢うた。その崇高い御姿は大空の日も愧らう有様であつた。女は威神を仰いで喜び、思わす手にせる瓔珞を世尊の上に投げかけたが、瓔珞は寶の蓋と變りて空にかかり、世尊の御歩みと共に隨ひ動いた。彼女は此不思議を見て深い信を發し、身を大地に投げて、「どうぞ、此因縁により、私も世尊と同じような身にしていただきたい」と誓を立てた。

世尊は之を見て、打ち笑せ給ひ、御意に此女の願を許された。

一六。或時、世尊は諸の弟子達を連れて摩竭陀國を遊行し、恒河の畔にて、川邊に船を繋ぐ船師に宣うよう。「何卒、私達を向うの岸へ渡して貰いたい」。船師は「船賃さえ出して下されるならば」とゆう。「船師よ、私も亦船師である。世の迷の海を超えて、多くの人達を度した。こうして互に人を度すことは、快いことではないか。私は指鬘のように多くの人を害うた者や、摩那答陀のように無暗に橋つて人を見下した人を、みな船賃を取らずに度してやつた。それゆえ汝も船賃を取らずに私達

を彼方へ渡して貰いたい」。然し船師は應じない。川下にいた他の船師が、世尊の御語を聞き、歡んで船を寄せ、世尊の一行を迎えたが、此時弟子達の内に神通を現わして、向うの岸へ渡つたものや、川の中流を歩いてゐるものもあつた。前の船師はこの神通を見て慚愧し、身を地に投げて世尊と弟子達に歸依し、御許を受けて家に世尊の一行を請じ、美味を捧げて、教を受け、法の喜を得るに至つた。

一七。王舍城の長者の婢で生れつき素直で、佛法を信するものがあつた。彼女は時々主人の云いつつで、栴檀香を磨らせられたが、或時、又香を磨つた後で門外へ出ると、城に入つて食を乞われる世尊の御姿を拜し、喜に心躍りて、思わす家に入り、少しばかりの栴檀香を取り出し、世尊の御足に塗つた。世尊は彼女の心を善し、神通をもつて此香を香雲となし給えば、たなびき流れて王舍城を覆うた。彼女は此奇瑞を見て、ますく信を深くし、「世尊と同じ證の身になりたい」と誓うた。世尊は快く此願を許された。

一八。舍衛城の富める人達が、或日善き衣に身を飾り、香や花を手にし、伎樂を作して城外にいで、一日の行樂を擅にしうとゆうので、城門まで來ると、多くの弟子達を連れて城に食を乞ひ給う世尊に逢い奉つた。彼等は光り輝くような世尊の御姿を仰いで、歡の心溢れ、思わす御足を禮し、

伎樂をなして一行を慰めまつり、手にした様々の花を世尊の上に撒き散せば、世尊の神通によりて、美しい花蓋となり、自ら擴りて舍衛城を覆うた。彼等は此奇瑞を見て一様に、「世尊と同じ證の身となりたい」と誓うた。世尊は快く彼等の願を許させられた。

一九。遠い古、善面とゆう王が波羅奈國を治めたが、國は豊に民は榮えてあつた。王は智慧明かに深く道を求め、寶を巷に置いて「何人にも妙なる法を説いてくれるものがあるならば、此寶を與えるであらう」と聲言した。この至誠に感じて天の宮殿は盡く震い動いたので、帝釋は王の心を試そうと思ひ、羅刹の相を現わして王の宮門に來り、「私は妙なる法の持主である」とゆうた。王が喜び迎うれば、又のように恐ろしい牙を嚙んでいる羅刹は、「私は今飢えてゐるから、法を説くことは出來ない」とゆう。王が様々の食事を與うれば、「私は熱い血と新しい肉でなければ、飢を満すことは出來ぬ」と喚めく。

この時、王太子孫陀利は、進んで父王に申すよう。「法を得ることは難いと聞いています。今私はこの身を羅刹に捧げようと思ひます」。王は、身命を惜まぬ太子の大いなる志を知り、「自分は遠い昔から恩愛に縛られ、迷より迷に流れて盡くすることはなかつた。今や法のために愛子を捨てる時である」と、心に定め、太子の請を許した。

太子は健氣にも羅刹の許へ進めば、彼は王の面前に太子を引き裂いて床に仆し、血を飲み肉を食うたが、まだ飢えた腹は満されぬとゆう。王の夫人は、勇ましく法のために命を捧げた太子の心に勵まされ、王の許を得て更に羅刹の食う所となつた。羅刹は更に飢えを満すために王の身を求めた。王は靜に、「私は命を惜むことはないが、只此身が死ねば、法を聞くことは出來ぬ。汝が法を説くならば、此身を與えるであらう」とゆう。羅刹はその誠心を知り、王のために一偈を唱えた。

愛欲によりて憂は生まれ、愛欲によりて怖は生まる、よく恩愛を離るゝ人は、永く怖の根を斷たん。

唱え了るや羅刹は忽ち帝釋の相となり、太子も王夫人も元の姿に現われた。王は只喜び踊つた。かように説かれて、世尊宜もうよう。「その時の善面王は私で、太子は阿難、王夫人は耶輪陀羅である。私は遠い古から、かように愛着を捨て、道を求めたことである」と仰せられた。

二〇。或朝、世尊が多くの比丘等連れて舍衛城に入り、食を乞いつゝ、とある巷において一人の婆羅門に逢われた。婆羅門は指をもつて地を指し、世尊を遮つて叫ぶ。「汝は私に五百金を拂わねばならぬ。さなくば、此處を通すことは出來ない」。世尊は其處に黙つて立つていられた。此事は諸人を驚かし、波斯匿王に聞こえたので、王は早速人を遣わして財物を與えたが、婆羅門は容易に肯き入



れない。その時須達長者が五百錢を持ち來たつて與え、婆羅門はそれを受け收めて、世尊に通ることを許した。この事に不審を懷いた比丘等の意を知らしめして世尊は語り給う。

遠い古、波羅奈國に善生とゆう太子があつた。或日、親しい友達と共に遊んだが、路に宰相の子が戯人と博奕し、五百金を負債したのを見て、戯人に語るよう。「若し宰相の子が拂い得ぬならば、私が拂うであろう」。宰相の子は勢を恃んで遂にその金を拂わなかつた。かくてその負債は量ない世を重ねて今日に及んだが、その時の太子は我が身、宰相の子は須達長者、戯人は今の婆羅門である。されば比丘等よ。負債は必ず償わねばならぬ。もし償わないならば、證を得てもその難を免れることは出来ぬ。

二一。世尊が祇園精舎に在せし時、舍衛城に樓陀とゆう盜賊があつた。利劍を帶び、弓箭を把つて往來に出没し、通行人を脅かすことを仕事としておつた。或時、數日に互りて飢に逼られたが、遙に一人の比丘が鉢を持ちて樹の下にあるを見て、思うよう。「あの鉢の中には必ず食物があるに相違ない。奪い取つて食べるであろう。若し比丘が食べ了つてゐるならば、殺して腹を割いても食べなければならぬ」。靜に近ずいて程遠からぬ所に停つた。比丘は賊の意を知つて、思うよう。「若し私の方から食物を與えなければ、賊は必ず私を殺すに相違ない。さすれば彼をして恐しい罪を犯させる

こととなる」。直に賊に言葉をかけて食物を與え、飢えを滿させ、彼が歡の心を起した時、さまざまに法を説いた。彼は直に初果を得、出家して證を開いた。

二二。世尊、王舍城の竹林精舎に在せし時、市の長者達が大きな節會を催し伎樂をして樂しんだ。其中に南方から來た夫婦の舞踊師があつて、青蓮華とよぶ美しい娘を連れていた。彼女は容色の美しいのみならず、婦人のもてる六十四の技藝において何一つ缺くる所はない。その樂につれて舞い出する姿態のゆかしさは、類い罕なるものであつた。そして「此市において、妾のように能く舞うもの、妾のように經論に明かなるものがあるか」とゆうた。人々が竹林精舎にいます世尊のことを語ると、彼女は多くの人々を連れて歌いつ舞いつ、さんざめきて竹林精舎に着いたが、はしたなく笑い興じて、世尊を禮拜しない。世尊これを觀わし、神通をもつて彼女を百歳の老婆に變えられた。髪は白く、面皺み、齒落ち、腰曲み、這うようにして歩かなければならなかつた。彼女は我が妾の衰に驚き悲みて、世尊の御力に思い至り、深い慚愧の念に浸り、御前にひれ伏して、今迄の僞と不始末を悔い、ひたすら御許を請うた。

世尊は舞女の心を知り、再び神通をもつて元の姿となし給えば、並みいる人々は、老と壯の定めなきを面前に見て、法を聞く眼を開く者が少くなかつた。そして舞女もその父母も世尊の御許を得て出

家し、證を得た。

第五節 蟻 塚

一。世尊は又も舍衛城に歸り、祇園精舎に入り給うた。その時鳩摩羅迦葉は黒林に滞在していたが、或夜、一天人がその輝をもつて黒林全體を輝かして彼の傍に來たりこのように云つた。

「迦葉よ。或人が或婆羅門に『比丘よ。この蟻塚は夜は煙つて晝は燃える』と云うたことがある。

その時、その婆羅門は、『それでは劍をとつて深く掘れ』と命じたが、その命令の如く、深く掘ると門が出た。

婆羅門は更に、『門をとり除けて、深く掘れ』と命じた。今度は水泡を見た。『水泡をとり除けて、もつと深く掘れ』。今度は刺叉を見た。『刺叉をとり除けて更に深く掘れ』。今度は箱を見た。『箱をとり除けて更に掘れ』。今度は龜を見た。『龜をとり除けて猶深く掘れ』。今度は屠牛者の劍を見た。『それを取り除けてもつと掘れ』。今度は一片の肉を見た。『その肉を取り除けて更に掘れ』と、今度は龍を見た。この時婆羅門が、『賢者よ。龍をその儘にして置けよ。龍を妨げるな、龍に歸命せよ』と云

うたことがある。

比丘よ。汝は世尊の御許へ行き、この問答のことを尋ね、世尊の説明し給うように記憶しているがよい。『一切の天人の中に世尊と、世尊の弟子と、及び世尊に聞けるものを除いて、この謎を説明し得るものはないのである』。こう語つて、その天人は形を消した。

二。鳩摩羅迦葉は、その夜を過ぎて世尊の御許に行き、世尊にその事を申しあげ、一々の説明を御願した。

世尊はこれに答え給うよう。『比丘よ。蟻塚とゆうは、父と母とから生まれ、御飯や粥で生長し、無常であつて、やがてこわれてゆく四大所造のこの身體のことである。晝になしたことを夜になつていろいろ考えることが夜に煙るといふ、夜いろ／＼考えたことを晝になつて、身に口に行つて晝燃ゆるとゆうのである。婆羅門とゆうは如來のことであり、或人とゆうは修道者のこと、劍とゆうは聖智、深く掘るとゆうは精進のこと、門とゆうは無明、門をとり除けるとゆうは、無明を捨てることである。

比丘よ。それ故に、賢者よ。『劍をとつて深く掘れ』、とゆうは、聖智をもつて精進し、無明を除けと云うことである。

次に水泡とゆうは、忿と惱とのことであり、刺叉とゆうは孤疑不安のことであり、箱とゆうは貪欲と瞋恚と懶眠と掉悔と疑惑との五蓋のことであり、龜とは色、受、想、行、識の五蘊のことであり、屠牛者の劔とゆうは五欲のことであり、一片の肉とゆうは樂を食ほる欲の事であり、この忿と惱、貪欲瞋恚、懶眠、掉悔、疑惑の五蓋、五蘊、五欲、及び樂を食ほる欲を捨てよとゆうのである。比丘よ。龍とゆうは煩惱の盡きたることを云うのである。龍をその儘にして置き龍を妨げず、龍に歸命せよとゆうは、煩惱が無くなつたらば、その儘にせよ、煩惱なき人に歸命せよと云う義である。この説明を聞いて鳩摩羅迦葉は大いに歡んだ。

三。世尊は又も王舍城に歸り、その西南に當る温泉園に入り給うた。左彌提が曉の猶暗い中に溫泉に浴し、身體を乾かしていると、光を林一面に輝かして一天子が降つて來た。「比丘よ。汝は良き一夜の偈と云うものを知るか。」「友よ。私には知らない、汝は知つてゐるか。」「私も知らないが、その偈の意味とを知ることがは大きな利益があるから、善く記憶するが善い。」

左彌提は天人が去り夜、が明け離れると、世尊の御許へ行いてこの事を申し上げ、「良き一夜の偈」を教えて下さるようと願うた。世尊は、過去を逐わされ、未來を待ち設けられ、過去は過ぎ去り、未來は來ることなし。

ひたすらに、たゞ、現在の法を觀よ。奪われず、動かされず、そを知りて繰り返せよ。今日の時熱心になせよ。明日誰か生死を知らぬ、死の軍は待つことなければなり。

かくつとめて撻まず、日夜をおくるを、善き一夜とこそ、尊き聖者は説けるなれ。

と偈を教えて、自分の室へ入り給うた。左彌提を初め、比丘等はこの偈を聞いて意味を聞かない中に世尊が座を立ち給うたので、摩訶迦旃延の處へゆき、この偈の説明を願うた。迦旃延は云うよう。「友等よ。丁度樹の心を求むる人が林に入つて心のある樹を見付けながら、根本も幹も超えて、枝や葉に心を求むるようではないか。世尊にお尋ねして、仰せのように記憶するが善い。」

「迦旃延よ。あなたの仰せの通りでありますから、然しあなたも世尊に讃えられ、同學のものに尊ばれ、この偈の義を説く力ある方でありますから、どうぞお説き下さい。」

「それでは説明するから、よく聞いて下さい。過去を逐わされとは、過ぎ去れるものを逐うて貪欲に囚われるなと云うこと、未來を待ち設けざれとは、未だ來らないものに願を起すなと云うこと、現在の法に奪われずとは、今眼の前に見るものに心を奪われぬことである。これが私のこの偈の説明であります。」

比丘等はこの迦旃延の説明を聞いて喜んだ。

### 第四章 法 塔

#### 第一節 尼乾陀の死

一。波斯匿王はその晩年の或日、世尊を祇園精舎に訪れて教を受けていられると、不意に末利皇后の死が報らされた。王宮よりの使が、悲しい知らせを齎らした。王は過ぎし日を思い出でて、この悲しい別に氣落ちし、肩をすほめ、頭を垂れ、語もなく坐つて居られた。世尊は懇に、人間として避け難い左の五つのことを語つて、悲しむ王を慰められた。

王よ。沙門でも婆羅門でも、諸天でも惡魔でも梵天でも、いかなる世界においても、避け難いことが五つある。それは老と、病と、死と、盡きることと、滅ぶることである。この五つは、いかようにしても避け得ないものである。

王よ。智慧の乏しい、凡常の人々は、その老ゆべきものが古い、病むべきものが病み、死すべきも

のが死し、盡くべきものが盡き、滅ぶべきものが滅びた時、徒に泣き悲しみ、迷亂に陥入るが、智慧の豊かな佛陀の弟子は、この場合、次の様に考へる。これ等老や病や死などは、私の上にはかり來るのではない。衆生の輪廻ある限り、總ての衆生の上に来るのである。若し私がこれについて泣き悲しみ迷亂に陥入らば、食は進まず、身體は衰え、仕事は出來ず、敵の惡魔は喜び、味方は悲しむであろう」と、こう考へて泣き悲しまない。凡常の人々は毒矢に射られて自ら苦しむ、佛陀の弟子は毒矢を避けて憂えなく、自ら寂靜の境に入るのである。

二。世尊はそれより釋迦族の國に入り、エーダンニヤ樹林の講堂に滞在なされた。

この時、沙彌の純陀は、波婆に安居して居り、眼の當り、尼乾陀那吒弗多の死に依つて、その徒が兩派に分れて相争つてを見た。純陀は安居を濟ませて、サーマ村に滞在せる阿難の許に赴き、この事を語ると、阿難は直に純陀を連れて世尊の跡を逐ひ、世尊に詣つて申しあげた。

「世尊。沙彌の純陀は、この安居を波婆に送りましたが、この様に申します。尼乾陀那吒弗多が、この頃波婆に死にました。その後で尼乾陀の徒は二派に分れて、汝は教も戒も知らない、汝の説は邪である。汝は既に破れて居ると互に攻撃し合ひ、このために出家の弟子も在家の弟子も教を嫌うようになり、大變に勢力が衰えました」。

世尊は仰せられるよう。「純陀よ。涅槃と寂靜とに導かず、正しく覺を得ないものに説かれた教の最後はそのようなものである。純陀よ。師が正しい覺の人でなく、従つてその教が誤つてゐる場合、弟子がその教の通りに道を修めず、教を去らんとするは結構なことである。師と法とは非難されるべきもの、その弟子は賞讃せらるべきものである。却つてその弟子に「留つて師の教を守れ」と勸むる人と、その勧めに依つて師の教を守る人とは不徳を生み出すのである。」

純陀よ。師が正しい覺の人ではなく、従つてその教が誤つてゐる場合、弟子がその教の通りに道を修め、その法を執持して守つてゐるならば、勤めてその弟子をして、教より去らしめねばならない。その教に留まることを賞讃するならば、賞讃する人も、賞讃せられる人も共に不徳を生ずるのである。純陀よ。師が正しい覺の人であり、従つてその法が眞實であるならば、弟子はその教に留まり、教の通りに道を修むるよう勸められねばならない。

純陀よ。茲に正しい覺の師が顯われ、法を説く。未だ弟子がその法を了解せず、廣く人間の間に廣まらない中に師が死ぬならば、それは實に弟子の悲である。弟子がよくその法を了解し、その法の通りに行い、廣く人間の間に弘まつて後、師が死ぬならば、それは弟子の悲ではない。純陀よ。若し教が、それを説く師匠は出家して久しく、教界の耆宿であり、その弟子は出家も在家

も賢くして心を練り鍛え、畏れなく、安穩に達し、正法を正しく説き、同門の間に起つた争論を静める能力があり、その教は廣く弘がり、一般に知られ、利得も名譽も第一に達すれば完全圓滿であると云われねばならぬ。その中の一つを缺いても、その教は圓滿ではない。

三。純陀よ。私は覺を開いた人天の師として世に顯われ、涅槃と寂靜に導く法を説いた。私の弟子は正法を善く了解し、清淨の行を圓かに修めて居る。私は又出家して久しく教界の長老である。私の弟子は在家も出家も、賢くして心を練り鍛え、畏れなく安穩に達し、正法を正しく説き、同門の間に起る争論を静める能力があり、私の教は廣く弘まり、一般に知られてゐる。又この世にありとあらゆる師匠の中で私ほど、僧伽の中で私の比丘の僧伽ほど、第一の供養と最上の譽を得て居るものはない。誰でも完全圓滿な教ありと正しく云うものがあらば、それは私のこの教のことでなければならぬ。

純陀よ。羅摩の子鬱陀迦は、よく「見て見ない」という語を用いたが、これは銳利な剃刀の平を見て、刃を見ないとゆう意味に用いたので、つまらないことであるが、然しこの語を正しく用いれば、完全圓滿な缺目ない教を見て、もつと明かにしよう、もつと圓滿にしようと思つて見れば、何處にもその場所を見得ないと云うことでなければならぬ。

それであるから純陀よ。汝等は私の説いた法を相集つて合誦し、争うてはならない。人天の利益幸福となるために、永久にこの法を傳うるよう、文と意を明かにせねばならぬ。

純陀よ。汝等相集る時、若し一人の比丘が法を説くに、汝等これは文も間違ひ義も邪であると思つても、直にそれをよしとし、あしとしてはならぬ、靜かにその比丘に向ひ、「その義には、この文句とその文句と孰れが適當であるか、この文句についてはこの義とその義と孰れが適當であるか」と問わねばならぬ。その比丘がこの文句とこの義が適當であると云つても、直に排斥し非難しないで、更に慎重にその文と義について知らしめねばならぬ。

文句は正しく、義が間違つて居ることを云う比丘に對しても、義は正しく文句の違つて居ることを云う比丘に對しても同様である。若し文も義も正しいことをゆう比丘には、善哉、善哉と隨喜せねばならぬ。

四。純陀よ。私はこの現在の煩惱を滅ぼすためにのみ法を説くものでない。又未來の煩惱を滅ぼすためにのみ法を説くのではない。未來と現在の煩惱を滅ぼすために法を説くのである。純陀よ。それ故に私の許した汝等の衣は只寒暑を防ぎ、蚊や虻を防ぎ、慚愧のために身を覆うだけで充分である。汝等の食はこの法の器を支え、清淨の行を修める助けになるだけで充分である。住居も亦寒暑を防ぎ、蚊や虻を防ぎ、氣候の危険を防ぎ、閑居の樂をなすだけで充分である。樂も亦、病氣の苦を除き健康を得るだけで充分である。純陀よ。異敎の人々は、沙門釋子の徒は樂に耽つていとゆうかも知れぬ。この場合汝等は異敎の人々に問うがよろしい、「樂に耽るとゆうは何れの種類をさして云うのか、それにはいろ／＼の種類があるから」と。

純陀よ。四種の卑しい樂に耽ることがある。第一は或る愚な人が生物の生命を取つて樂とすること、第二は、人の所有を奪つて樂とすること、第三は妄語を吐いて樂とすること、第四は五欲に耽つて樂とすることである。この四種は汝等の避けて居る所であつて、若しこの一つを以て非難するものがあれば、それは不信不實の非難である。

純陀よ。この外に別に寂靜と涅槃に導く四種の樂がある。それは欲を離れ惡を離れて入る第一禪と第二禪と、第三禪と、第四禪である。この四種の樂に耽るものは、豫流果、一來果、不還果、阿羅漢果の四つの結果を得る利益があるのである。

五。純陀よ。異敎の人々は、汝等の智を以て、多く過去を語り、未來を云う事少なきものとなすかも知れない。純陀よ。如來は遠き過去に對しては心に欲するだけ正念に伴う智を有し、未來に關しては、これは最後の生である、この外に迷いの生はないと云う菩提より生ずる智を有するのみである。

純陀よ。如來は過去の事で眞實であり、利益になることならばよき時に説明するであろうが、虚偽のことは云わない。眞實であつても利益にならないことは語らないのである。未來のことについても同様であり、現在についても亦同様である。

純陀よ。如來とは一切の事を證知したものとことである。又正覺の曉より、入涅槃の夕までその語る所すべて眞實なるものと義である。又云うが如く行い、行うが如く云うものと義である。一切世界において何物にも敗るゝことなく、勝者、全見者、統治者たるものと義である。純陀よ。如來は覺のためにならないものを云わない。只これは苦である。これは苦の原因である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道であると云う四つのもを説くのみである。何故なれば、これのみが覺のためになるものであるからである。純陀よ。如來は、世界が常住であるか不常であるか、世界が有限であるか無限であるかなどとゆう覺りのためにならないことは説かない。過去に關し未來に關し、いろいろの邪見を破つた、只身を觀じ、感覺を觀じ、心を觀じ、法を觀じ、世間の貪欲と悲苦とに打ち勝つことを説くのである。

その時優波婆那は、世尊の後にあつて、世尊を扇いでいたが申し上げるよう。「世尊。誠にこの敎は歡ばしいものであります。この敎を何と名くべきでありますか。」「優波婆那よ。これを歡喜の敎と呼ぶがよい。」

### 第二節 雨行大臣

一。世尊はそれより又王舍城に歸り、その竹林精舎に御いでなされた。或日、摩竭陀國の大匠、雨行は世尊を訪れて申し上げるよう。「世尊。私共は四つの性質を具えたものを大智の人、偉大なる人と申します。すなわち一つには博覽であり、聞いたことの意味合を善く了解し、この話の意味はこゝう、この所説の意味はこゝうと知りわけること、二つには記憶が正しく、すつと前になしたること、云つたことをよく記憶して居ること。三には家業その他なさねばならぬ仕事に巧者であつて懶惰でないこと、四には手段方法の案出に巧なことであります。私はこの四つの性質を具えた人を、大きな智慧ある人、偉大なる人と申しますが、御考えはいかゞでありますか。」

「婆羅門よ。私は汝の云う所に贊否いすれもしない。私も四つの性質を具えたものを、大智の人偉大な人と云うが、私の四つの性質とゆうは一には多くの人の利益幸福を計り、人々を神聖な道に立たしめること、二には考へべきことを考へ、考へべからざることを考へないこと。三には考への道におい

て、心を素直に御し得ること。四には困難なく四禪に入つて、現在その定の味を得、煩惱を滅ぼして解脱を得ることである。この四つの性質を具えた人を大智の人偉大な人とゆうのである。

「世尊。まことに勝れた御説であります。私は世尊をその御説の四つの性質を具えた人と見るのであります」。

「婆羅門よ。汝は私にからかつて、そのように言つて見えている。しかし私は云う。私は、多くの人々の利益幸福を圖り、人々を神聖な道に立たしむるものである。考うべきことを考え、考へてはならないことを考えないものである。考の道において、心を素直に御し得るものである。困難なく四禪に入つて、現在その定の味を得、煩惱を滅ぼして解脱を得たものである」。

二。或日また兩行大臣は、世尊を竹林精舎にお尋ねして申しあげた。「世尊。私はこうゆう考をもつて居ります。「何事に依らず、見たものを見たといふ、聞いた事を聞いたといふ、考えたことを考えたといふ、知つたことを知つたと云うことには罪がない」。私はこうゆう考をもつて居ります」。

「婆羅門よ。私は見たことを凡て話さねばならぬとは云わない。又見たことをすべて話してはならぬとか、聞いたこと、考えたこと、知つたことも同様に、すべて話さねばならぬとは云わぬ。すべて話してはならぬとも云わない。婆羅門よ。話をして、若し悪いことが増し、善いことが姿をかくす

ことは、見たことでも話してはならず、又話をして、悪いことが姿をかくし、善いことが増して来るようなことは話さねばならぬと私はゆうのである。聞いたこと、考えたこと、知つたことでも同様に、話をして悪いことが増し、善いことが減することは話してはならず、悪いことが減じて、善い事が増して来ることは話さねばならぬと私は云うのである」。

兩行大臣は、世尊のこの御話を聞いて歡びながら家に歸つた。

三。又或日、兩行大臣は世尊を御尋ね申しあげた。「世尊。悪人は悪人を知りてありましようか」。

「婆羅門よ。悪人が悪人を知る筈がない」。「世尊。悪人は善人を知るてありましようか」。「婆羅門よ。悪人が善人を知る筈がない」。「世尊。それならば善人は善人を知るてありましようか」。「婆羅門よ。善人は善人を知りうるのである」。「世尊。まことに立派なお説であります。仰せのように悪人は悪人をも善人をも知ることなく、善人は善人をも悪人をも知り得るのであります。或時、ドーデツヤの婆羅門についている人々が、他人のことを次のように罵つたことがあります。「このエレツヤ王は沙門の羅摩弗多を非常に尊信して禮拜、跪坐、合掌等のことをなされるが愚なことである。又王の近侍のヤマカ、目連、ウツガ等の六人の人々も、羅摩弗多を信じ過ぎて、禮拜、跪坐、合掌等の敬いをせられるが愚なことである」と。



その時、ドーテツヤ婆羅門はその人々に申しまするよう。「あなた方はどう考えられるか、エレッツヤ王はなさねばならないことと、云わねばならないことを充分に知つて居られる賢い人でありましようか。」「それはその通り王は賢い人であります。」「沙門の羅摩弗多はなさねばならないことと云わねばならないことについては、エレッツヤ王よりも賢く、義理を知る智慧がある人であるから、王は尊信して、禮拜、跪坐、合掌をなされるのであります。又、王の近侍のヤマカ、目連等の六人の人々も、非常な尊信を拂われるのであります」と。世尊。このようにして、ドーテツヤは、自分の善良な性質から、エレッツヤ王をも、王の近侍をも、沙門の羅摩弗多をも賞讃いたしました。御説の通り悪人は悪人をも善人をも知ることが出来ず、善人は善人をも悪人をも知ることが出来るのであります。兩行大臣はその日も世尊の御教を喜び、國事が忙しいとゆうので御暇を願ひ、その儘家へ歸つた。

第三節 跋提長者

一。その頃、王舍城に跋提とゆう長者があつた。富み盛えて金銀珍寶限りなく、穀物は倉に満ちていた。それにも拘らず、極めて慳貪の性質であつて布施を知らず、過去の功德の餘福を食つて、新しい功德を積まず、「布施もない、功德もない。業も報もない。敬うべき父母もなければ、覺を開くとゆうこともない」とゆう邪見を抱いていた。七重の門を作つて乞食の家に入るを防ぎ、金網を張つて飛鳥の庭に來つて餌をついばむを阻むほどであつた。難陀とゆう姉があつて、これも主人に劣らぬ慳貪の性質であり、諸共に墮獄の業を積んでいた。

或日、目連、迦葉、阿那律、賓頭盧の四人が相集り、この城中において、三寶を尊信しないものを導き入れようと相語つて、跋提長者を選んだ。長者が人に知れないように、密に自分の室で餅を食べていると、天より降つたか地より湧いたか、阿那律が鉢を舒べ、施を求め、長者の前に立ち上つた。この不意の侵入に驚いた長者は、要求を拒むことが出来ない。心進まず、僅の餅を阿那律に與えた。阿那律は施を得て歸つた。長者は門番を呼んで、何故に沙門を家に入れたかと責めたが、門番は門が嚴重に閉ざされているから沙門が家に入る筈はないと答えた。

二。長者は次に煮肴の皿を味うていたが、大迦葉が突然その前に顯われた。長者は仕方なく、魚の少しを分けて施し、迦葉の去つた後に、門番を呼んで叱責したが、答は前の如く、何處より沙門が入つて來たか知ることが出来ないで、大いに立腹し、沙門は幻術を使つて人を誑かすと罵つた。長者の妻は佛弟子の質多長者の妹であり、摩訶迦毘陀村から來ていた人であるから、之を聞いて長者を

押え。「さように悪口を云つては宜しくありません。あなたはあの二人の御出家が、誰であるかを御承知でありますか。先に見えた方は、迦維羅城の斛飯王の御子阿那律とゆう方でありませう。御生まれなされる時、地が震うて、限ない富が家をめぐつて湧き出たとさえ云われております。「成る程。そう云われると阿那律とゆう名は聞いたことがある」。その方が出家なされて、覺を開き、天眼第一と呼ばれ給うのであります。次の方は、この御城の附近の大金持、迦毘羅家の一人息子、比波羅檀那と呼ばれ、美人で名高い妻を迎えて、而も一緒に出家し、覺を開き、頭陀を守りて、世尊から頭陀第一と御讚めに預つた名高い方でありませう。今此尊い御二人が駕を枉けて、神通に依り、この家にお出で下されたと云うのは、非常な喜びであります。幻術を使うなどと誘つてはなりません」。

三。こうして話している所へ、目連は、空中より下つて、金網を破り、地上高からざる空中に跏趺して坐つた。長者は驚いて怖を覺え、天か鬼か乾闥婆か、人を喰う羅刹かと尋ねた。目連は「天にも非ず、乾闥婆にもあらず、鬼にもあらず、羅刹にも非ず、佛の弟子で、目連と云ふもの」と名乗り、法を説くために顯われたと答えた。長者は沙門と聞き、直に、布施を求め、乞食を思い出し、假令要求があつても、施すものがないと断ろうと思つて居ると。

御佛は法と財との、二つの施を説き給う。いまわれ法の施を説かん、心を傾けて聞け

よかし。

長者は先ずこの法の施とゆう語を聞いて喜び、初めて説法に耳傾ける心を生じた。目連は説くよう。

「長者よ。法施、財施のうち、私は今、法施を説くのである。如來はこの法施に五つの大施を説き給う。五つとは、一つには不殺生、長者はこの大施を生涯守らねばならぬ。二つには不偷盜、三つには不邪淫、四つには不妄語、五つには不飲酒。長者は、これらの大施を生涯守らねばならぬ」。

長者は、先ずこの五つの法施が何物をも要しないで出来ることを喜んだ。殺生しない、これは自分に取つて容易なことである。盜まない、これは富める自分によつて成し易いことであり、また、他人が自分の富を盗まなければ猶結構のことである。邪淫、妄語をしないとゆうことも大切であるが、酒を飲むなどは富を減らさない要訣である。佛の教とは斯うゆうことかと喜んで、五戒を守ることが誓ひ、目連を請じて、初めて自ら食を施し、食事の後で、一反の衣を供養しようと思ひ、倉に入つて穀を探し、好くないものを選ぼうとするが、自然に手が上等の品物に移つて仕方がない。取つては捨て、心の争を續けて居ると目連の聲がした。

施さばやとて心と闘うは、賢き人のなさぬところ、施すは闘うに非ざれば、こころの儘になせ。

長者は、この歌で、自分の心を見抜かれたことを知り、白麁をとつて、目連に奉つた。目連は之を受けて、更に法を説き、布施の話、持戒の話、生天の話、世の中の實相とそれを解脱する道の話と次第に長者の心を導いて、その座席において、長者の心眼を開かした。長者は大いに喜び、生涯五戒を守つて、佛の弟子たることを誓うに至つた。

四。賓頭盧は、長者の姉の難陀の教化に向つた。難陀も彼に導かれ、世尊に見えて、慳貪の自性に眼が覺め、教誨に依つて、白麁の色に染り易い様に、心に教を得て、三寶に歸依する優婆夷となつた。長者の弟、優婆迦尼は、兄と姉とが同じく佛の教に歸依するに至つたことを非常に喜び、阿闍世王の處へ行ってこの話をなし、我が家の喜を傳えた。阿闍世王も大いに喜び、我道法の兄弟を増すことが出来たと、御佛の御徳を讃歎した。

第四節 波斯匿王

一。世尊は一日鹿子母講堂に、その日中の暑さを過し、夕暮禪定を出でて、沐浴の後、春を乾かすために坐つて居給うた。阿難は手で御身體を摩でて申しあぐるよう。「世尊。世尊のあの御奇麗な膚

の色は失せ、滑かな御身體に皺が顯われ、御腰が前に曲み、御眼も御耳もお變りになりました」。

「阿難よ。汝の云う通りである。青春に老あり、無病に病あり、生存に死が具つているのである。我が年八十に及びて、膚の色は失せ、皺が顯われ、眼や耳の様子が變つて仕舞つた」。

老に咀あれよ。老は美しきを害い、見る目善き形を、踏みにじる。百年の壽を重ぬるも、死を免れじ、何ものも除くことなく、みな踏みにじる。

二。この教を垂れて居給うた處へ、波斯匿王は美しい車を裝うて、世尊を精舎に訪ひ、車を下つて世尊の御傍に進み申しあぐるよう。「世尊。生きもの、中で、老と死とを免がるものがあるではありませんようか」。

「大王よ。老と死とのない生はありません。大王よ。家富み繁え、何事も思のままの婆羅門でも刹帝利でも、老と死とを離れて生きることは出来ません。煩惱を盡く滅ほし、なすべきことをなし終り、罪の重荷をおろし、清淨の目的を果し遂げた阿羅漢の身體でも、この破滅を免れることは出来ず、やがて捨てられるものであります」。

世尊は、王の乗り捨てた美しい車に眼をやつて次の様に仰せられた。  
美しき王車もこわる。この身老いゆく。正法ひとり老いず、世々の御佛の宣うところなり。

波斯匿王は、世尊の御語を喜び、御禮を申して歸つた。世尊は比丘等と呼んで教え給うよう。「比丘等よ。世間の人々は四つの事を喜び、四つの事を悪んでゐる。彼等が喜ぶ四つの法とは、青春と健康と生存と愛する人々と共に居ることである。悪んでゐる四つの法とは、青春に老が變り、健康に病氣が變り、生存に死が變り、愛する人々と別れることである。比丘等よ。茲に又四つの法があつて、之を覺れば上の四つの法を離れることができ、覺らなければ永久に上の四つの法を離れることが出来ないのである。それは何であるかと云うに、聖き戒と聖き定と聖き智慧と聖き解脱とである。比丘等よ。生老病死を離れた涅槃の境地に至らうと求め、愛するものと別れることに無常の想をなすが善い」。

三。これより先波斯匿王にはバンドラとゆう將軍があつた。剛直にして人民の歸仰するところとなつていたが、王は老年に及んで心の友なる末利夫人を失ひ、正しい教導を離れた爲に、バンドラ將軍を遇するの道を誤り讒言を信じて將軍とその子供達をあざむき殺すに至つた。後に王は大いに悔い、快快として樂しみます。將軍の甥のデーガ・カーラヤナをとりたてて、將軍とし、せめての慰めとしていた。世尊が釋迦族のメータールバとゆう邑に居給うた時のことであつた。波斯匿王は所用ありて、ナガラカに来ていたが、デーガ・カーラヤナを呼び、「カーラヤナよ。馬車の用意をせよ、園に行き美しい景色を眺めたいと思う」と命じ、鹵簿蕭々町を出掛けて園に入つた。

大王は、園の林藪の中を逍遙しながら、靜にして人いさけれのない、獨り棲むに相應しい美しい樹下を見て、世尊の事を思い出し、ここのう處で世尊に御給仕申あけたらばと思つた。「カーラヤナよ。私はここのう靜かな美しい樹下にて、世尊を御給仕申上けたいと思つ。世尊は今、何處に在ますであらうか」。「大王よ。世尊は今メータールバとゆう釋迦族の邑にいられます」。「この市からメータールバまで、何れほどの距離であるか」。「大王。さほど遠くはありません。三由旬程でありますから、日没までに行く事が出来ます」。「それでは馬車の用意をせよ。世尊に御遇いに參らう」。

かくて大王は、美しき車にて市を出掛け、日没までにメータールバに着し、精舎に進み車を捨て、徒歩にて入つた。其時、多勢の比丘が露地を經行していたが、大王は比丘等に近ずいて世尊にお遇いしたいが、今何處に在ますかと尋ねた。「大王よ。世尊はこの戸の閉してある室に居給うから、靜かに近ずいて縁に上り、咳拂いをして門を叩かれるならば、世尊は戸を開き給うでありますよう」。

三。大王は劍と冠と總て王のしるしである五つのものを取り去つてカーラヤナに渡し、一人教えられたように進んで、世尊の室の門を叩いた、世尊は戸を開き給うた。

四。大王は室に入り、世尊の御足を頭禮して、接吻し、手にて世尊の御足を摩り、名乗を擧げた。「世尊。私は喬薩羅の王波斯匿であります」。「大王よ。貴方は如何なる理由で、このような丁寧な

挨拶をなし、心の供養をなされるのでありますか」。

「世尊。私は世尊に對する如法の信があります。それは、世尊は正覺者、法は世尊に依つてよく説かれた法、僧伽は善い、行の人々とのう事でありませぬ。世尊。私はこの世に於て十年、二十年、三十年、四十年、自ら清淨の行を修めながら、沐して後膏を塗り、鬢髪を刈り込み、五欲に耽り樂しむ沙門、婆羅門を見ませぬ。又私は茲に生涯、生命のある限り、圓滿清淨の行を修めてゐる比丘を見ませぬ。世尊。私はこの敎團以外に、このような清淨圓滿の修行を見ませぬ。世尊。これも私が世尊と法と僧伽とに對して正しい信ある一つの理由であります。

世尊。王は王と争い、刹帝利は刹帝利と争い、婆羅門は婆羅門と争い、家主は家主と争い、母は子と争い、子は父と争い、兄弟姉妹相争い、朋友相争うていますが、この敎團においては、比丘等は互に和合して、水と乳の如く、争なく、慈の眼をもつて眺め合つてゐるのを認めませぬ。私はこの敎團以外に、この様な和合の團體を見ることが出来ませぬから、これも私が世尊に對して正しい信ある一つの理由であります。

世尊。又私は園林巡りをして、或沙門、婆羅門が瘦せ衰え、顔色青ざめ、血管が太く顯われ、人を見るに眼のすわつてないのを見ませぬ。その時私は思います。この人々は必ず清淨の行を樂しまないであろう。或は又、何か悪い事をしてそれを隠してゐるため、この様に瘦せ衰え、人を見るに目がすわらないのであらうと。それで私はその人々の處へ行いて、その理由を尋ねますと、彼等は病氣であると答へます。世尊、私は茲では皆の人が愉快そうに修業し、謙敬にて、鹿のように優しい心にて住するを見ませぬ。それで私は、眞に此等の大徳等は、世尊の敎において卓越殊勝の點を見るから、このようにして居られるのであらうと思ひ、これも私の世尊に對して正しい信ある一つの理由であります」。

五。「世尊。又私は灌頂をした刹帝利種の王でありますから、殺したいと思へば殺し、生かしたいと思へば生かし、放逐したいと思へば放逐することも出来ませぬ。而も私は會議の時に、私の話なかばに口を挿むものを止む事が出来ませぬ。私の話が終つてからにせよと云つても、私の話なかばに饒り出すものがあります。然るに今茲では、世尊が數百の會衆に法を説いていられても、弟子達の中で噴嚏をし咳をするものがあります。嘗て世尊が數百の會衆に説法せられた時であります。或比丘が咳をすると、同學の人が膝で突いて、尊者靜かになさい、音を立てゝはならぬ、私達の師匠が法を説いていられるからと申しました。

私はこのように思ひました。實に勝れたことである。劍も用いず棒も用いずして、この會衆は善

くもかく調伏せられておると。世尊。私は此敎團の外に、この様によく調伏せられた會衆を見たことがありません。これも世尊。私が世尊に對して正しい信ある一つの理由であります。

世尊。又私はこのゆう事を見ます。或る賢い伶俐な、毛髮の先をも割くように巧な論議に長じた刹帝利種の人々が、他人の議論を明快に破りて遍歴する。彼等は世尊が何々の處に到着されたと聞いて問題を用意する。我々は沙門喬答摩の處へ行いてこの質問をしよう。かく問われてかく答えるならば、この様に論議を吹き掛けようと、然も彼等が世尊の所へ近ずけば、世尊は法を説いて、鼓舞し、喜ばしめ給う。彼等はその法話により、問もかけず議論もせず、必ず世尊の弟子となることを告白いたします。世尊。これも私が世尊に對する正しい信ある一つの理由であります。

六。「世尊。又同様に婆羅門、家主、沙門の賢い人々も、世尊に行いて示敎を得、鼓舞され喜ばされ、世尊の許可を得て出家し、隠棲し熱心に修行し、程なく出家した目的をこの世に實現して住し、この様に云う。我々は何も少しも失わない、何故なら、阿羅漢であるからと。世尊。これも私の世尊に對する正しい信ある一つの理由であります。

世尊。又インダツタとブラーナの二人の棟領は私の祿を食み、私に生命を與えられ名譽を得てゐる者であります。然るに彼等は、世尊に對する如く私に對して尊敬を示さない。嘗て私が白砂

を運び上げさせておる時でありましたが、インダツタとブラーナ棟領を調べて見ますと、彼等二人は或る雑沓した家に宿り、夜更まで法話をなし、それより世尊の在ます處を問亂し、世尊の方へ頭を向け、私の方を足にして寝ました。それで私はこの様に考えました。實に奇妙なことである。此兩人は私の祿を食みながら、世尊に對する様に私を敬わない。實に此等の人々は世尊の敎に卓越殊勝の點を見ているのであると。世尊。これも私が世尊に對して正しい信ある一つの理由であります。世尊。世尊も刹帝利、私も刹帝利であり、世尊も喬薩羅人、私も喬薩羅人であり、世尊も八十、私も八十であります。世尊。これに依つて私は世尊にこの上なき恭敬を拂い、心の供養をなすに相應しいのであります。世尊。それでは私はこれで御暇をいたします」と、右に繞つて其場を去つた。世尊は王が去ると間もなく、比丘等と呼び掛け給うよう。「比丘等よ。喬薩羅の王波斯匿は法塔を建立して去つた。比丘等よ。この法塔を受持せよ。この法塔を反覆して論じ、この法塔を傳持せよ。比丘等よ。法塔には利益あり、實に修行の初めである」。

波斯匿王が世尊に正しい信を告白してゐる間に、デーガ・カーラヤナは五つの王章を取つて、舍衛城に走り、毘瑠璃太子を立て、王とした。世尊の御前を辭した王は、この事を知つて、最早、舍衛城に入ることに出来ないことをさとり、僅かな侍臣に護られて、南に下り、女婿の阿闍世王に頼らんと

した。老衰の王はその志を果さず、中途に病を得て、崩御するに至つた。

### 第五節 迦維羅城の滅亡

一。これより先、世尊が舍衛城に遊化せられて間のない頃、波斯匿王は比丘等に親の少ないため、世尊の近親より皇后を迎えるならば、比丘等に信を得ることが出来ようと考へ、使を遣わし、迦維羅城に一女を求めしめた。王の心の中には、一方こうすれば、當時の譽高き名家と縁が續がるとう考へもあつた。

王使は迦維羅城にその旨を傳えた。茲において釋迦族の人々は相集つて、この事を相談したが、假令大國の王とは云え、系圖の正しくない波斯匿王に、釋迦族の姫を嫁がしむることは出来ないことであつた。と云つて、その願を容れなければ、王は兵力を待んで押し寄せて來ることが明かであつた。それで、一族の長者、摩訶那摩が腰元に生ませた女を、嫡出のものとして、波斯匿王に嫁がしむることになつた。王使は王の命令に依り、その女が父の摩訶那摩と一緒に食事を取るを見とげ安心して歸つた。

やがて、この王妃に王子が生まれ、毘瑠璃太子と名けられた。大王は王子をいつくしみ育て、王子が八歳になつた時に、射術を學ばしむるために、迦維羅城に送らしめた。王子は祖父の摩訶那摩の家に至つて、射術を學んでいたが、其の時分、釋迦族の公會堂が新に出來上り、幢幡を立て、羅網を張り、全美を盡し、世尊の落慶の御供養を待つて、使用する様に定まつていた。王子は仲間の子供と公會堂に入つて遊んだが、釋迦族の人達は非常に腹を立て、臂を取つて引きすり出し、大切なこの御堂に、下婢の子の分際で、何故に入つたかと罵つた。王子はこの思い掛けない侮辱に、幼ない身を燒かると、ほどに腹を立て、我れ若し王位を得るの日あらば、來つて必ず迦維羅城の住民を根絶しに殺して仕舞うであろうと、決心するに至つた。王子は舍衛城に歸つて、一婆羅門をして、日に三度歌を歌わしめて、その怒を新にして、時の至るを待つた。そしてこれを知つた將軍デーガ・カーラヤナも王に仕えながら、また報復の日の來るを待つていた。

二。毘瑠璃王は既に王位を奪い、今こそ時至れりと臣下を集め、「今、人民の主人は誰であるか」と尋ねた。「もとより大王に在します」。それでは四部の兵を集めよ。我は今から迦維羅城を攻め取るうと思ふ。大王の命の儘に、四部の兵衆は集められ、王はこれらを従えて、迦維羅城に向つて前進した。このことを聞いた比丘等は驚いて、世尊に申しあげた。世尊は座を立て、迦維羅城への道の

ほとり、一本の枯れた枝も葉もない樹の下に坐つて毘瑠璃王を待ち給うた。進軍の途中、王は世尊を見奉り、車を下つて、世尊の御許に近ずき、世尊に申しあぐるよう。「世尊。尼拘盧陀樹などの枝葉の生え繁つた樹があたりに澤山ありますのに、何故にこのような枯れた樹の下に御坐りなされていらるものでありますか。」王よ。親族の蔭は涼しいものである。

毘瑠璃王は世尊の御意中を察し、軍を返して城に入つた。然しながらその時にも猶、その前に歌を歌うように命ぜられた婆羅門は、王の怒を新にする歌を忘れない。日に三度ずつ歌うて、王の心を呼び起した。王は更に四兵を動かして迦維羅城に向つた。世尊は復もその枯樹の下に顯われ給うた。それがため王は車をめぐらして城に歸つた。この事が三たび繰り返された。四度目に王は更に軍を釋迦族の國に進めた。世尊は宿縁とむ可からざることを見、此の度は靜かに法を觀じて精舎に停まり給うた。王は兵を進めて迦維羅城に迫つた。

三。迦維羅城の住民は弓術に達していたので、毘瑠璃王の軍を迎えて、矢を射かけた。然し、その矢は或は耳を殺ぎ、或は頭鬢を射、弓を射、弓弦を射て、武力を減せしめたが、然し、一人の生命をも取るようなことはなかつた。流石年少氣銳の王も、城民の巧な弓術に恐怖を懷いて一度は退こうとしたが、又も婆羅門の歌に怒氣を催うし、且つ一人の婆羅門が、「釋迦族の人達は皆戒行を持

ち、蟲でも殺さないのではありませんから、進みさえしたら必ず勝つに相違ありません。この機會を失つたら、釋迦族を亡ぼす時がありません」と勸むるを聞き、前進を命じた。釋迦族の人々は城内に退き、堅く門を閉じて守つていた。王は城外にあつて、大いに呼ばわり、門を開くよう、若し開門しなければ、一族を殲滅するように脅かした。

釋迦族に奢摩と呼ぶる、年少の童子があつた。毘瑠璃王が城門の傍にあると聞いて、鎧を着け、劍を取り、獨り城外に出でて、王に戰を挑み、阿修羅王の荒れ狂うように、兵衆を斬つて王に迫つた。王も童子の勢に敵しかねて敗走したが、釋迦族の長老は奢摩童子のはたらきを聞いて呼び寄せ叱咤して云うよう。「汝は年少にして何故に家門を辱しむるのであるか。釋迦族のものはすべて皆善を行い、蟲の生命さえも取らないのである。もとより、毘瑠璃王の軍勢を破ることは容易いことであるが、多くの人を殺すことを恐れるのである。我等の佛陀は殺す勿れと教え給ひ、殺生の苦果が地獄に墮すること、人間に生まれても壽命が極めて短いことを教え給うたではないか。汝はこの家門の掟を破つたものである。城を出でて、何處なりとも去るが善い。奢摩童子は據處なく、逐われて他へ去つた。

四。毘瑠璃王は再び城門に來つて、開門を迫つた。素直に門を開けば何も争を好むものではない。



若し入城を許さなければ、武力に依つて門を破り、一族を鑿にするに属つた。釋迦族の人々は、もとより門を開く意はなかつたが、惡魔が一人の釋迦族のものと化して頻りに開門を主張したため、遂に毘瑠璃王の入城を許すこととなつた。王は城内に入り、先ず釋迦族のものを捕えしめ、多數を斬るも面倒であると、穴を掘つて生理めにし、大象をしてその上を踏み渡らしめた。五百人の美しい女を捕えて虜となし、他は皆男女老少の別なく生命を奪わんとした。

王の祖父摩訶那摩は、世尊に歸依する優婆塞であつた。王の處に至り云うよう。「どうぞ、たつた一つの私の願を容れて下さい。」「どうゆう願でありますか。」「私が水に入つて浮び上る間の僅の時間だけ、この城内のものを自由に城を出でて逃げることを許して頂きたい。水面に出たら又殺して下さい。さつても致し方がありません。王はそれ位のことならば善かろうと之を許した。摩訶那摩は喜び勇んで、水底に入り、髪を解いて樹の根に縛り、其處に尊い死を遂げた。此間に釋迦族のものは、四方の城門から逃げ出したが、既に覺悟を極めた彼等は、逃げる容子をしては更に城内に歸つた。北より出するものは、南より入り、東より出するものは西より歸つた。

摩訶那摩の水中にあることが餘りに長いので、王は探らせて祖父の死を知り、後悔を生じて、城民の生命を助け、五百人の釋迦族の女達を連れて王城に歸らんとした。親に別れ、夫に離れた釋迦族の

女達は、せめては、虐王の手より身を護らうと決心し、一人も王の命に従うものはなかつた。王は怒つて、これらの女達を坑に投じ、獨り軍を旋して王宮に入つた。城に近づくとき、王は妙なる樂の音を耳にした。王の兄祇陀王子は先には父に別れ、今又、弟が迦維羅城を征伐したと聞いて打ち沈み、僅に樂の音に心を慰めて、宮殿の奥深く垂れ籠めていた。王は祇陀王子の奥殿にすゝみ、守門の兵を斬つて自ら王子の室に入つた。「何故兄の君には、我等の遠征を援けないで、伎女と戯れているのでありますか。」「私はものゝ生命を取ることが嫌いである。王は怒り、劔をもつて王子を斬つた。人々は優しい祇陀王子の徳を讃えて、王子の死を傷んだ。

地にありては王子、天にありては天子、すべて皆これ善きことの報、祇陀の徳こそ尊けれ。この世のうれえ、かの世のうれえ、惡をなさば、惡き報。

この世のよろこび、かの世のたのしみ、功德をなさば、功德の報。

地にありては王子、天にありては天子、すべて皆これ善きことの報、祇陀の徳こそ尊けれ。

五。五百の釋迦族の女達は手足を縛られて、坑に投ぜられ、一心に御佛を念じ奉つた。「世尊は私達の種族より出で給うた。普ねく法雨を天下に注がせられます。私達は今この苦難におうています、どうぞ御慈悲を垂れさせられて私達をお救いくださいませ。世尊は比丘等連れて、

の傷ましい戦の場に顯われ給うた。五百の女人達は世尊を見奉り、喜と共にその裸體を恥じた。世尊に従う帝釋は天衣を與え、毘沙門天は天食を施して飢を醫した。世尊は靜かに、盛なるものは必ず衰え、生あるものは必ず死する道理を説き、この身體があつて五欲があり、五欲があつて執着が起る。このことを知つて生老病死を超越すべきことを教え給うた。女人達はこの教に塵垢を離れて、淨き法眼を得、満足して生命を終り、各々善き處に生を受けた。

世尊は比丘等と呼んで、城の東門に向い、城中に洞然として燃え盛つてゐる大火を見て宣うた。

なべてのものに常なし、顯われては消ゆる定、生死を離れてぞ、常の樂なる。

世尊は又嘗て、世尊と世尊の敎團の住所であつた尼拘盧陀の林に入り今日の昨日に變る有様を眺め、比丘等に教えて、舍衛城に還り給うた。その時、誰云うとなく、王と王の兵衆とは七日の中に死して地獄に墮つるであろうとの噂が立つた。王は恐れて婆羅門に相談し、六日の間は身を謹んで事なきを得たが、七日目に阿脂羅伐帝河に遊んで、その夜は河邊に宿り、夜半暴風駛雨が起つて、兵衆と共に王の生命を奪い去つて仕舞つた。宮殿も亦、天火の燒くところとなつた。

六。世尊はこのことについて、再び比丘等に教えられた。  
身と口と意に惡をなして、この世にも惱み、命みじかく、かの世にも惱む。

家にあれば火に燒かれ、水にあれば水におほる、命おわりて、地獄の火に燒かる。

尙世尊は、比丘等に對して、次の物語をなし給うた。「比丘等よ。昔、王舍城に飢饉があつて、住民は悉く、城外の大きな湖の魚を取つて生命をつないだ。その湖の魚の中に、拘瓊と兩舌と名くる二匹の魚があつて思ふよう。「我等は何の罪もなく、又、城の人間に何の犯すところもないのに、人間達は我等の生命を取つて食べている。二人で心を合せてこの怨を晴そうではないか」と。その時その村に八歳ばかりになる一人の子供があつて、自ら魚の生命を取らないが、人々が魚を取つて陸上に投げ上ると、悶え跳ねて死んで行くのが面白く、始終喜んで眺めていた。比丘等よ。因果の道理は恐ろしいほど確に報い顯われる。拘瓊の毘瑠璃王は兩舌の婆羅門にそゝのかされ、迦維羅城の人々にその怨を晴した。こうして怨は怨を重ねて輪廻のわだちを深く掘つてゐるのである。私は今頭痛を覺え、重い石で壓しつけられてゐるようであるが、これも、拭い去ることの出來ぬ一つの報である」。

### 第六節 極樂世界

一。世尊はなお、給孤獨園に滞在なされ、一日、舍利弗に告げ給うよう。

「舍利弗よ。こゝより西の方遙に極樂とゆう世界がある。其處に阿彌陀佛とゆう佛がいらせられて、現に法を説き給う。其國の人々は苦とゆうことを知らず、たゞ樂の目を送るから極樂と名ける。また舍利弗よ。その御國には七つの寶で作られた池があつて清らかな水を湛え、底には金の沙が布かれ、中に咲く蓮華は大いさ車の輪のよう、青色の華は青き光を放ち、黄なるは黄の光、赤きは赤の光、白きは白き光を放つて、清く妙なる芳があたりに漂うている。又その池の四方には、金、銀、瑠璃、玻璃によつて造られた四つの階があり、様々の寶玉に飾られた樓閣に連つてゐる。また空には永えの音樂鳴り、地は黄金の色に照り映え、夜晝六たび天の華は光り輝いて降り下る。その國の人々は朝まだき華皿に華を盛り、あらゆる御佛を供養し奉りて、朝餐の前に歸り來たる。又白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命などの鳥が常に雅な音をいだし、あらゆる「徳」と「力」と「教」をうとう。人々はこの聲を聞いて、みな御佛を念ひ、御法を念ひ、道を修むる人々を念う。されど舍利弗よ。是等の鳥は罪の報から生まれたのではない。彼の御國には三惡道の名さえもないからである。其等の鳥はみな御法の音を宣べ傳えしめんがために、御佛の作り給う所である。そよ風吹いて並ぶ寶の樹々をわたり、輝く羅網に觸れては微妙き音をいだし、百千の音樂を一時に奏するようである。この音を聞くものはまた自然に御佛を念ひ、御法を念ひ、道を修むる人々を思う。

舍利弗よ。その御佛の國は、かような徳と莊嚴とを具えている。

二。舍利弗よ。かの御佛の光は量なく、十方の國々を照して少しも障えられず、またその御命に限りがないから阿彌陀と名け奉る。そして佛となり給いてより十劫の時は過ぎた。又舍利弗よ。かの御佛の弟子達も、菩薩もその數甚だ多く、世の數え方の及ぶ所ではない。

又彼の國に生まれる人々は、皆迷に還らぬ位にあり、其中の多くは佛となるべき位に入る。そしてその數はまた數え盡し難い。舍利弗よ。之を聞く人は、かの御國に生まれんと願うがよい。何故かと云えば、かゝる多くの聖者達と一つにゐることが出来るからである。されど舍利弗よ。人の世の小さな善や徳をもつては、かの御國に至ることは出来ない。即ち阿彌陀佛の御名を持ちて一日二日又は七日に亙りて、心を一つにして散り亂れることがないならば、其人命終る時、阿彌陀佛は多くの聖者達と共にその前に現われ給うであろう。其人は心たじろがず、直にかの御國に生まれることが出来る。舍利弗よ。私はこの利益を見る故にこの様に説く。されば聞く者は願を起してかの御國に生れよ。

三。舍利弗よ。私がいま阿彌陀佛の不可思議なる功德をほめたゝえるように、十方の恒河の沙の數にも等しい佛達は、各々その國において、まことの御聲をもつて三千大千世界を覆い、「汝等よ。あらゆる御佛の護り給うこの不可思議なる御教を信じ奉れ」と説き給う。

舍利弗よ。人もしこの御佛の説き給う阿彌陀佛の名と、その御教とを信じ奉れば、すべての御佛の護りをうけ、佛の覺から退くことはないであろう。されば舍利弗よ。私の語と、佛達の説き給うところを信ぜよ。苟もかの御國に生まれたいと願う人は、昔も今も後の世も、等しなみに佛の覺を退かぬ位に入り、かの國へ生まれるであろう。

舍利弗よ。私がいま御佛の不可思議なる功德をほめたまえるように、かの御佛も亦私の功德をほめ給う。「釋迦牟尼佛は、濁れる世、邪見はびこり、煩惱盛に、人々けがれ、命短い時に、正覺を得て、すべて世の人々の信じ難い法を説き給う。まことになし難いことをなしたのである」と。舍利弗よ。私は實にこのような、あらゆる意味において濁れる世になし難いことを行うて覺を得、すべての人々の信じ難い法を説いた。甚だ難いことである。

世尊がこの教を説き給うこと了れば、舍利弗をはじめ、あらゆる弟子達、すべて集れる人々は、この御教を聞いて、信じ歡び、御禮を申しあげた。

四。世尊は又一日、比丘等を集めて今まで世尊に従った比丘等の特徴を擧げて教え給うた。

比丘等よ。我が弟子の比丘の中、最も法臘のたけたるは阿若憍陳如である。智慧第一は舍利弗である。神通第一は目連である。頭陀行第一は大迦葉である。天眼第一は阿那律、貴姓第一は迦利豪陀の

子跋提、美音第一は羅鳩吒迦提、師子吼第一は賓頭盧、説法第一は滿他仁の子富樓那、短かく説かれたものを廣く分別して説く第一は大迦旃延である。

比丘等よ。又自分の姿を巧に化作するもの、第一は朱利槃特、心解脫に巧なるもの、第一も朱利槃特である。想解脫に巧なるもの、第一は摩訶契特、無聲住の第一は須菩提、供養に値いする者の第一も須菩提、藪林に住むことの第一は離波多法提羅婆尼耶、禪定第一は疑者離婆多である。精進第一は蘇那考利毘沙、美音第一は二十耳億、所得第一は斯波離、信仰の堅固第一は婆迦利である。

比丘等よ。又研學の心の盛なる者の第一は羅睺羅、信仰に依つて出家した事の第一は賴陀瑟羅、圖を得るに幸運第一は鳩叱陀那、詩才第一は婆耆沙、總ての人々に喜ばれる第一は番迦多の子優波世那、坐具の管理分配に巧な第一は末羅人の陀婆、諸天に愛敬せらるる第一は彼隣陀婆奈、速に大事を了解する第一は婆比耶陀流知利也、美しく説法する第一は鳩摩羅迦葉、得解の第一は摩訶俱稀羅である。

比丘等よ。又、多問第一は阿難、記憶第一も阿難、智解第一も阿難、精進第一も阿難、奉事第一も阿難である。大衆を率ゆる第一は優留毘羅迦葉、家族を喜ばす第一は迦留陀夷、無病第一は薄拘羅、前生の記憶第一は蘇毘多、律を憶持する第一は優波離、比丘尼教誨の第一は難陀迦、諸根(官能)を制御する第一は難陀、比丘教誨第一は摩訶劫賓那、火定に入るに巧なる者の第一は左伽多、佛の説法

を引き出す第一は羅陀、粗衣第一は毛伽羅闍である。

五。比丘等よ。私の弟子の比丘尼の中、最も法臘のたけたるは摩訶波闍提喬答彌である。智慧第一は計摩である。神通第一は蓮華色、律を憶持する第一は波吒遮羅、說法第一は法與、禪定第一は難陀、精進第一は蘇那、天眼第一は左俱羅、捷慧第一は跋陀若陀羅計左、前生の記憶第一は迦維羅の跋陀、疎衣第一はキサーゴータミ、信仰の堅固第一は芝伽羅摩多である。

比丘等よ。私の弟子の優婆塞の中、最初に歸依した者は帝波須と跋利迦である。布施の第一は須達長者、給孤獨、説法の第一はマツチタサンデ村の質多長者、四攝事に勝れた第一はアーラービーの手長者、美味の食物供養の第一は釋迦族の摩訶那摩、心に欲する食物の供養第一は吠舍離の郁迦長者、僧伽に奉持する第一は郁迦多長者、不壞の信心を喜んだ第一は修羅奄婆陀、人々に喜ばれる第一は醫師の耆婆、信實第一は那鳩羅の父である。

比丘等よ。私の弟子の優婆夷の中、最初に歸依した者は世那尼の娘修闍多である。布施の第一はミガラの母毗舍佉である。多聞第一は僂僂の鬱多羅、美味の食物供養の第一は拘利人の娘修波婆裘、看病第一は須彼耶、信仰の堅固第一は迦帝耶仁、信實第一は那鳩羅の母、三寶の徳を傳え聞いて信仰を起した第一は、鳩羅羅佉羅の人迦利である。

第八編

# 第一章 涅槃の豫言

## 第一節 七つの不義法

一。世尊は愈々八十歳を迎え給ひ、王舎城に歸つて、その邊の靈鷲山に在りました。

摩竭陀の國王阿闍世は、弗栗特を伐とうと思ひたち、雨行大臣に命じてのうよう。「雨行よ。世尊は此處より程遠からぬ處にいらせられる。汝は彼處に詣でて、我がために教を請ひ、世尊の仰せられる所を善く憶えて歸るがよい。佛の語りたもう所には、虚妄がないからである」。

雨行は、命を受けて車を整え、山に登り、世尊を拜して申上ぐるよう。「摩竭陀の國王阿闍世、佛足を禮し、世尊の起居を伺ひ奉ります。世尊。聖體安らかにして、飲食常の如くにましますか」。世尊宣うよう。「善い哉、雨行よ。汝の王も民も、亦共に和きて、物の價平かであろうか」。「幸に佛恩に依りて皆自ら和ぎあい、風雨時にかない、國中、豊に實つて居ります」。かようにして禮を終え、申すよう。「世尊よ。阿闍世王は常に弗栗特を伐たんと欲うて居ります。併し聖意においてはいかゞ

なものでありましよう。どうぞ教を垂れて下さい」。世尊宣うよう。「雨行よ。私は曾て弗栗特に遊び、遮和羅の祠に在つた時、彼國の長老來りて、「摩竭陀の王が今我國を犯そうとしています。私達は互に相警めて此國を護つております」と申す故に、私は彼等に、「愁うるに及ばぬ、汝等もし七つの法を守つて、國を治めるならば、決して阿闍世王のために滅ぼさるゝことはないであらう」と教え、その法を説いて彼等に奉ぜしめたが、雨行よ。今も猶彼等が之を行なうならば破ることは出来ぬであらう」。雨行申すよう。「世尊。願わくば御説き下さい」。世尊宣うよう。「さらば諦に聽くがよい。汝が爲に詳に説くであらう」。

二。その時阿難が世尊の後にあり、扇をとりてあうぎ奉つていたが、世尊は願ひて問ひ給うよう。「阿難よ。汝は弗栗特の國人が數々相集りて、政を議り備を修めて、自ら守ることを聞いたことがあるか」。「承りました」。「さらば弗栗特は決して衰えぬであらう。阿難よ。汝は又彼國人が上下常に和きて俱に國事を行い、相率ひ、法を敬いて妄に更めず、禮を重んじ、敬を守り、男女別ありて長幼相順ひ、父母に孝に師長に順に、宗廟を崇め、儀典を廢てず、道を尊び、徳を敬ひ、持戒の人遠くより至るあれば、衣服、飲食、臥具、藥湯、諸の生計の供をそなえて之を待ち、少しも怠らぬとゆう事を聞いたことがあるか」。「そのように承りました」。「さらば弗栗特は決して衰えぬであらう。それ

國を有つもの、この七つの法を行ふならば危いことはない。天下の兵を擧げて、これを攻むとも勝つことは出来ぬであらう。

爾時雨行は、座より起ち、世尊を禮してゆうよう。「弗栗恃の人が、此法の一を行つても圖ることは出来ませぬ。まして七つを具するにおいては尙更であります」。世尊を拜して去り、阿闍世王に報告し、王は之によりて戦をやめるようになった。

三。雨行の立ち去るや、世尊は阿難に命じて此山の邊に在る諸の比丘を盡く講堂に集め、彼等の前に坐して語り給うよう。「比丘よ。私はいま汝等のために七つの法を説くであらう。汝等、諦に聽き善くこれを念うがよい。比丘等よ。數々相集りて法を講え、さらば道は久しくあるであらう。上下相和ぎ互に敬い合つて違ふことなく、法を奉じ、戒を畏れ、妄にこれを易えず、長と幼と、又先なると後なると、相交わるに禮を以てし、心を護りて、孝と敬とを首とし、閑處にありて行を清め、人を先にし己を後にし道に違ひ衆を愛して、來るものに厚く施し、病めるものを懇に看とるならば、道は久しくあるであらう。比丘等よ。又七つの法ありて、道を榮えしめる。即ち清淨を守りて事の多きを樂わす、無欲を守りて貪らず、忍辱を守りて諍わす、靜默を守りて戯れず、法意を守りて憍ることなく、一心を守りて餘の行に従わす、儉素を守りて衣食に約ならば、道は久しくあるであらう。

比丘等よ。又七つの法ありて、道をして榮えしめる。即ち如來を敬い、聖法を敬い、聖衆、聖戒、聖定、父母、不放逸を敬うならば道は久しくあるであらう。

比丘等よ。亦七つの法ありて、道を榮えしめる。即ち如來を信じ、足らざるを慚じ、惡きを愧じ、多く聞き、勤め行い、憶念たえず、深い智慧をもつならば道は久しくあるであらう。

四。比丘等よ。又七つの法ありて、道をして榮えしめる。即ち正法を念うて忘るることなく、諸法を觀ては其眞なると偽なるとを擇び、たえず勤め勵み、常に歡喜を得、偽を除きて心を息わしめ、禪定に住みて妄念を生むことなく、不實の境を捨て、浮き沈みの兩端を避けるならば道は久しくあるであらう。

比丘等よ。又七つの法ありて、道を榮えしめる。第一に教を重んずる。父母は子を愛めども、其恩は此世に限るが、教は人を度して涅槃に昇らしめる。さらば教を持ちて、心を端しゆうし、恰も灰をもつて衣を洗いたる如くする。心が淨かなれば、何の恐もない。次には世の苦しみに満ち、常なきを思つて、生死を樂わす、衆に先だちて道を得る、勤め勵みて内と外とを端しゆうして過なく、謙りて橋らず、恭しく賢聖につかえ、同學を敬い、意を降して、貪と恚と癡とを制し、邪を離れ

て、次に此身の泥土のように穢れの中に盛りて食すべきものなきことを思い、食を食らず、牀を擇ばず、唯道を以て自ら樂しむ。次に自己を觀る、天地ありてより死なざるものは一人もない。世は夢に似、其樂は幻である。されば之をもつて自ら欺くことなく、日々に死を念うのである。さらば道は久しくあるであらう。

五。比丘等よ。又七つの法ありて、道を榮えしめる。即ち身には常に慈悲を行いて衆生を害わず、罵られても應えず、怨まず、慈と愍とをもつて向い、罵られても怒る事がないならば、後の憂はない。又口には常に慈悲を語り悪言を出さない。語が正しくなければ道を得ることは出来ない。意には常に慈悲を念いて、損得利害に動かさず、悪と怨と怒を思わない。次に清淨の生計を得て、衆と之を共にして等しくなし、他の利益を嫉まない。次に賢聖の戒を守りて動かさず、たとえば牝牛の草を食いて乳を出し、乳より酪を出し、酪より酥を出し、酥より醍醐を出すよう、世と諍わすして、心を醍醐のように持ち、知らぬ者は知れるものに聞いて怠ることなく、次から次へと押し及して之を行ふ。次に賢聖の道を見て苦を盡くし、之を他に傳えて、共に道を守る。次に坐するにも、立つにも、常に佛の語を承け、之を唱え之を念じ、互に教え合つて之を修める。かようになせば道は久しくあるであらう。

六。比丘等よ。一切のいきものに慈を加えよ。人の死するあらば之を哀め。死に行く人は道を知らず、歎き悲しむ人々も、亦其神の赴く所を知らない。道を得たるものだけが之を知るのみである。佛はこれがために教を宣べる。教は學び、道は行わねばならぬ。天下に道は多い、その中において王道は大なるものである。されど佛道は至上の道である。

比丘等よ。如來の教法を修むるものは、他の人の道を得たるを見て、私はいまだ得ないと悲しんではならぬ。たとえば數十の人々が共に射を習うに、前に中るもの、後に中るものもありて、其時は同じくはないが、射てやまねば、後には竟に中るように、又、天下の水の、小き谿にあるは、流れて大いなる谿に入り、大いなる谿にあるは、流れて大いなる河に入り、大いなる河に入るは、流れて大海に入るように、修めて止まねば、後には必ず解脱を得るであらう。諸の比丘達は聞きおわりて、大いに之を歡んだ。

第二節 法の鏡

一。今や世尊は入滅の時に近ずいた事を自覺せられ、阿難を呼びて「是より巴連弗の市に行こう」



と仰せられた。阿難は衣を整え、鉢を持ち、諸の比丘達と共に世尊に隨ひ、王舍城を出でて、北の方巴連弗に向うた。

途に菴婆羅致の村を過ぎたが、世尊はその竹園に息い、諸の比丘に告げ給うよう。「比丘等よ。道に志す者は四聖諦を知らねばならぬ。之を知らないために、長く生死の路にさまようて、止む時がないのである。

比丘等よ。四聖諦とは、苦集滅道である。苦とは生老病死の苦、愛するものに離るゝ苦、怨に會う苦、求めて得ざる苦である。この苦を引き起す煩惱は集である。この苦の因果を滅ほすが滅である。滅に至る道が道である。汝等この苦を知り、その因を斷つならば、そは眼を得たものである。その人には生死なく、苦は永く絶えるであろう。

この故に、比丘等よ。心を専らにして佛の語を承けよ。慾に遠かり、世と爭わず、殺さず、盜まず、他の女を犯してはならぬ。欺き譏り、佞い綺り、惡み罵つてはならぬ。又嫉み嗔り味く疑うてはならぬ。身の常なきこと、穢れていることを念え。そして竟には塵に歸らねばならぬことを念え。古の諸の佛達は、皆この聖諦を見、この聖諦を教え給うた。後の諸の佛も亦皆この聖諦を見、この聖諦を教え給うであろう。

比丘等よ。家に居ることを貪り、恩愛を慕い、世の榮名を樂うもの、遂に度世の道を得ることはできぬ。世を樂しむ心は、道を樂しまないからである。

道は心より生まれる。心が淨いならば道は自ら得られるであろう。今佛は世のために、生死を脱れて正道を開いた。すべて地獄、畜生、餓鬼の道を絶たんとするならば、心を一にして教戒を持てよ。戒を修むれば定を得、定を修むれば慧を得、慧を修むれば心は淨くなるであろう。比丘等よ。諦にこれを念え。

二。世尊がこの村に宿られたとき、舍利弗は世尊の座下に詣で、恭しく世尊を拜して申すよう。

「世尊よ。私は、世に世尊に勝れるもの、又は世尊と等しく法を覺れるものが、過去、現在及び未來に互りて、一人もないことを信じます」。世尊宣うよう。「汝はどうしてそれを知るか」。舍利弗云うよう。「世尊よ。私は具に三世を知ることが出来ないのではありませんが、世尊によりて法を知ることが得ました。世尊は量ない智慧を具え、現在と過去と未來とを知り給う。それゆゑに世尊は至上にていらせられる、一切の煩惱を脱れ、覺に具わる一切の徳を有ちたものであります」。

かくて世尊は、菴婆羅致村より那爛陀の里に入りたまえば、里人は歡びて迎え奉つた。世尊は彼等に道を宣へ、暫く茲に留まりたまうた。

三。世尊は、阿難を隨えて、那爛陀を去り、諸の弟子と共に、巴連弗に到り、城外の樹下に坐したもうた。この市は恒河をさし挿んで、隣國に接する摩竭陀の國境にあつた。城中の人々は世尊の來り給うたことを聞き、共に城を出でて、その樹下に向い、遙に世尊の聖容の嚴なるを望み、歡びて座下に至り、佛足を禮拜して傍に坐つた。世尊は、彼等のために道を傳えたまい、人々は聞きおわりて、「私達は、謹みて如來と御法と聖衆とに歸依します。どうぞ慈みて許し、私達を信者として下さい。私達は今より後、殺すこと、盜むこと、姪を行ふこと、詐ること、又、酒を飲むことを止めるでありましょう」と申し出で、世尊はこれを許し給うた。人々は世尊と弟子達のために、供養を設けたいと願ひ、其許を得、その市の公會堂を拂ひ、水を灑ぎ、香を薫らせ、座を設けて世尊を御迎え申しあげた。世尊は弟子等と共に、その堂に到り、足を洗い、手を深い、室に入りて中央の柱を背にし、東に向うて坐し、比丘達はその後、市民はその前に居並んだ。

世尊告げ給うよう。「世に貪を好み意を恣にするれば五つの失がある。一には財目に減せ、二には道を失いて身危く、三には人に敬われず、死に臨みて悔い、四には惡聲世に周く、五には死して後に復苦に入るであろう。若しよく意を降して自ら恣にすることがないならば、五つの得るところがある。一には財目に増し、二には道に近ずき、三には到る處に敬を受け、死に臨みて悔なく、四には好き名遠く流れ、五には死して福徳の處に上るであろう。その御話のおわつた時、夜は已に半ばであつた。世尊告げ給うよう。「夜は更けた。汝等各々宜しきに隨うがよい」。人々は禮拜して御前を退いた。

後夜に及びて、世尊は林に入り、靜に一樹の下に坐し、諸天がこの市を護つてゐることを見、復び堂に還り給うた。阿難も衣を正して世尊の側に坐した。

世尊、阿難に問ひ給うよう。「此巴連弗の城を造る者は誰であるか」。「これは摩竭陀の大臣雨行が、大臣須尼陀と共に、國王阿闍世の命を受けて造つたもので、弗栗特を防ぐためでありませう」。

世尊、宣うよう。「賢なるかな雨行、此城は後必ず榮えて賢者集り、商賈集いて餘國に破らるゝ事はないであろう。けれども久しい後に大火と洪水と城の内外における謀反との三つの災があつて、それが竟にこの城を破るであろう」。

四。雨行は、世尊の弟子等を率いて、茲に來り給うと聞き、多くの從者を隨えて、世尊の座下に近ずき、恭しく禮拜して側に坐つた。世尊はそのために教を垂れ給ひ、雨行は喜びて申すよう。「世尊は、私は明日、食を奉りたいと思ひますが、どうぞ比丘等と共に私の家においでを願ひます」。

世尊は黙して之を聽し給うた。兩行は、家に歸りて、終夜室を淨め、食を具え、旦を待ちて、再び世尊に申上げたので、世尊は比丘等と共に其家に入り給うた。兩行のさぐぐる食を受けて、世尊は仰せられるよう。「敬うべきを敬い、事うべきに事え、博く施し、愛をこととし、常に法を聽こうと願うがよい。兩行よ。官にありて貪り、嗔り、虐をなし、縦であつてはならぬ。もしこの五つの事を去れば、後に悔なく、死して苦を離れるであらう。兩行よ。之をつとめるがよい」と。兩行は謹みてその教に順うた。

世尊は兩行の家を去り、比丘等を率い、城の東門を出でて、恒河に向いたもうに、水はいま漲つてゐる。渡ろうとする旅人が、船に乗ることを争うた。世尊は比丘等と共に、屈めた臂を延ばすよりも短い間に此河を渡り、宣うよう。「佛は船師である、正法によりて苦海を渡り、諸の衆生を導いて、涅槃を得しめるのである」と。

兩行は世尊を御見送り申上げ、その出でたまえる門を喬答摩の門と名け、その渡りたまえる津を喬答摩の津と名けた。

五。世尊は進みて拘利村に至り、一の林に入りて、比丘等に告げ給うた。「比丘等よ。聖き戒と、聖き定と慧を持ちて、解脱を得よ。此法は微妙にして容易く覺り難い。之を覺らなかつたために我等は

久しく生死にありて、窮なく迷うたのである。

汝等。つとめて自ら、清淨の行を修め、心を知りて其性を清くせよ。世と争わず、自ら身を憂え、靜に内に念うがよい。さすれば心は明かになり、貪、嗔、癡の三の垢を除き、自ら道を得、心は復び走ることなく縛めらるゝこともないであらう。比丘等よ。王が民の主であるように、心は萬の物の主であるから、善く之を思うが善い。

六。世尊、拘利より那地迦の村に入り、一の河邊の樹下に止まり給うた。

時にこの村に疫病がはやつて、死ぬる者が多かつた。比丘の遮樓、尼難提、優婆息の迦陵伽、婆頭樓、須跋陀、須達多及び優婆夷の須迦多等もその中にあつた。其親族の人々來り問うよう。「彼等は死んで何處に行つたのでありましょう」。阿難は、世尊に之を尋ね奉つた。

世尊宣うよう。「遮樓はこの世において無學の位にあつた。難提、迦陵伽、婆頭樓、須跋陀等の五人は天上にて涅槃に入り、須達多等の九十人は一たび此に來つて、苦の因を盡くすであらう。そして須迦多等の五百人は七生の間に、三つの垢を盡くし、地獄、餓鬼、畜生の道を離れて涅槃に入るであらう。

阿難よ。生あれば死がある。是は世の常である。然るに人は死ある度に、來つてその行先きを問う

は、煩わしい事である。私は今汝のために、法の鏡を示して、我が弟子達の生まれる處を知らしめるであらう。

阿難よ。もし我が弟子にして、堅き信を得、如來を信じ、如來の法を信じ、如來の僧伽を信するならば、地獄、餓鬼、畜生の道を離れるであらう。たとえ天上人間の往來するとも七生を過ぎない中に、自然に苦の終をなすであらう。されば衆生には愚のために生死がある。智者は道をたもつために、生死にかえらない。汝等、正しく佛を念じ、法を念じ、衆を念じ、戒を念じて、永く憂と嘆とを離れるがよい。

### 第三節 菴婆波利

一。世尊は、那地迦村にて戒定慧をときたまえる後、「今より吠舍離へ行こう」と阿難を伴うて道をすくみ、城外の樹園に止まり給うた。

園は城中の娼女菴婆波利の有する所であつた。彼女は、世尊の其園に來り給えるを聞き、清らかに裝い、五百人の娼女を率いて車を馳せ、城を出でて、世尊の座下に詣でた。

世尊は遙に之を見をなわして比丘等に語り給うた。「比丘等よ。汝等、いま其心を端しゆうするがよい。寧ろ暴虎の口に入り、狂えるものゝ刃の下にたち、或は熱鐵の槍を以て雙の眼を貫かるゝとも、欲に惑うてはならぬ。健かに制せよ、已に生じた惡は斷ち、未だ生じない惡は發らないようにし、已に生じた善はそだて、未だ生じない善は發らしめよ。かようにして善くその心を攝めよ。若し初に止めなければ、後に及びて御し難いであらう。たとえ骨を破り、身を燐くとも、意にまかせて惡を行つてはならぬ。健に制するとは之をゆう。よく自分の心を端しくすることが最も健かなるものである。譬えば二頭の牛が互に縛められないで、一つの轆に繋がれるように、五官は境を繋かず、境は五官を繋ぐことはないが、たゞその中に欲があつて、五官と境とを縛る。故に只心を制せよ。放逸であつてはならぬ。されば精進の弓と智慧の鏢とを執り、正念の鏡を被りて五欲と戰を決するがよい。私は道を求めてからこのかた、意と争うて量ない時を重ねた。其間、邪の心に随わず、勤め勵みて竟に正覺を得たのである。比丘等よ。その心を端しゆうせよ。汝等の心は久しい間穢の中にあつた。今や自らその中から抜き出だして、諸の苦を脱れよ。生死の法は外を視ても苦、中を視ても皆苦に満ちている」。

二。やがて、菴婆波利は世尊を望み、喜びて車を下り、世尊の御前にすくみ、禮して傍に坐した。

世尊問い給うよう。「何のためにこゝへ來たのであるか」。菴婆波利應えて申すよう。「私は度々、世尊が諸天に勝りたもうことを聞きました。されば御教を受けて、夙夜自ら勉め、何とかして邪の道に陥りたくないと思ひます」。世尊宣うよう。「汝は、女子となれるを喜ぶか」。天が私を女子とならしめたまであります。私は何も喜んではおりませぬ。「汝若し喜ばないとすれば、誰が汝に五百の娼女を養わしめたのであるか」。私の愚の仕業であります。「善哉、菴婆波利よ。行の溢るるものに五つの穢がある。名は損われ、公に疾まれ、畏と疑とを懐くこと多く、死して地獄に入り、ついで畜生の相を受けるであろう。皆これ欲のためである。又行の清い者に五つの福がある。名は稱えられ、官を畏れることなく、身は安く、死して天上に入り、ついで清らかなる涅槃の道に立つであろう。されば自ら思えて教戒を行え、されば清淨の道を得るであろう」。世尊、種々に法を説き給へば、菴婆波利の心は歡喜に溢れた。世尊宣うよう。「汝の心は既に淨らかである。男子の法に進むことは、さまで難しいことではないが、女子の法を樂しむようになることは甚だ難しい。まして年少く家も豊かに、容色をそのうるにおいては尙更である。菴婆波利よ。財と色とは常の寶ではない。唯道のみ尊いものである。強は病に壞られ、少は老に遷され、命は死に困められ、愛するものには離れ、怨には隣り、求むる所は多く意に隨うことはない。

されど唯道のみは、心のまゝである。之を行えば侵しうるものとはではない。菴婆波利は禮を述べ、座を避け、跪いて申すよう。「明旦微の供養をさそけたいと欲ひます、どうぞ世尊は、諸の聖衆と共に私の家へおいでを願ひます」。世尊の御許を得て彼女は大いに喜び、直ちに禮をなして去つた。

三、時に城の中なる離車人は、世尊を拜もうと思ひ立ち、一族五百人、車を連ねて城を出でた。青い車には青い幡を立て、青い蓋を用いた。白い車には白い幡をたて白い蓋を用いた。又黄なる車には幡と蓋との黄なるを用い、赤い車には幡と蓋との赤きを用いた。そして人々の身に帯べる諸の珠玉は亦互に相煌いた。その途に偶々菴婆波利がその娼女達と一所に世尊の座下を辭して、城の中の其家に急ぐに遇つた。彼と此との車は相觸れ、軸と軸と相打ち、輪と輪と相摩し、離車人の幡蓋はその爲に損われた。離車人責めてゆう。「何故に汝は私達の車を損うて願ないのであるか」。菴婆波利は答えて、「明旦、世尊とその聖衆を私の家に請じ奉る許を得たので、思はず道を急いで禮を失ひました」と謝つた。離車人は驚いてゆうよう。「汝はもう世尊の御許しを得たのであるか、菴婆波利よ。暫く汝の招待を私達に譲つてくれ、私達はそのために百千兩の金を汝に與えるであろう。」「私の招待はもうきまつています。公子等の求めに應ずることとは出来ません。」「それなれば、百

千兩を十六倍した金を與えるであろう。どうしても私達に先を譲つて貰いたい。彼女は尙も肯わぬ。離車人は重ねて、「さらば國の財の半を與えるであろう」。彼女は之をも斥けて、「たとえ國の財を以てしても、私は譲ることは出来ませぬ。そは、世尊が、私の招待を始めに御許しになつたからであります」。離車人は、手を振り手を振り、「此女の爲に私達は、始めの福を關かされた」と歎き歎き、再び容を整えて直に彼の園に詣つた。

四。世尊は、之を望みて諸の弟子に告げ給うよう。「汝等三十三天の榮光を知ろうと思ふならば、この離車人を見よ、その威儀はこれと似通つてゐる。比丘等よ。自ら心を誦めて諸の威儀を具えよ。身と愛と心と法とを觀じて、勤めて懈らず、行くべきに行き、止まるべきに止まり、衣鉢を持つとも、湯藥を用ふるも、凡て儀を失わず、坐るにも臥するにも、語るも黙するも、いつも、心を誦めて亂れてはならない」。

爾時、離車人は車を下りて世尊の座下に詣り、前なるは跪き中なるは頭を垂れ、後なるは掌を合せて、残らず座についた。世尊問ひ給うよう。「汝等は何のためにこゝへ來たのであるか」。彼等は應えて云う。「世尊の此に在ますを聞いて拜むために參つたのであります」。世尊、乃ちこの人々に語りたもうた。「善男子よ。放逸であれば利と名は得られず、施すことを樂しまず、道を修むるもの

を見るを樂わず、世の事と語とを樂み、睡眠と戲論とを樂み、惡友に近ずき、懶惰を樂い、他に輕んぜられ、聞きたる所を失い、邊地に居るを好み、官能を調うることを能わず、食に足ることを知らず、閑寂を樂しまず、從つてその見る所も正しゆうない。善男子よ。世間の法も出世間の法も、放逸でない處から生まれる。若し道を得たいと思ふならば、勤めて放逸ならぬ法を修めよ。放逸なるものは、その身、佛と弟子に近ずいても、覺より遙かに遠いものである」。離車人申すよう。「私達は、自分の放逸であることを知つています。若しそうでないならば、世尊は、私達の土におでましになつたことと思ひます」。

五。時にその座中に、賓耆耶とゆう一人の梵士があつて、離車人に語つてゆうよう。「汝等のゆうことは宜しい。頻婆娑羅王は、大いなる利を得た、世尊が、その國におでましになつたことは、ちようど池に妙なる蓮が咲き出たやうなものである。されど汝等を放逸の人と名けるのは、五欲に荒みて如來に近ずくことを知らないためである。世尊が摩竭陀におでましになつたためではない。そは如來は日や月のようで、一二人の人のために世に出でたもうものでないからである」。起ちて世尊の前に詣り、熟々と聖顔を視たてまつた。世尊宣うよう。「汝何を視るのであるか」。賓耆耶申すよう。「世尊の御徳は大山の聳えるよう、天の上下を傾け給う。私は今世尊を仰ぎ、清い御敎に順いて、惱は少し

もありませぬ。世尊宣うよう。「善く私を視るが善い。自ら福を得るであらう」。世尊よ。願わくば私の思を開くことをお許し下さい。世尊之を許し給えば、賓者耶歌を歌うてゆうよう。佛伽の王は寶珠の鏡を被れり、摩頭陀の君の富は大いなり、如來此に出でて、威徳、大千界を動かし給う。

御名の顯われたもうことは雪山の如く、其香の妙なることは、蓮の華に似たり。其御光を拜するに、日の初めて出でたるが如く。月の大空に遊ぶに似たり。

世尊、此光を以て世を照し、衆生に明かなる眼を施して、諸の疑を定めしめたもう。佛智は高くして妙に、又明かにして塵なし、猶暗に庭の燎を見るが如し、願わくば我、清信の戒を奉じて、自ら三寶に歸し奉らむ。

五百の離車人は、此頌を聞いて感激してゆうた。「賓者耶よ。汝の徳は大い。どうぞ重ねてその頌を唱えて下さい」。

賓者耶は三たび之を唱え、人々は其麗わしき衣をぬぎて、彼に贈れば、彼は又皆これを世尊に捧げまつた。

六。世尊は其意を知りて之をおさめ、かくて人々に告げたもうよう。「離車の人々よ、橋慢を除い

て法の光を加えよ。財も色も香も花も、戒の莊嚴には及ばぬ。身を榮えしめ、民を安らかならしむるは心を調うるにある。もし之に道を樂しむ念を加えるならば、徳愈々高くなるであらう。よく賢人を集めて、日に其徳を新にし、正しく民を養い人々を導くならば、今より後徳は永く流れて窮まる處はないであらう。

寶玉は地より生まれ、戒は多くの善の由る處である。智あるものは淨い戒を修めて、生死の曠野を進むがよい。我の見を離れよ。橋慢は慚愧を滅ほし、諸善を滅ほし、諸の功徳を失わしめる。容色も閻族も皆無常である。動いて暫くも停ることはない。いつかはついに滅び行く、どうして誇ることを得よう。

欲は大いなる患である。それは敵のように、詐り親みて密に害す。良に内より發りて烈しいことは世の火にも勝つてゐる。火は盛に燃えても水は之を消す。貪の火は、たやすく消すことは出来ぬ。猛火の野を焼くとも草の根はやがて復速に生えるが、貪の火が心を焼けば、正法の生まれることは難しい。貪は世の樂を求め、世の樂は汚を増さしめ、汚は己を惡道に陥らしめる。怨は貪に過ぐるものはない。又貪は愛を生じ、愛は怨を習わしめ、欲は衆の苦を招く、惡は貪に過ぐるものはない。離車の人々よ。又瞋恚に隨うてはならぬ。怒は正しき顔色を壞り、明かなる眼を翳い、親を斷ち、

世に賤しめらる。されば怒をすてよ、若し自ら禁め得ないならば、悔と愛の火は隨いて起り、先ず自らを焼き、又人をも焼くであらう。心に合うものを見ては、食を起し、心に合わないものを見ては怒を起す。合うと合わないを共に忘れるならば、食と怒とは共に除くことを得るであらう。

離車の人々よ。如來の世に出ずるは甚だ希である。善く如來の正法を宣ぶるもの、甚だ希で、善く如來の正法を信するものも甚だ希である。よく如來の正法を成すものも甚だ希に、そして如來の正法の恩に報ゆることを知る者も亦甚だ希である。離車の人々よ。師に孝なれ、其前にては敬い、かけにては稱え、其逝ける後は常にこれを念うが善い。

世尊の語り給う所を聞き了つて、離車の人々は座より起ちて禮して申すよう。「世尊よ。私達は、世尊と聖衆に御供養を申したいと欲います。どうぞお聽し下さい」。世尊宣うよう。「私は先に菴婆波利に供養を聽したことである」。離車人手を振つてゆう。「彼女は私達の先を奪うた」と。けれども世尊の聖意が等しなみに及びたもうを知りて隨喜の心にかえり、各々佛足を禮し、三度世尊を繞りて家路に歸つた。

七。菴婆波利は夜を徹して食を整え、室を飾り、座を具え、曉に及びて世尊の御許に詣で。「世尊よ。どうぞ時をしろしたまえ」と申しあげた。世尊は鉢を持ち、諸の弟子に圍まれて、城に入りたもうた、城中の多くの人々は、出でて世尊の一行を拜み、世尊は明月のよう、弟子は明星に似ていと語り合つた。

やがて、世尊は、菴婆波利の家に入り、座につきたもうと、彼女は自ら鉢を奉じて漿をすめ、食を終り鉢を去り給うや、机を除き、黄金の瓶をとり、御手にそそぎ申すよう。「この城の多くの園のなかに、私の園は最も勝れています。私は今これを世尊に捧げたいと思ひます。どうぞ私を感みて、これを御受けください」。世尊は之をお聽しになつた。

「菴婆波利よ。塔を起し、精舎をたて、清涼の園をそなえ、橋と船とをもつて人を渡し、又は曠野にて水や草を施し、堂舎をたて、宿をあたえるがよい。菴婆波利よ。施す者には怨もなく畏もない。其名は人に稱えられ、其身は安らかである。淨い戒は世の尙ぶところである。行く所として敬い愛せぬものはない。愆は患であり、不淨である。速に之から出るように勤めよ」。

世尊は、菴婆波利の心が漸く和いで、たやすく教を受くるようになったことを見て、彼女のために四諦の要を説きたもうに。彼女は、信心淨く、ちようと白晝の色を受け易いよう、直に法を見、法を得て、無畏の位に入つた。

此時、菴婆波利は世尊に申しあげるよう。「世尊よ。私はいま如來に歸し、聖法に歸し、聖衆に歸



依し奉る。どうぞ私を信女のうちにお加えください。私は今から後、殺すこと、盗むこと、姪なことを誑ること、又酒を飲むことを禁めるでありますよう。世尊はこれをお許しになつた。菴婆波利はこれまでの習をすて、穢から淨められた。

世尊は、聖意のまま吠舍離に止まられた後、阿難に告げ給うよう。「汝等みな衣を整えよ。これより竹芳に行くであろう」と。阿難は衆と共に世尊に隨い、吠舍離を出でて、竹芳の村に向うた。

八。竹芳の村は、吠舍離に近い小さな丘の麓にある。世尊は、此村に入りてその北の林に止まりたもうた。村に毘舍陀耶とゆう婆羅門あり、世尊の來りたまえるを聞いて思ふよう。「喬答摩の名徳世に流れて、淨き行具わり、説くところ初も中も終も皆眞であるとうのう。今より往いて見よう」と。やがて座下に詣でた、世尊。そのために道を説き給えば、毘舍陀耶、喜びて明旦、世尊及び比丘を家に請じた。世尊。その家に入り、食を終えて、毘舍陀耶に告げ給うよう。「もし衣食或は坐具を以て、戒を持つ人に施すならば、大いなる果を得るであろう。此徳はこれ眞の伴である、到る處影の如くに隨うであろう。されば善を植えて後の世の種とせよ。徳に基ずけば、人は安らかである」。かくてその家を去りたもうた。

時に此村が饑饉で、穀物の價が高かつた。その上村が小さいので、世尊の一行は食を得ることも困難で

あつた。世尊は諸の弟子達を集めて告げたもうよう。「汝等、吠舍離か又は弗栗特に往いて知人を訪え、さすれば乏しきことはないであろう。私は阿難と共に茲に止まるであろう」。諸の比丘は命に違いて出で立とうとすると、世尊は重ねて諭したもうた。「比丘等よ。まず己に克たねばならぬ。良いものを得ても耽らず、悪いものを得ても憂えず。食は唯身を支えるものとして食つてはならぬ。貪るために生死は絶えないのである。されば身を節することを知つて、能く己に克つ者は、即ち寂定を得るであろう」。比丘等みな喜びて世尊を禮し、各々分れて四隣の都邑に向うた。

九。世尊は、阿難と共に茲に留まり第四十五年の安居に入られた。偶々病發りて聖體をあけて非常なる痛を覺えられた。世尊自ら念い給うよう。弟子達は今茲に居らぬ。彼等はみな私のことを慮つてゐる。彼等に知らせないで涅槃に入つてはならぬ。その上この地は私の涅槃に入るべき處ではない。されば勉めて心を勵まし、壽を留むべきである。かくて疾はや々癒えた。そこで室を出でて、涼しい處に坐られた。阿難は此時に樹下にあつたが、これを見て急いで世尊に近ずき、申すよう。「世尊よ。御疾はいかゞでありますか。私は御疾と聞いて、憂え懼れ、息もたえるばかりに悶えました。今少しばかり氣力を復しました。世尊よ。何故に今人々に教えたまわらないのでありますか」。世尊宜うよう。「阿難よ。人々は私において何の須つ所があるうぞ、もし自ら私は人々を待つ、私は人々を

攝むとゆうならば、此人は人々に教えなければなるまいが、私は、そうは言わぬ。故に教えねばならぬ理由はない。阿難よ。佛は人々と違つておらぬ。私は隠すことはない。我道には握られた拳とゆうものはない。内もなく外もなく、すべての道を汝等に示したのである。前後説ける處は皆人々の所にある。汝等は、たゞ之を行ふが善い。されば私はいつても比丘等のうちにあるであらう」。

阿難よ。我身は已に老い、我旅はもう終に近ずいた。齡まさに八十にならうとしている。形は朽ちたる車のよう、牢いことも強いこともない。私は嘗つて汝等のために説いたではないか。生死時あり、生まれて終らぬものはない。私は世に出でて、普く涅槃の大道をひらき、生死の本を絶つた。汝は我が逝きたる後に、この法を棄て、呉れるな。

阿難よ。汝は自ら己の燈となり、自ら己の家となり、他の家によつてはならぬ。法を燈とし、法を家とし、自らこれに歸依して、他に歸依してはならぬ。

身を觀るときは其穢を念うて貪らず、知覺を見るときは其苦の因であることを念うて耽らず、心を觀るときはその無常なることを念うて執着せず、諸法を觀るときは其無我なることを念うて迷う勿れ。されば衆の苦は消えるであらう。もし我が逝きたる後に、かように教道を修むるものがあるならば、阿難よ。これぞ我が眞の弟子、我が子孫である。彼は至上の位に昇るであらう。

私は天上天下の人を憂え、君王の位をすて、佛の位に登りて、三界を救うた。汝等も宜しくその身を憂え、急いで衆の惡を斷つがよい。

世尊は、こゝに雨時を過ごし給える間に、其衣を補われた。

#### 第四節 舍利弗と目連の入滅

一。或日舍利弗は禪定より出でて思ふよう。「過去の諸佛には、各々上足の弟子があつたが、彼等は皆其師に先だちて涅槃に入るを常とした。私も此七日のうちに、世尊に先だちて逝くであらう。けれども私の母はまだ佛法に歸依して居られぬゆゑ、私は今より往いて母を導き、道に入らしめ、そして私の産まれた室で、涅槃に入るであらう。まず世尊の御許を請うであらう」。乃ちその室を整えて立ち上り、嚴かに願みてゆう。「あゝ、これが此の室を見る最後の時である。もう再び此室に入ることはないであらう」。やがて世尊の御許に詣でて申しあぐるよう。

「世尊よ。私は今より涅槃に入らうと思ひます、どうぞ御許し下さい」。世尊はたゞ黙していられる。舍利弗之を請ふこと二度に及べば、世尊宣うよう。

「汝は何故に茲に止まらないのであるか」。舍利弗のうよう。「世尊。諸天が私に、釋迦牟尼佛、久しく世にいらせられ、今や歳八十に向い給えば、やがて遠からず涅槃に入りたもうであろうと告げました。世尊。私は世尊の滅度を見たてまつるに忍びませぬ。尙いつぞや世尊の仰せられましたように、諸佛の涅槃に入りたもう時に、其上足の弟子は之に先だつように、私も世尊に先だちて涅槃に入りたいと思います」。

世尊宣うよう。「汝は何處に滅度しようと思ふか」。私は那爛陀の村なる摩伽婆の里の私が産まれた家で滅度に入ろうと思ひます。「汝は善く時を知つてゐる。舍利弗よ。我が衆の中に、汝のような者を得ることは甚だ難い。今一度比丘達のために法を宣べよ」。舍利弗は仰せを受けて諸の神變を顯わし、世尊を禮して衆のまえに法を語つた。

かくて再び世尊に申すよう。「世尊よ。私は遠い古から心を盡して諸の佛を見たてまつろうと思ひましたが、その願は聽かれて、今この世において久しく世尊を拜することを得ました。世尊よ。私の世は終に迫りました。私は七日の間に、重き荷を下した人のように、この世を去るでありますよう。これが私のこの世において、世尊にさぐる最後の稽首であります」と、掌を合せ恭しく跪きて、御許を辭した。

二。諸の比丘等は花と香を持ちて、舍利弗に隨うた。舍利弗のう。「汝等は何處へ行こうとするのであるか」。比丘のう。「尊者を供養しようがためであります」。舍利弗のう。「止めよ。汝等はもう私を供養しおわつた。私の一人の沙彌が、私を供養すれば充分である。汝等各々其處にかゝりて、道を思へ。如來の出世にあいまつるは難く、又人となりて信を得、家を出でて法を學ぶことも甚だ難い。比丘等よ。もの皆は無常である、苦、無我である。涅槃のみ、永に寂かである。汝等善く之を念え」。比丘等は皆涙にむせんだ。

舍利弗が那爛陀の村端についたのは、ちようど日暮れ時であつた。彼が路傍にある榕樹の蔭に憩おうとしてゐると、一人の青年が來りて、彼に禮して立つた。彼の甥なる優波離婆多であつた。舍利弗問うてのう。「汝の祖母は今家にいらせられるか」。優波離婆多答えて、「祖母はいま家にいらせられます」。舍利弗のう。「それならば汝の祖母に、私が少時の後に家にかへることを告げてくれ」。優波離婆多は急ぎて祖母舍利に其旨を語つた。母は竊に「私の子は少き時から沙門となつたが、今や年老いて沙門の事を廢てようとするのであろう」と思つて室を掃つてその來るのを待つた。

夕方に舍利弗は、その家につき、内に入るや、遽に病烈しく發りて夥しく血を咯いた。母は驚きで、其室に退いた。諸天は下りて、恭しく舍利弗の病を看た。母は異みて舍利弗の沙彌均頭に問う

てゆう。「どうのうわけか」。均頭答えて。「尊者の徳の尊いためであります」。母驚いてゆう。「私の子さえそのように尊いならば、世尊はどのように尊く在ますであろう」。かように思つて、清き歡喜が胸に溢れた。

三。舍利弗は、道の語るべき時のいたれるを思い、母に向つてゆう。「母よ。我師の生まれたまへる時、又、其正覺を得たまへる時、又、正法を宣へたまへる時、大地は六種に震うた。世に徳と智とにおいて、我師に勝れるものは一人もありません」。舍利弗進んで法を説けば、母は喜びてゆう。「我が子よ。汝は何故にもつと早く、こうした法を私に傳えて呉れなかつたのであるか」。舍利弗ゆう。「母よ。私は今始めて汝の恩に報ゆることを得ました。母よ。どうぞ御引き取り下さい、私を獨り茲に残して下さい」。

やがて均頭を呼びて時を問えば、均頭は「曉に近くなりました」と答えた。舍利弗は、やおら身を起して、其前に集える比丘等に語るよう。「比丘等よ。四十四年の間、汝等は私と共にあつた。若し其間にありて私が汝等害うたことがあつたならば、どうぞ私を恕してくれ」。比丘等ゆう。「師よ。影の形に隨うように、私達は久しく師に仕えましたが、私達は些かにても師に對して快からぬことはなかつた。私達こそ師の寛き恕を請う外はありません」。舍利弗は偈を説いてゆう。

なおざりならず、覺をひらけ、これ我が教なり、いざ、我れ涅槃に入らん、我はすべてよ  
り解脱を得たり。

四。満月の光清き夕、舍利弗は母の許にゆき、其産室に入つて臥した。夜の間、彼は烈しい苦に襲われたが、曉に近ずきて座具を敷き、右脇に臥し、靜に涅槃に入つた。母舍利はその傍に伏し轉び泣いてゆう。「嗚呼、我子よ。汝の唇は、もはや一語をも語らないのか、汝の有てる徳を私の知ることは遅きに過ぎた。もしそれを知ることが早かつたならば、私も數多の聖衆を我家に招き、其一に三領の衣をさそけたことであろう」。夜は明けた。舍利は、其匣を開いて、財を出だし葬儀をととのえた。諸の人天は來りて、力をそえ舍利弗の乳母離婆底は、三つの黄金の花をさそけたが、群衆の混亂の中に倒れて此世を去り、其徳によりて、天上に生まれた。

七日の間種々の供養はたむけられ、ついで茶毘は行われて、阿那律は香水をもつて火を消し、均頭は恭しく遺骨をあつめ、舍利弗の衣鉢と共に、世尊の座下に持ち歸つた。

五。均頭は舍利弗の弟であつた。彼は先ず阿難のところに向つて、舍利弗の滅度したことを語り、其遺骨と衣鉢とを示したので、阿難は涙にむせび。「この日四方くらし」と歎き、世尊の座下に到つてそのわけを申し。「私、たちは舍利弗の滅度にあひまして心も亂れてしまいました」と申しあげた。

世尊の宣うよう。「阿難よ。心を勞ますことはいらぬ。長えに存在せぬものを、長に在らしめようとするのは無理である。阿難よ。過去の諸佛ですら去りたもうたではないか。もの皆は無常である。生あるものには必ず死にゆく、少しも悲しむことはない。たゞ、生ぜず又滅せずとゆう涅槃の世界、その滅こそ最も尊いものである。阿難よ。舍利弗の遺骨を私に渡してくれ。そこで阿難は遺骨を世尊に奉つた。世尊はこれを右の掌に受け、諸の比丘を呼び仰せらるゝには、「比丘等よ。此はこれ數日前まで汝等に諸々の神變を行つていた者の遺骨である。彼は久しく徳を修めて、己を完うした。彼は諸佛の如く法を説いた。諸々の人々は、彼に隨つて、教を聞いた。彼の智は大きくして、喜を含み、其心は敏くして透徹つていた。彼は欲少うして靜寂を樂み、惡を斥けて争を避け、戲論を好まず、そして道を弘むるためには大地のように厚い志を有つていた。比丘よ。よくこの、賢い法の兒の遺身を見よ」と。

かくして世尊は、舍利弗のために、一つの塔を吠舍離の門近くに建てたまひ、阿難を呼んで、諸々の比丘と共に再び王舎城に向い給うた。

六。世尊は王舎城に入つて、竹林精舎に留まりたまうた。其間は長いとゆう程でもなかつたが、目連も亦此間に涅槃に入つた。その死の因縁は實に次のようである。

王舎城の邊に住んでいた裸形外道の一群は、曾てより深く世尊を嫉み奉り思ふよう。「世尊及び聖衆が世に敬わるゝ理由の一は、尊者目連の徳が高いためである」と。ある時、目連が伊私者黎の山にある洞の中に住んでいたので、二度まで彼等に襲われたが、幸に二度とも免れることを得た。然るに一日衣を着け、鉢を持つて、城に入つて食を受けようとしたところ、裸形外道がまた襲い來つて彼を圍み、竟に彼を捉え、瓦石を以て彼をうち、彼を路邊の草中に投げ込んで去つた。目連は骨摧け、肉爛れ、痛み堪え難く、終に涅槃に入つたのである。このことが城中に聞えると、阿闍世王は直に裸形外道を縛して、殺戮の刑に處した。

諸の比丘は、深く悲しんで、「何故に、尊者目連はかような死にようをしたのか」と異しんだ。世尊は來りて諭し給うよう。「比丘よ。前の世、彼は妻に唆かされて、其老いて盲いた父母を森に誘い出して殺し、其屍を叢に抛つたことがある。この報により彼は久しく地獄に落ちて惱んだが、今また最後に此死におうたのである」と。

かくて世尊は目連のために、亦竹園の門邊に、塔をたてるように命じたもうた。そして諸々の比丘を觀わして宣うた。「比丘等よ。舍利弗や目連のこの世に在つた時、彼等の巡つた所の人々は皆幸福をうけた。それは彼等が能く外道異學を降すに堪える力があつたからである。然るに今では汝等の

中に彼等は居ない。實に此教團は、大きな損失をしたことである」と。

第五節 入涅槃の誠

一。世尊は阿難をつれ吠舍離に向うて旅立ち、恒河の岸邊において、再び舍利弗と目連との死を借

み給うた。  
恒河を渡つて吠舍離につき、翌朝市に托鉢し、その還り道に、遮和羅の祠を過ぎて宣うた。「阿難よ。香が痛む。茲に暫らく休みたいと思う」。阿難は林に入つて、眺望の美しい處をたずね、座を一樹の下に敷きまいらせた。世尊は喜んで、こゝに坐り、寂かに思惟に入りたもうた。阿難も亦世尊からあまり遠くない處へ退いて坐つた。少時して世尊は思惟を離れ、阿難に宣うよう。「阿難よ。吠舍離も楽しく、弗栗特も楽しく、十六の國、その諸々の郡邑何れも皆楽しい。照連の河は黄金を多く出し、閻浮提の地は晝のように美しい。阿難よ。四神足の人は、一劫若しくは半劫の間、壽をこゝに留めることが出来る」と。世尊は三たびまで懇に同じ語を繰り返えされられたが、阿難は心が昏んでその意味を取ることが出来ず、何とも應えなかつた。世尊は、「退いて靜に考えよ」と阿難を去らし

め、起ちて溪邊の樹蔭に至つて坐したもうた。

二。その時、惡魔が、世尊のところへ來て申すよう。「世尊よ。速に涅槃に入らせられるが善いであられました。世尊の教化は已に終りました。今は正に此の世を去りたもうべき時であります」と。世尊宣うよう。「去れ、惡魔よ。私にはよく時が解つている。まだ涅槃に入る時ではない。私は私の弟子及び衆生が、すべて斯の道を受けることが出来るまでは、涅槃には入らない」と。惡魔云うよう。「世尊よ。曾て尼連禪河の邊に在まして覺をひらきたもうた時に、私は世尊の座下に詣でて、直に涅槃に入りたもうようと、お勧め申しました。その時世尊は、去れ、惡魔よ。私自ら時を知つて居る。未だ涅槃に入るわけにはゆかない。私は私が弟子達が集い來りて、天上も人間も普く如來の神變を見るようになるまでは、涅槃には入らないと仰せられた。世尊よ。いまや聖衆は已に集い、天上も人間も、共に神變を拜したではありませんか。今こそ誠によい時である、なぜ速に涅槃に入りたまわないのでありますか」。世尊宣うよう。「去れよ、惡魔。佛は自ら時を知つて居る。此後三箇月を経て私は私が本生の地である拘尸那羅の娑羅雙樹の間において、涅槃に入るであらう」。惡魔は之を聞いて、「佛の語には詐がない、その涅槃に入りたもうのは遠いことではあるまい」と知り、躍り上つて喜び忽ち姿をかき消した。

三。世尊は、座を端してまた思惟に入り、靜に涅槃を觀じたもうた。そして自ら宣うよう。「三有を脱れることは、鳥の卵を破つて出するようになり、安らかなことである。今我心は平安である。ちようど敵を破りて戰場より歸る凱旋將軍にも似た心地である」と。時に大地が大いに動いた。

阿難は驚き覺めて世尊の御許に詣り、問ひ奉るよう。「世尊よ。今大地の動いたのは何のためでありますか。私は林にありて大きな樹の非常によく茂つていたのが、俄に暴雨のために、跡方なく摧かれたことを夢みました。ともすれば世尊は、涅槃に入りたものではありませぬか。世尊宣うよう。「阿難よ、私は三月を過ぎて涅槃に入るであろう」と。阿難は驚き悲しんでゆう。「唯願わくば世尊よ。私等を愍み今一劫だけ、或は半劫の間でも、御壽を住めたまい、永く天上人間をおめぐみ下さい」。かく三たび願うたが、世尊は阿難に告げて。「今は請うべき時でない。私は已に此後三月にして、當に涅槃に入るであろうと、惡魔に告げた。阿難よ。汝は私に侍えてくれてから、私の言を二重に使うたのを聞いたことがあるか」と仰せられた。「未だ曾てありませぬ。しかし、私はさきに四神足のある人は、命を一劫若くは半劫を住むることが出来るとうことをお聞きしました。彼でさえそうでありますから、まして神力自在の王たる如來におかせられてはと思つて、かくはお願ひ申すのであります」。私はさきに之を汝にいつた。けれどもその時、汝は應えもせず、又請もせなかつた。

佛言一たび口より出でた上は、どうして違ふことが出来るよう。愚かな者は、自分で云つて自分で違ふけれども、私はこれをなさないのである」。

阿難は悶え懐みて堪えきれず、泣いてゆうには、「佛の涅槃に入り給うことは、何とゆう駛いことであらう。世の眼の消えたもうことは、なぜかくまで速いのか」。世尊は、これを愍み、「阿難よ。悲しんではならぬ。有爲の法は皆この通りである。會うたものは一として離れぬことはない」。けれども世尊よ、衆生は久しからずして、慈の父を失うのであります。生まれたばかりの犢が、母に捨てられるようなものであります」。阿難よ。憂えてはならぬ。たとえ我一劫の間、此に住つたところで、會うたものはいつかは遂に離れねばならぬ。諸法の性相はこの通りである。私のことについてそんなに苦しんで呉れるな。たとえこの肉身は滅びたとしても、説き残した妙法の身は、いつまでも残るのではないか。阿難よ。我が坐具を持ち來れ、今は舍に歸ろうと思つ」と。

阿難は坐具をとり、世尊に隨つて、娑羅の森なる舍に入つた。

四。夕方になつて、世尊は阿難に命ぜられるよう。「阿難よ、汝往いて此林の邊に來た諸の比丘等々を呼んで、皆を講堂に集めてくれ」。阿難は命を諸の比丘に傳え、比丘等は皆講堂に集つた。

世尊は室を出で講堂に入り給ひ、比丘等は起つて禮拜し、世尊は座について比丘等に告げ給うた。

「比丘等よ。私が今まで汝等に説いたいろくくの教は、常に之を思い、之を誦じ、又之を習うて廢てはならぬ。天下の人、自ら心を正しくしたなら、諸天はために喜び、人間はために福を受けるであらう。汝等當に欲をおさえて、己に克たねばならぬ。身を端し、意を端し、言を端せよ。怒をすて、悪をすて、貪をすて、常に死に心を用い、若し心が邪を欲したなら、決して従うてはならぬ。心の婬を欲した時も、氣をゆるしてはならぬ。豪貴を欲しても亦聽いてはならぬ。心は當に人に従うべきで、人が心に従うてはならぬのである。心は天となり、人となり、惡趣となり、又聖位を開くことも出来るのである。形は心のなす所、心は諸法のなす所である。心は識を作り、識は感情を作り、感情は更に轉じて心に入る。心は實に司配者である。心は志を發して行をなし、行は命をなすものである。賢愚はまことに、その行にあり。命の長いのと天いの命にある。志と行と命と此三つはつき従うものである。そしてその作す所の好いと惡いとは、自ら引き受けねばならぬ。父が惡をなしたから、その子が代つて、罪をうけるとゆうことは出來ず、子が惡をなしたから、その父が代つて之を受けることも出來ない。善をなせば自然に福をうけ、惡をなせば禍をうけねばならぬ。今佛が、天上天下のために敬わるゝ所以も、實は皆志のなす所である。

五。故に汝等は當に心を正しくして、道を行わねばならぬ。唯道を行ふもののみが、よく世におい

て安を得るのである。かくて我が清淨の道が久しく世に存して、世間を救い、諸天を導き、一切の衆生を息わしむることが出来るのである。比丘等よ。その道とは何であるか。

比丘よ。身の貧しいことを氣にして、貪欲を起してはならぬ。樂を受けるとも、やがて苦を生むことを念うて溺れてはならぬ。心の常なく遷り變るを念うて執着してはならぬ。これが四念處である。比丘よ。惡の起らうとするのを防げよ。その已に起つたものは斷つがよい。善の已に生じたものは勤めて成長させ、その未だ生じないものは勤めて發るようによせよ。これが四正勤である。

比丘よ。常に善を欲して之に向い、常に心を一にして法を念じ、常に精進にして撓まず、常に思惟して心を亂さないようにせよ。これが四神足である。

比丘よ。道を信じ、道に進み、道を念じ、心を道に定めて、明かに四諦の智慧を修めよ。こうして修善の根を養うがよい。これが五根である。堅く道を信じて、疑と惱とを遮り、勤めて道に進んで懈怠を除き、偏に道を念じて邪の想を破り、正しく心を定めて亂る想を斥け、明かに聖諦を究めて、よく妄見を去れ。かようにして修善の力を得るがよい。これが五力である。

比丘等よ。正法を念じて忘れてはならぬ。諸法を見し、其誠と偽とを擇び、常に進み、常に喜び、偽を除いて、心を息わしめ、心を禪定に住ましめて妄見を生ぜず、不實の諸境を捨て、淨沈



の兩端を避けねばならぬ。是れ實に聖智に入る道である。これを七覺分とゆうのである。比丘等よ。正しく見、正しく思、正しく語り、正しく行、正しく生き、正しく進み、正しく道を念じ、正しく心を定めるがよい。これを八聖道とゆうのである。

六、比丘等よ。是等の教は正に世をすくう清淨の道である。汝等は衆生の福のため、また人天の隆昌のために、之を修め、之を傳えよ。比丘等よ。この三十七の道品は、諸善の源である。是を以て、心を修め、貪らず、争わず、詐らず、戯れず、嫉まず、慢らず、智慧と慈愛と恭敬との眼を以て、我が肉體以上の正法の眞身をみるがよい。諦にわが正法の眞身を見るものこそは、我が現にこの世にありて、常に彼の側から離れて居らぬことに氣附くであろう。

我今、汝等のために、末の世に至るまで苦毒の樹を變じて、甘露の果を結ばしめるようにと願う。汝等はこの法の中で、相和ぎ相敬うて、評訟を起してはならぬ。汝等は同一の師より受けたのである。水と乳との如くに争つてくれるな。宜しく我が法を守つて、共に學び、榮と樂とを同じゆうせよ。心を不要なことに使つて、命をむだに盡すことなく、覺の花の精を食べ、道の果を成じ、ついで世をして、すべて此果に腹ふくらせるように努めよ。比丘よ。我自ら此法を覺つて、他のために説いた。此法はよく汝等をして解脱の處に到らしめるであろう。汝等はよく受け辨えて、事々に善く行うがよ

い。私はこの三月を過ぎて涅槃に入るからである。

七。諸の比丘は、之を聞いて驚き悲しみ、五體を地に投げ、聲をあげて叫んだ。「佛は、何故にかくまで駛く涅槃に入り給うのであろうか。世の眼が、どうして速に滅び給うのであろうか。世尊よ。願わくば此の世に住つて涅槃にお入り下さいませ。一切の衆生はみな無明の黒闇の中に迷うて居ります。如來よ。此に在まして明燈となつて照してください。一切の衆生は悉く生死の大海に漂うて居ります。願わくば、如來、この世に在ましてすくい舟筏となつて下さい。もしそうでないならば、一切の衆生は長えに行くべき道に迷うでありますよう。」

世尊。誠めたもうよう。「汝等、且く止めよ、憂と悲とを懷いてはならない。世は無常である。牢く強く永久に變らぬものは一もない。肉身は脆い。丁度電のようである。天上の神々も死ねば、地上の王者も死ぬ。貧富、貴賤、生まれ死なぬものは一としてない。有爲のものをして變らしめまいとするは無理である。汝等は清淨であつてくれ。常に解脱を求めて放逸になつてはくれるな。

我が生涯は完全に過ぎ去つた。我が終は近しい。汝等、は此の世に残り、我は今思のまゝに安穩の處に到るのである。汝等慎み、戒めて、自分でその心を護らねばならぬ。我が説いた諸の法は、それこそ汝等の師である。善く之を奉ずることは我に仕えたようにするが

よい。若しつまずくことなく斯道を進んだならば、即ちこれ正法を護つたことになる。それゆえ我が世に在ると同じように奉じ、少しも異うな。こうしてこそ自ら解脱に達つて、諸の天人をめぐみ得るに相違ない」。

既にして日は全く暮れた。世尊は阿難をつれて舎に歸りたもうた。」

## 第二章 金光明

### 第一節 生死と涅槃

一。世尊が三月の後に、涅槃に入るべしと豫言し給うたことは、王舍城にも傳わり、妙幢と名くる菩薩は、世尊の壽命の短きを怪しんだ。「何故に世尊は僅に八十歳とゆう短い壽命をお持ちになるのであるう。世尊の説き給う所によれば、長い壽命を得るには二つの因縁がある。一つには生物の命を害わぬこと、二つには他に食物を施すことである。然るに世尊は限ない劫の昔から他の命を害い給わぬのみならず、常に善を行い、飢えたる衆生に食を施し、時にはその血や肉をもつて彼等に與え給うた。然るにどうして世尊の壽命はこのように短いのであろう。」

かように念うとき、佛の力で、その室は忽ちに博がり衆の寶にて飾られ、四方の師子座の上に、佛顯われたまえば、三千大千世界のあらゆる衆生は、佛の御力によりて妙なる樂みを受け、不具者は具者となり、盲は視、聾は聞き、啞は語り、愚者は智慧を得、心の亂れし者は、本心に歸り、賤まるる者は敬われ、穢れたる者は清らかとなつた。かゝる奇瑞のなかに、四方の佛は妙幢菩薩のために頌を説き給うよう。

海の水の滴の數を知るとも、世尊の壽命は量り難し。大地の塵を數え、虚空の邊を盡す

とも、世尊の壽命は量り難し。劫に際なき如く、世尊の壽も邊なし。

二。妙幢菩薩問うよう。「然らば世尊は何故に短い壽命を示し給うのでありましようか。」

四方の如來、告げ給うよう。

「善き弟子よ。世尊の現われ給う世は、人の壽短く、みな劣れる性を稟け、善根かすかに、諸の我見と邪の見をつのり、信を持たぬ。世尊は是等の衆生を教えて證を得しめんがために、短い壽命を示して愛と苦の想を起さしめ給うのである。譬えば多くの財寶をもてる父母の子は、財寶を見ても珍しく思うことはない。そは父の財産はいつもあると思ふからである。然るに貧しい父母の子は

國王又は大臣の舎に行きて多くの財資を見れば珍しく想う。そしてその財資を得んがために廣く方便を設けて勤め勵むであらう。そは貧しさを捨て、安樂を得んがためである。

善き弟子よ。諸の衆生もこのようである。世尊の涅槃に入り給うを見れば、「佛に逢い奉ること難い。量ない劫の間に、ちようと優曇華のように只一度現われたもう」と思うであらう。そして敬い信する心を起し、正しい法を聞いて、實の語と想い、謗ることはないであらう。善き弟子よ。世尊はかようなる方便のために、久しく此の世に住み給わないのである。説き了りて四方の佛はそのまゝ相を隠し給うた。

三。妙幢菩薩は量ない菩薩達とともに世尊の御許に詣で、具に上のことを申せば、世尊宣うよう。我つねは鷲峰山にありて、この教を説く、衆生をとこのえんために涅槃の相を示すのみ。人は邪の見にあり、我が説く所を信せず、彼等をとこのえんために、涅槃の相をしめすのみ。

その座に法師授記とゆう婆羅門があつて、多くの眷屬とともに世尊を禮し奉り、世尊の入滅し給うと聞いて、悲の涙に咽びつゝ。「世尊よ。佛は大慈悲をもつて衆生を愍み、利益を施し安ならしめ給うことは、ちようと父母の

ようにあらせられます。世の歸依處として淨き圓な月の如く、智慧をもつて照し給い、すべての衆生を一子羅睺羅のように愛し給う。世尊よ。どうぞ私に一つの願を叶わせて下さい」。

世尊は黙つていらせられたが、その威光によりて、坐中にありし一人の童子は件の婆羅門に語るよう。「汝はどのような願を世尊に乞ひ奉るか、婆羅門答えて、「私は世尊の芥子ほどの小さな遺骨を得たいと思つてゐる。その遺骨を供養し奉れば、三十三天に生まれて帝釋天になることが出来る」と聞いているから」。

四。童子この言葉を聞くや、婆羅門のために頌を説くよう。恒河の流に白き蓮を生じ、黃鳥、真白に、黒鳥、赤となり、瞻部樹に多羅の葉を生ずるとも、世尊の遺骨は得られざるべし。龜の甲にて善き衣を作り、寒き時に着け、梯をもつて上天の宮に昇り、蚊の足にて搖ぎなき樓觀を造り、又は蠅、酒に酔うて、村々に舎を作らば、世尊の遺骨を得ん。

鳥よく鵲、鶴と遊び、鷓鴣の嘴もて香山を啣みゆかば、世尊の遺骨を得ん。五。その時法師授記婆羅門も歌をもつて童子に答う。善哉、童子よ。汝は人の中のめでたき人なり、まことや佛の境界は思い難し、法身の性

はとこしえにして、道を修むるに差別なし。

諸の佛の體おなじく、説き給う法おなじ、佛を作る者なく、爾も今より無生なり。

金剛の如き世尊の體は、權に現われ給うところ、いかで芥子ばかりの遺骨もあらん。

佛は血と肉の身にあらず、いかで遺骨のましますさん、遺骨を止め給うは、たゞ衆生をめぐまんためのみ。

法身はさとり、法界はみほとけ、是ぞ眞の佛の身なれ。

六。その時、座にあつた數萬の天子達は、佛の壽命の長えなるを聞き、一樣に道を求むる心を起し、歡び勇みて、聲を揃えて歌うた。

佛はかくれ給わず、正法も亦滅びず、衆生をめぐまんために、滅の相を示し給う。

世尊は不思議におわします、御身にさまざまの相なし、人々をめぐまんために、さまざまの相好を現わし給う。

妙幢菩薩座より起ちて世尊に申すよう。

「世尊よ。若し佛に入滅なく、又遺骨もましますまぬとゆうならば、何故に世尊は嘗て、入滅あり遺骨ありと説き給うや。更に過去の佛達の遺骨ありて、天上、人間に供養せられ、福を得ること邊なし

といわれるのでありましよう」。

七。世尊、妙幢菩薩及び諸の大衆に告げ給うよう。

「善き弟子よ。佛に入滅あり又遺骨ありと説きしは、權の方便である。人々をして遺骨を供養せしむるは、佛の慈悲の力である。若し供養するものは、末の世において道を修める難を離れ、善知識に逢い、遂に生死を出するであらう。されば善き弟子よ、今より佛の入滅の眞實の理趣を説くであらう。

佛はあらゆる煩惱の障を断ちつくす故に、涅槃と名ける。又、佛は衆生の無性と、法の無性を了る故に、平等なる法身を證る故に、生死と涅槃との二つの性はないと知る故に、涅槃と名ける。又、凡ての煩惱は欲を本とし、欲から生まれるものであるが、佛は此欲を断つ故に、涅槃と名ける。既に欲を断てば一つの法も取ることはない。取らなければ去らず來らず、之を涅槃と名ける。かように取る所なき法身は生れず又滅びず、言で宣べることが出来ない。これを涅槃と名ける。又、佛はあらゆる煩惱は塵の客、法性は王と解る故に、又、眞如のみ實、その餘は皆虚妄、そして法の實の性は眞如、眞如の性は如來と解る故に涅槃と名ける。又、實の性は永く論議を離れる。そして如來はこの實の性を證り給う。是を涅槃と名ける。又「不生」とゆうことは實、「生まれる」とゆうことは妄である。愚癡は生死の海に漂よわされるが、如來の體には、妄はない。是を涅槃と名ける。